

五領ヶ台式土器の編年

——その細分および東北地方との関係を中心に——

今 村 啓 爾

はじめに

五領ヶ台式土器は、八幡一郎、三森定男両氏の発掘資料にもとづき、1936年に山内清男氏によって設定された^(文17・18)型式である。両氏発掘資料は現在東京大学総合資料館、人類・先史部門に保管されているが、印刷物として公表されることがないため、1941年に江坂輝弥氏が発掘された資料^(文118)が基準資料として扱われてきた。八幡、三森両氏資料は、筆者がここに細分するところのⅡ b 式を主とし、Ⅱ a 式および少数のⅠ a、Ⅰ b、踊場、貉沢の各型式を含むものである。江坂氏資料には、両氏資料にはみられないⅡ c 式も含まれている。

1950年には、江森、岡田、篠遠の三氏が千葉県香取郡下小野貝塚で「下小野式」を検出し、五領ヶ台式に先行する位置を与えた^(文65)が、次いで1950～1953年にわたって同県同郡白井雷貝塚を調査

第1表 編 年 表

	西 関 東	東 関 東	東北地方中部
前期	十三菩提 1	} (+)	大木 6 (古)
	十三菩提 2		大木 6 (中)
	(十三菩提 3)		大木 6 (新)
	十三菩提 4		
中期	五領ヶ台Ⅰ a	五領ヶ台Ⅰ a	} 糠塚
	五領ヶ台Ⅰ b	(五領ヶ台Ⅰ b)	
	五領ヶ台Ⅱ a	(東関東の五領ヶ台Ⅱ a)	長根貝塚 6～7 層
	五領ヶ台Ⅱ b	東関東の五領ヶ台Ⅱ b	} 大木 7 a
	五領ヶ台Ⅱ c	東関東の五領ヶ台Ⅱ c	
	大石 \ 神谷原	竹ノ下	
	貉沢 (古)	阿玉台Ⅰ a	} 大木 7 b
	貉沢 (中～新)	阿玉台Ⅰ b	

した西村正衛氏は、「下小野式」をとまなう東関東的地域色を有する五領ケ台式を検出するとともに、その型式が一連の変遷を経て阿玉台式になることを、型式、層位の両面から示した。

筆者が縄文中期初頭の土器に接したのは、1962年、横浜市港北区中駒^(文111)の宅地造成地でこの時期の遺物を採集したのが最初であった。この遺跡の土器が長野県の梨久保式や踊場式によく似ているが、関東地方の編年の中にはぴったり該当する型式が無いことを不審に思った。

1968年には、吉田格、榊原松司両先生の指導のもとに武蔵野美術大学の有志によって行なわれた横浜市港北区宮の原貝塚の発掘調査に偶然参加する機会をもった。調査の進展とともに、加曽利E式、勝坂式を包含する第1貝層の下から第2の貝層が顔を出しはじめたが、この貝層中に含まれていた数個の土器片を吉田先生にお見せしたところ、「十三菩提式と五領ケ台式の中間型式だろう。宮の原式と呼んでもよいだろう。」とことまげに言われたことを今でもはっきりと覚えている。これが、両先生の指導のもとに1972年に発表した報告書^(文112)の中で「五領ケ台I式」^{註1)}とした土器である。従来の五領ケ台式をII式とし、I式とII式の中間的様相の土器についても指摘しているので、3段階区分といってもよい。また、この貝塚の五領ケ台II式は東関東のものが主体になっていることを指摘した。

ところがその報告書を執筆したすぐ後に、やはり吉田格、榊原松司両先生の指導される横浜市緑区霧ヶ丘遺跡の発掘に参加し、その第2地区で十三菩提式最末期に位置するとみられる類例の少ない土器を検出するところとなった。そして、この土器の浮線文が沈線文におきかえられたものが五領ケ台式最古のものであると予想されたが^(文3)、ほどなく港北ニュータウンの池辺第4遺跡においてそのような土器だけがまとまって出土する事例が報告され^(文114)、五領ケ台式最古の部分が確定した。これをつけ加えることによって五領ケ台式は4段階の変遷を有することになった(I a式、I b式、II a式、II b式)。これについては簡単な発表^(文4)をしたことがあるにすぎない。1974年に十三菩提式の変遷について考えた^(文3)際に、宮の原の報告では位置づけを保留した集合平行線文の土器(踊場式)^{註2)}について、これを十三菩提式から五領ケ台I、II式にかけてずっと並存し、相互に交渉をもった系統と考えた。

最近山口明氏は中期初頭の研究にとり組み、詳細な編年案を示された。同氏の1978年の編年^(文15)では、筆者がI a式とするものとI b式とするものの順序が逆で、踊場式は五領ケ台I式に先行するものとされたが、1980年の編年^(文16)で訂正された。山口氏は筆者の型式概念を批判しているが、編年の実質である土器の新旧関係は筆者に従ったものとなった。

筆者の今回の編年では、上記4段階の次に第5段階をつけ加えた(II c式)。これは五領ケ台式直後の土器の様相からみてその位置づけが予想される口縁部区画文の発達した土器であり、山口氏がすでに第4段階として独立させている部分に大体相当するが、口縁部区画文は五領ケ台I式以来ひとつの連続した文様系統として存在するものと筆者は考えており、そうした見方をしていない山口氏の編年とはおのずから違いがある。この2～3年の間の大きな成果として、長野県船霊社^(文142)、同県大石^(文134)、東京都神谷原^(文100)(櫛田第II遺跡)において、五領ケ台式と猪沢式の間に入る土

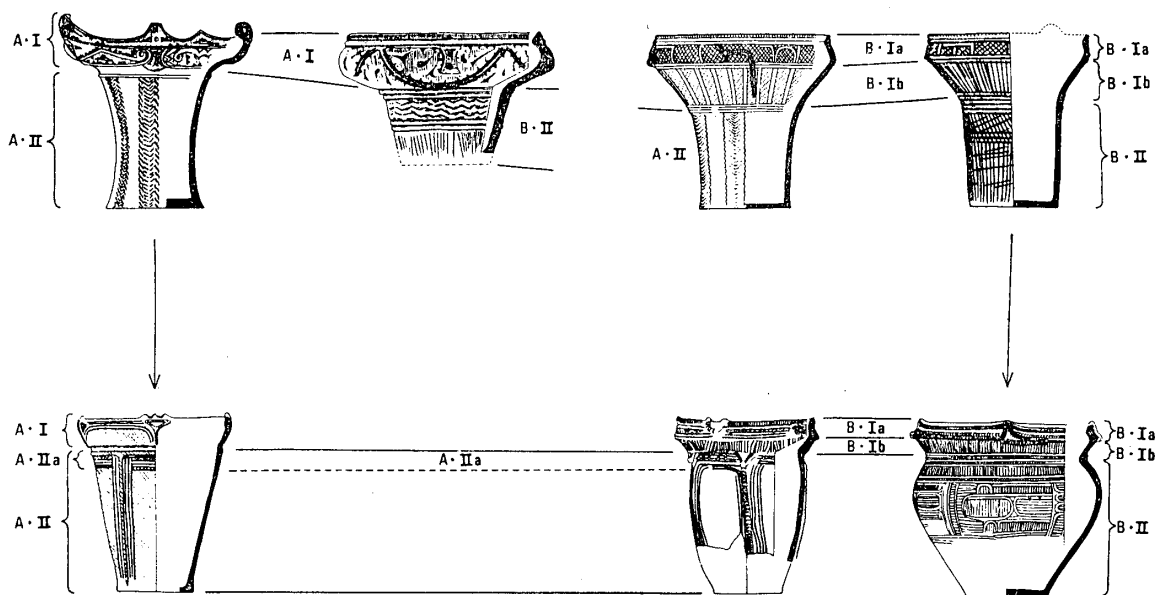
五領ケ台式土器の編年

器群が相次いで報告され、両型式の間にあったギャップが埋められた。これによって前期末から中期中葉への土器の変化が切れめなくたどれるようになったのである。

小論の主題は五領ケ台式土器の細分編年である。かつて2型式に分けたものを今回は5型式に細分し、これに後続する1型式を追加する。このような作業は細分のための細分と受けとられるかもしれないが、小論をよく読んでいただければ、これが五領ケ台式の変遷過程を理解するための必要最低限の区分であることを知られるであろう。土器型式の影響の伝播も分布圏の変化もその細分1型式内でおこっている。

五領ケ台式土器については、編年の手がかりとなるような層位的所見がわずかししか知られていない。従ってその編年の組立ては、主として型式学的方法によらなければならない。型式学的方法は、ときに主観の呈示にすぎないといった傾向を有することがあるが、幸にして西関東では、急増した発掘資料の中に、これから論じる五領ケ台式各段階について、それぞれほぼ単純な資料を出土した遺跡をあげることができ、時期区分に関してかなりの客観性が保障されている。

編年研究は、地域、地域で別個に組みあげられ、それを横につなぐことによって、縦、横に支えあう強固な体系をなすことが望ましい。しかし残念ながら、資料の不足している東関東については、西関東の編年を対照しつつそれに依存する形で整理したにすぎず、不明瞭な点を多分に残している。また、中部高地の五領ケ台式は、西関東のそれと似すぎているために独立した編年は組み立て難い。しかし、中部高地を本拠地とする踊場式土器は、今回はとりあげないが、ほぼ五領ケ台式各段階に



第1図 五領ケ台式（左列）と踊場系（右列）における文様帯の交換。
 図中のAは五領ケ台式の文様、Bは踊場系の文様を示す。
 I a, I b, II a, IIは文様帯の記号。上段は五領ケ台I b式段階、下段はII b式段階。五領ケ台II b式では踊場系と五領ケ台式の文様帯を兼備する土器が一般的である。（文献4で用いた概念図）

対応する変遷をたどっていることが認められるし、遠く宮城県長根貝塚^(文37)における層位的編年は、関東の細分編年とよい一致を示している。

五領ケ台式の成立を考えるうえで、東北地方の土器の理解は不可欠である。東北地方の編年について特に1章を立てたのはそのためである。五領ケ台式の変遷は、長野県を中心として西関東にも強力に進出している踊場式の系統との関連なしに論ずることはできないが、小論では、五領ケ台式を理解するうえでの必要最低限の記述にとどめた。伊勢湾周辺を中心に分布するとみられる北裏式の系統と、さらに西の近畿、中国、四国地方に分布する鷹島式の系統については今回はふれないことにする。

1 西関東を中心とする編年

十三菩提式の後葉

十三菩提式の変遷についてはかつて略述したことがある^(文3)。文様の変化を中心に見て、4段階に分けることによってその変遷を理解しようと努めた。これは型式の細分というより土器の変化を説明するために大体の傾向で区分したにすぎないが、第1段階にはとけばら^(文105)という単純遺跡があり、第2段階は川崎市十三菩提遺跡^(文108~110)がこの時期の資料を中心としており、第4段階は霧ヶ丘^(文115)にまとまって存在するので、それぞれ時間的区分とみてもよいのではないかと思われる。問題は第3段階としたものであり、これはいくつかの遺跡から第2段階と第4段階の間に入りそうなものをピックアップしたものであって、この段階のまとまった資料がひとつの遺跡で出土した例が知られておらず、第2段階や第4段階とはっきり時間的に区分できるという十分な根拠がない。縄文各時期の資料が急激に増加している中で、この十三菩提式後葉（以下、第3、第4段階をまとめてこう呼ぶ）の資料はほとんど増加せず、従ってこの問題の解決も今のところ困難である。

十三菩提式第3段階とした土器は、文様帯が口縁部に圧縮され、胴部には縦の羽状縄文と結節回転文が加えられている。小さなジグザグの浮線文、内外に厚く、まるみをおびた口唇部の形態（3図1）は特徴的である。第4段階とした土器はソーメン状浮線文の発達が著しく、橋状把手も五領ケ台Ⅰ式と同じ位置につけられたものがあり（3図9, 11, 12）、浮線文を沈線文におきかえれば五領ケ台Ⅰa式になるといってよいほど近似性が強まる。この時期にはすでに同図14のような沈線文による土器も存在した可能性がある。十三菩提式は器形全体がわかるものが少ないが、破片から推定すると、大木6式に共通する胴中部が球形にふくらむ土器（3図1, 3, 7はこの形であろう以下これを球胴形と呼ぶことにする。）が少なくないようで、これは十三菩提式の初頭から存在する^{註3)}ばかりでなく、その萌芽は諸磯c式にまでさかのぼって、低い台をつけたような形の底部^{註4)}として認められる。

十三菩提式第3、第4段階とした土器は、西関東、東関東に断片的な資料が点々とみつかっており、後述のように大木6式後葉の土器の一部と強い近似性を有するが、中部高地でこれと同じよう

な土器がほとんど知られていないのは、この時期に踊場系の土器が成立してその分布圏に属したからであろう。踊場式の中にも十三菩提式の第3～第4段階に共通する小さなジグザグの浮線文、格子状の浮線文、口唇部や隆起線に巻きつけたような浮線文を有するものがあり、時間的並行関係を知るうえでの手がかりになる。五領ヶ台Ⅰa式の母体である十三菩提式第4段階の土器が今のところ関東にしかみられないことは、五領ヶ台式の成立を考えるうえで重要である。なお、西関東の十三菩提式には条痕文、撚糸文の粗製土器が伴出する^{註5)}ことを付記しておく。

五領ヶ台Ⅰa式

五領ヶ台Ⅰa式は十三菩提式第4段階のソーメン状浮線文を沈線文におきかえたものといってよく、器形、文様上両者は密接な関係にある。器形は4図1, 2のような外反り気味の円筒形の胴部の上に内彎する口縁部がついた形、さらにこの胴部と口縁部の間に球形にふくらむ部分が入った球胴形（適例ではないが4図9）があるが、十三菩提式よりふくらみが小さくなる。口縁は平縁のほか波状口縁も多い。少数だが円筒形もある。Ⅰa式の口唇部の断面形は上が平らで、内側に凸字形に突出するものがあり（4図3）十三菩提式第4段階（3図6, 7）と共通する。口唇上の渦巻形の突起（4図1, 2, 4）は特徴的である。

文様は口縁部に文様帯として加えられ、胴部には縦方向に回転した縄文が加えられるのが普通である。この縄文は羽状に組まれたり、両端に結節回転文が加えられたりして文様効果を発揮する。口縁部文様帯の下にY字形、V字形などの懸垂する文様を加えられることも多い。口縁部文様帯の上と下を隆起線で画し、その隆起線を橋状把手で結ぶのが口縁部文様帯の基本的な構成で、これは一種の区画文を形成している。文様図形は渦巻、同心円、三角形、梯子形などであるが、渦巻とそれから伸びる斜線の組合せ（4図2, 3など）は諸磯c（新）式以来の文様図形である。円筒形の土器は口縁部文様帯が縮小または省略された形^{註6)}とみてよく、口縁部文様帯が幅狭か全く省略されているが、かわりに懸垂文の部分が発達したものがある（4図7）。文様図形は比較的太い沈線で描かれ、文様図形を描いたあと短沈線を充填していることが特徴であり、これは十三菩提式第4段階の浮線による施文順序と同じで、Ⅰb式の施文順序とは逆である。三角形刻文が多用されるが、文様図形の間余白にあてはまった形で刻まれるものの他に、沈線に沿って機械的にいくつも並べられたものもある。2列が組み合って複合鋸歯文のようになったものも存在する。渦巻や同心円のまわりに三角形刻文を配したもの（4図6など）は一種の玉抱き三叉文を形成するが、この文様は五領ヶ台式全体を通じて存在し、特にⅡc式で盛行し、貉沢式には稀であるが、新道式で復活し勝坂式一般の玉抱き三叉文へ続く。

Ⅰb式に盛行する細線文はⅠa式にも存在するらしい。横浜市中駒^(文111)、同市池辺第4遺跡^(文114)で出土したⅠa式に近い時期とみられる細線文の土器（4図8, 9, 11, 12）は細線文の部分を平行線や結節沈線文（爪形文）できちんとした文様図形の形に輪郭し、口唇部上面が平坦で内傾するという特徴がある。静岡県沼津市長井崎^(文153)の完形土器（4図10）もこれに相当するものである。

I a式は器形、文様上明らかに十三菩提式第4段階と五領ヶ台I b式の中間に位置するが、時間的に両者と区分できることは、十三菩提式第4段階を主体とする霧ヶ丘第2地点、ほとんど五領ヶ台I a式だけの池辺第4遺跡、五領ヶ台I a式がほとんどなく^{註7)}I b式がまとまって存在する宮の原貝塚など、同一地域(横浜市北部)に存在する遺跡の対比によって明らかである。

この五領ヶ台I a式は中駒、池辺第4、東方第7^(文113)など横浜市北部の遺跡で多く出土しているが、北は宮城県、岩手県、秋田県にほとんど同じものが存在することは後述する。東関東では最近、茨城県虚空蔵貝塚^(文54)でまとまった資料が発見された。一方、中部高地や東海地方では太めの沈線を特色とする典型的なI a式は知られていないが、かわりに上記したI a式に並行する可能性の強い細線文の土器(4図10など)が多少知られている。このように五領ヶ台I a式が北とのつながりが強いことは大いに注目すべき点である。横浜市北部の遺跡で西関東を代表させることができるなら、この時期には東関東と西関東の地域差は存在しないといってもよい。「下小野式」^(文65)註8)と呼ばれる粗製の土器を大量にともなうことでも東西共通している。しかし、後述するように、五領ヶ台II b式期に横浜市北部が東関東の土器の分布圏に属するという事実を考慮するならば、I a式期にも東関東の土器がこのあたりまで広がっていて、ここにあげた横浜市北部のI a式は実は東関東的な土器であり、これに対してI a式期の細線文土器が西に寄って分布していた可能性を考慮しなければならないが、今のところ後者の資料が乏しく、確実なことはいえない。

五領ヶ台I b式

I a式から変化したもので、宮の原貝塚の報告で五領ヶ台I式としたのはこの型式である。

器形はI a式とほとんど同じであるが、口唇部の断面形など細部ではちがいがあがる。I a式では口唇上に平坦面があることが多く、凸字形に内面へ突出するものが多いが、I b式では口唇上に平坦面をもつものは少なく、断面三角形で内側へ突出するものが多い。文様は口縁部に文様帯として加えられ、胴部には縦方向の縄文が加えられるのが普通である。羽状縄文、結節回転文の使用がさかんであるが、羽状縄文の使用頻度はI a式より減少するようである。口縁部文様帯の下にY字文などの懸垂文が加えられることも多い。胴中部がふくらむ土器では、このふくらみの部分に2段目の文様帯が加えられたものがある(5図1, 5)。円筒形の土器では口縁部文様帯が簡略化している(5図8, 12)。口縁部文様帯に橋状把手の使用がさかんであり、文様帯の上下を画する隆起線を結ぶように加えられるものの他、下の隆起線上加えられるものがあり(6図1)、これは横長の棒状貼付文になっているものもある(5図3, 6図3)。口縁部の文様は渦巻、三角形などで、I a式よりも簡略になる傾向がある。沈線に沿って多数加えられる三角形の刻みも特徴的である。踊場系から受け入れたとみられる山形文(5図11, 13)や瓦状の押しき文(5図10, 6図3)も口縁部文様帯の橋状把手で区画された中によくみられる。この時期の最大の特徴は口縁部文様帯に加えられるハケ目のような細線文で、I a式の太めの沈線文の土器とは逆に、細線文のあとから文様図形が刻まれる。細線文を縄文におきかえたもの(6図1~3)も存在する。これはII a式へ続く新し

い要素である。5図2の胴部は踊場系を借用している。

このようにⅠb式はⅠa式から変化したことを示す色々な特徴を有するが、同時に口縁部文様帯の単純化などⅡa式への近似性を有する。そして宮の原貝塚でまとまって出土していること、八王子市明神社北遺跡^(文96)では前後の型式を混えることなく大量に出土していることから、独立した時期を画することが知られる。

分布^{註9)}の点では西関東、中部高地に濃い分布があり、東海地方東部にも知られている。東北地方には全く同じものは少ないが、近似のものは存在する。東関東では虚空蔵貝塚^(文54)と千葉県高根北^(文74)にわずかな資料があるくらいである。東関東ではこの時期に独自の五領ヶ台式が分布していた可能性も考えられるが、それとはっきり指摘できる資料も知られていない。いずれにしても東北地方とのつながりが弱まり、中部高地に濃い分布を示すという点でⅠa式の分布と相違する点に注意する必要がある。

五領ヶ台Ⅱa式

宮の原貝塚の報告で7群b類とし、Ⅰ式とⅡ式の間間的な様相を示すとしたものに大体相当する。その後各地で出土したものを概観し、ひとつの独立した時期を画するものと考えた。

円筒形の胴部の上に内彎する口縁部がつく器形が一般的であるが、Ⅰ式では外反りの胴部が多いのに対し、この時期にはふくらみをもつ胴部が多くなる。円筒形の器形が増加するのは、口縁部文様帯の収縮と関連がある。口唇部の断面形はⅠb式に似て内側へ突出する三角形のものが多く、突出は弱いものが多い。口唇外面に隆起帯をもつものも残るが、隆起帯を省略したものも多く、特に口縁部文様帯が幅広で内彎する器形(6図5~11, 7図1, 2)ではほとんど省略される。口唇上には刻み目をもつものが多い。この時期には口縁部文様帯の簡略化が顕著であり、特に円筒形の土器では口唇直下に縄文帯と無文帯が加えられるにすぎない(7図3, 4, 7)。口縁部文様帯が幅広で内彎する土器でも、口唇直下に縄文帯が加えられ、その下を区画する沈線に向って刺突文が加えられるくらいで、本来口縁部文様帯の中心であった部分が無文になるものが多い(6図6, 8, 9, 7図1)が、文様を加えられる場合もあり、踊場系からの借用とみられる縦の集合沈線文(6図10, 11, 7図12)、山形文(7図11)、瓦状の押し引き文または刺突文(7図9, 10)のほか三角形や弧状の区画文(7図20, 21)玉抱き三叉文(6図5)もみられることはⅡc式で盛行する区画文の系統性を考えるうえで重要である。橋状把手の使用は減少するが、全くなくなるわけではなく、少数の例をみることができる(7図9, 13~15)。縦の隆起線や沈線(7図16~19)は橋状把手からの変化であろう。Ⅰb式で2段目に加えられた小さな橋状把手が棒状の貼付文に変化したものは多くみられる(6図7~9, 11, 7図1~3, 5)。Ⅱc式に多いY字形の隆起線もこの段階からみられる(6図10, 7図22)。口縁部文様帯の簡略化とは逆に、胴部文様帯の発達がみられる。Ⅰb式から続くY字文などの懸垂文(6図4, 5, 7, 7図1)とは別に、胴部上半に新たな文様帯としての発達を示すもの(6図8, 7図3, 22)があり、複合鋸歯文の小さなものもみられ(7図22)。

Ⅱ b 式の胴部上半の文様帯の起源をなす。胴部を縦の沈線や隆起線で分割するものが多くなることは、五領ヶ台Ⅱ式の胴部区画の基本が成立するという点で重要である。縦の沈線が底部の線まで達しないものが存在する（6 図7～9）ことが注意される。このほか沈線と刺突による文様が胴部いっばいに展開する例（6 図10, 7 図7）もあるが、文様図形は様々であり、現在の段階で整理することはむずかしい。藤森栄一著『縄文式土器』（中央公論美術出版）に紹介された梨久保遺跡出土例（挿図21）は胴部いっばいに玉抱き三叉文を重ねて加えた他に類例のない土器で、時期の判定に迷うが、全体的な形と文様の割りつけからⅡ a 式頃ではないかと思われる。7 図6 も胴部に大きな玉抱き三叉文が加えられている。この時期の土器の特徴として目につきやすいのは口唇部の刻みと口唇外面の縄文帯および沈線に沿う刺突文である。口唇外面の縄文帯はⅠ b 式の細線文が縄文におきかえられたものとみられるが、Ⅰ b 式から出現しており、Ⅱ b, Ⅱ c 式にも残るので、時期判定の確実なメルクマールにはならない。沈線に沿う刺突文はⅠ b 式の沈線に沿う三角形刻文が半截竹管による小さな半円形の刺突文におきかえられたものとみられるが、このような刺突文はⅡ b 式、Ⅱ c 式（13 図9）にも残るのでやはり確実なメルクマールにはならない。なお、この時期の沈線は半截竹管で2本同時に引いたものより細い丸棒で1本ずつ引いたものが多く、同じことはⅡ c 式にも言える。胴部の縄文は装飾的な意味が減少するようで、結節の回転文は多く見られるが、羽状縄文はほとんどなくなるらしい。6 図4の宮の原貝塚の土器は、口縁部に蹄場式の影響を強く受けたもので、報告書ではⅠ式としたが、今回、口唇部の刻みを重視してⅡ a 式とした。

Ⅱ a 式期には五領ヶ台Ⅱ式を通して特徴的に存在する口縁部内面に押し引き文を有する浅鉢が出現する。押し引き文は幅の狭いものが多く、外面にも文様を有するものが多い点でⅡ b 式、Ⅱ c 式の浅鉢とちがいがあがる（8 図1～7）。

このⅡ a 式は文様の点で前後の型式とはっきり区分しがたい点もあるが、器形、文様帯、文様に独自のものを一括して有していることから一時期を画するものとみてよいであろう。胴部上半の文様帯の成立、胴部の縦分割のはじまり、上記浅鉢の成立などⅡ式全体の特徴がこの時期に出現することを重視し、Ⅱ式のはじめの段階に入れることにした。

遺跡での出方は宮の原貝塚や梨久保^(文139)でⅠ b 式に近い年代的位置を暗示するが、同時に五領ヶ台貝塚の八幡、三森資料^{註10)}のようにⅡ b 式と一緒に出ることも多く、やはりⅠ b 式とⅡ b 式の間的位置を思わせる。長野県茅野市判の木山西2号住居址^(文136)は資料が乏しいながらこの時期の単純とみられ、岡谷市後田原遺跡^(文143)もこの時期の単純な様相に近いことから、独立した時期を占めるものと考えてよいであろう。このⅡ a 式は関東西部、中部高地、東海地方東部の多くの遺跡から報告されているが^{註11)}、東関東にはほとんどなく、東北地方では全く知られていない。これはこの時期に東関東に独自の地域色を有するⅡ a 式並行期の土器が分布するに至ったためである。

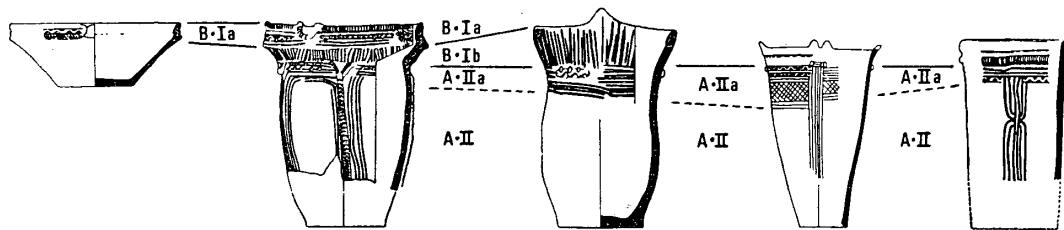
五領ヶ台Ⅱ b 式

五領ヶ台Ⅱ b 式は八幡一郎、三森定男、山内清男^{註12)} (文17)、江坂輝弥^(文118)の各氏による「五領

五領ケ台式土器の編年

ケ台式」の主要部分に相当するものであり、本来の五領ケ台式は大体この型式をさしたものと
てよい。厚手のものが多く、太めの半截竹管、太い隆起線などの使用による大柄な感じは、いか
にも中期の土器といった感じであり、五領ケ台Ⅰ式の繊細な印象にくらべて相当なへだたりがある。
系統的には踊場系の強い影響を受けており、五領ケ台式の系統と踊場式の系統の融合によって成立
した型式といってもよいであろう。

Ⅱ b 式の器形は他の時期と同様、文様帯およびその系統と密接不可分の関係にある^{註13}。Ⅱ b 式
ではなぜか五領ケ台系の口縁部文様帯を有する土器は少なくなり、多くは踊場系の口縁部文様帯を
有するようになる。くの字形に内折するこの系統独特の口縁部の形を有するもの（8 図10~12, 9
図1, 2, 4）のほか、口唇部文様帯、つまり内折する部分を省略し、内彎する口縁部のみを有す
るもの（9 図5, 8, 10 図1~3, 7）も多い。波状口縁（9 図7, 9, 10 図5, 6）は本来の五
領ケ台式の口縁部から引きついだものであろう。さらにこの部分が萎縮したり全く省略されて、胴
部文様帯だけになった土器も多い（10 図8~12）。胴部の形には、ふくらみをもつもの、円筒形に
近いもの、上部へ向って太さを増すものなどがある。口縁部と胴部のさかいめが球形にふくらむ球
胴形（9 図7, 11 図6？）は少なくなる。口唇部文様帯の巻貝状の把手（9 図2）や口縁部の縦の
集合沈線は踊場式の系統を引くものである。口唇部の複合鋸歯文（9 図1, 2）は位置としては踊
場系の口唇部文様帯であるが、文様自体は五領ケ台系であろう。五領ケ台式本来の系統の口縁部文
様帯を有する例は少ない。長野県大石1号住居址^{文134}（報告書109図4）に好例があるが図示でき
なかった。千葉県船橋市後貝塚（？）例^{文80} 註14（21 図11）はこの時期の西関東と東関東の中間的
なものであろう。橋状把手の確実な例は知られていないが、上記後貝塚例、11 図1, 2 にみる棒状
Y字状の隆起線に変わったものと思われる。五領ケ台Ⅰ式の橋状把手による口縁部区画文は、西関東
においてもこのようなものを中継としてⅡ c 式の口縁部区画文につながるとみられるが、11 図1 の
Y字形の隆起線は6 図10から、11 図3の弧のつながる区画は6 図6, 9 図3の隆起線からの変化も
考えられる。11 図4, 5, 6 は胴部文様からⅡ b 式に属するものとみられるが、5 は玉抱き三叉文
を、6 は沈線による区画文を有する。4 のような隆起線によるしっかりした区画文を有するものに



第2図 五領ケ台Ⅱ b 式における文様帯の省略

文様帯の省略という現象は色々な地域の色々な時期の土器に見られるが五領ケ台では特に顕著で各時期
にみられる。五領ケ台式を理解するためにはこの現象をよく理解する必要がある。左から2番目の土器が
すべての文様帯を有するもので、これを基本として、1つ、2つ、3つの文様帯を省略した土器が作られ
ている。記号は第1図と同じ（文献4で用いた概念図）

なると、Ⅱ b式に含めることにはためらわざるをえないが、胴部文様はⅡ c式より古いものとみられるし、文様を加えるのに半截竹管が用いられていることもⅡ c式一般とは異なる。山梨県下向山の資料^(文129)はすべて同一時期に属するものとはいえないが、Ⅱ c式につながる要素をもつ土器が多く、Ⅱ b式のうちでも新しい様相を示しているのかもしれない。Ⅱ b式の胴部文様は、口縁部とは逆に、五領ケ台系の基本的構成をとるものが多い。貼付文を起点として垂下する沈線または隆起線で胴部を縦に4分割することは、Ⅰ b式で稀に(5図3)、Ⅱ a式でかなり多く行なわれた器面の割りつけである。胴部文様は複雑で、変化に富むため簡単にまとめることはできないが、最も一般的なのは、1列または数列の複合鋸歯文と平行線や格子目を何段にも重ねるものである。この胴部文様帯はⅡ a式で出現したものであるが、平行線や格子目は踊場系の影響であろう。Y字文から変化して下向のコの字形をならべた形になったものもあり(10図1, 2)、これが上記の文様帯の下に加えられることもある。胴部の渦巻文は東関東からの影響であろうか。胴部文様に縦の区画がなく、集合平行線のみからなる9図4, 5は踊場系の胴部文様といってよいであろう。従って、これらの土器はⅡ b式段階の踊場式ということになる。Ⅱ b式では縄文は装飾性を失ない、結節の回転文はみられるが、羽状縄文はない。この時期には縄文を有する土器自体が少なくなるが、これもやはり本来縄文を用いることが少ない踊場系の影響であろう。

このように踊場系が西関東にまで強い影響を及ぼした反面、踊場系の本拠地であった可能性の強い上伊那地方にも五領ケ台系の影響が及んでいる。10図1, 2は他のⅡ b式期の土器と大きく異なるものではないが、平出三類A系統の基本的な形の成立を示している。五領ケ台Ⅱ b式で普遍的な、踊場系と五領ケ台系を合せたこのような形は、その後も上伊那地方を中心に分布する平出三Aの系統として独自の變遷を続け、さらにいわゆる櫛形文土器の系統へとつながるのである^(文6)。このような上伊那地方におけるその後の系統を考慮するならば、10図1, 2はⅡ b式一般の基本的な形を有していても、年代的にはⅡ c式まで下る可能性もないとはいえない。

西関東と東関東の土器の区別は歴然としたものではなく、中間的な土器も存在する(12図1~4, 21図2, 11)。口唇直下に短沈線を縦にならべてふちどりするものは東関東の土器に多く見られる。球胴形の器形も東関東では少なくない。

口縁部内側に押し引き文を加えた浅鉢(12図5, 6, 8~11)が大量に存在するほか、深鉢の口唇部文様帯を借用した浅鉢(12図7)も現れる。Ⅱ b式がⅡ a式から変化したものであることは、胴部文様、特に複合鋸歯文の発達や浅鉢の変化から理解されるが、遺跡での出方でも、五領ケ台貝塚^(文118, 119)、東京都八王子市西野遺跡^(文95)など両者が出土する遺跡が多いことから、年代的な近さがうかがわれることは先述した。逆に山梨県下向山^(文129)のようにⅡ a式がみられない例は、Ⅱ a式とⅡ b式が時間的に区分できることを示している。しかし、下向山のようにⅡ a式類似のものが全くないことは珍らしく、多くの場合、Ⅱ a式のような口唇部の縄文や小さい半円形の刺突文を有する土器を多少ともなうことが一般的なのは、このようなものがⅡ b式にも残存することを示すのかもしれない。13図9の口縁部は刺突文が大きいことを除けばⅡ a式に近いが、胴部文様はⅡ c式

と考えざるをえないであろう。

このⅡ b 式は関東西部から中部高地、東海地方東部にわたって多数の遺跡から豊富な資料が報告されているが^{註15)}、東関東では出土例が乏しく、代って独自の様相をもつ土器が分布している。この時期、横浜市北部の宮の原貝塚には東関東の五領ヶ台式が主体的に存在し、東関東の五領ヶ台式の分布圏の拡張があったらしいが、東関東で維持されてきたとみられる五領ヶ台式本来の口縁部文様帯がⅡ c 式で広く復活する現象と関係があるかもしれない。

五領ヶ台Ⅱ c 式

口縁部に沈線や隆起線で弧形、三角形、楕円などに区画した文様が発達するⅡ c 式は五領ヶ台貝塚の八幡・三森資料中にはみられないが、江坂資料中^(文118)には数片みられる。西村正衛氏は雷7類として五領ヶ台式と阿玉台式の中間に位置づけた土器群の中に含めている^(文67)。山口明氏もこの種の土器をG型態、H型態として同氏編年の第4段階に位置づけた^(文15)（後にこの第4段階に含めていた五領ヶ台式直後の部分を除いた^(文16)ようである。）。このⅡ c 式は器形、文様上多くの点で五領ヶ台式直後の型式へつながることと長野県船霊社^(文142)、頭殿沢^(文135)の大量のⅡ c 式がⅡ b 式をほとんど混えずに存在することから、明らかにⅡ b 式とは切り離せる1段階を占めるものといえるが、この種の区画文をⅡ b 式の踊場系の口縁部文様帯からの変化によって生じたと考え、すべてⅡ b 式より後に位置づける山口氏の見解^(文16)には賛成できない。その理由は、Ⅱ c 式の特徴である内彎する口縁部、波状口縁、口縁部文様帯の区画文と玉抱き三叉文、縄文などがいずれもⅠ a、Ⅰ b 式に普遍的に存在し、Ⅱ a 式に続いていることであり、Ⅱ b 式段階で1度とぎれてⅡ c 式で再発生するという見方は不自然なことである。すでに前項で述べたように、口縁部に区画文を有する土器にも、胴部文様がⅡ b 式に共通するものがあり、このようなものは口縁部区画文を有するためにⅡ c 式に位置づけるよりも胴部文様を重視してⅡ b 式に属するとみるべきであろう。五領ヶ台式本来の口縁部文様帯は、東関東では、Ⅱ a、Ⅱ b 式で簡略化するものの踊場系の影響を受けることなく続いている。Ⅱ c 式における口縁部区画文の発達は、Ⅱ b 式期における踊場系の影響から解放された五領ヶ台系の復活といってよいであろう。

Ⅱ c 式の器形は円筒形の胴部の上に内彎する口縁部のついたキャリパー形が一般的であり、平縁と波状口縁がある。胴部がまるみをもってふくらむ器形（14図2、4、6）もある。口縁部が萎縮したり、全く省略されて円筒形の胴部の上に肥厚部を有するだけになった土器（15図4～6）も多く、肥厚部上には縄文だけが加えられるものが多いが、一方、この肥厚部に口縁部文様帯が圧縮されたような文様が彫刻的に加えられたものがある（14図7）。このような幅のせまい口縁部文様帯と波頂部の特徴的なつまみは、神谷原式で盛行する。Ⅱ c 式では胴中部が球形にふくらむ器形はほとんどなくなるらしいが、14図5は無文帯（普通は口縁部と胴部の間に位置する）の位置からみて、口縁部が収縮し、その下の球胴部が口縁部の代りのような形とみられる。

口縁部文様帯は縄文の加えられるものが多いが、これを欠くものもある。隆起線と沈線、または

数本の沈線で弧形、三角形などが接する区画を作り、その中に渦巻、同心円、三角形刻文などが加えられる。直線と弧の接する部分に複合鋸歯文が加えられる(13図2, 12)ものも多い。沈線は半截竹管ではなく、丸棒で1本ずつ加えられるものが一般的である。口唇直下に短沈線をならべてふちどりにする例(13図6, 10)もあるが、これは東関東ではⅡb式期からよく行なわれていた。踊場系の口縁部文様帯は確実な例を指摘し難いほど少なくなるが、上伊那では平出三Aに一層近づいたものとして存在する^{註16)}。

胴部文様帯はY字形を起点として垂下する隆起線によって器面が4分されるものが一般的である。起点が棒状の貼付文のこともある。Ⅱb式で発達した胴部上半の文様帯は簡略化し、普通、数本の沈線におきかえられる(13図1～5など)。Ⅰ式以来の沈線によるY字文の変化したもの(13図8, 15図1, 3, 4, 6)も存在する。多数並列させたものは中部高地に例が多い。口縁部文様帯が省略された土器では代りに胴部文様帯が発達したものが多く、Y字形隆起線を区画文に見たてて、その区画の中に玉抱き三叉文などを配するもの(14図3, 7, 15図5)のほか、口縁部の区画文と同じ文様を胴部に加えたものもある(13図6, 14図2)。この時期には再び縄文が多く用いられるようになるが、Ⅱb式と同様、羽状縄文は用いられない。結節の回転文は多い。

Ⅱb式に引き続いて浅鉢も多い。内面に押し引き文を有するものはⅡb式に似ているが、文様を加える画面の縁辺部をふちどるくせがある(15図7, 8, 9)。縄文が加えられたものがある。踊場系の口唇部文様帯を有する浅鉢(15図10, 11)はⅡb式期とあまり変わらないようである。

Ⅱc式は関東から中部高地、東海地方に広く分布するが^{註17)}、西関東と東関東の地域差は弱まり、明確な区分はしにくくなる。

ここでふりかえて五領ヶ台式の基本的な文様構成の成立過程をみると、十三菩提式後葉で成立した内彎する口縁部に加えられる口縁部文様帯と胴部の縄文帯という構成を受けついだ五領ヶ台Ⅰ式から、五領ヶ台Ⅱ式では区画文を基本とする口縁部文様帯と縦の分割を基本とする胴部文様帯の組合せという構成ができあがるが、この基本的な形は関東の五領ヶ台式直後型式(神谷原式、竹ノ下式)、阿玉台式、大木式の諸段階を経て加曾利E式へつながる。中期の土器の基本的な形が五領ヶ台Ⅰ式、Ⅱ式の変遷の中で成立したことは重要である。

五領ヶ台式直後型式(大石式、神谷原式)

Ⅱc式に続く型式としては、西関東～中部高地におおむね2種類のものが知られている。第1は五領ヶ台Ⅱc式の沈線文をそのまま押し引き文におきかえたような土器で、図示したもの(16図1～9)のほか、最近東京都神谷原^(文100)でかなりまとまった資料が報告されたが図版作製の時間的な都合で小論には収録できなかった。これを仮に「神谷原式」と呼ぶことにしたい。これは東関東の該期型式、仮称「竹ノ下式」と類似性の強い型式である。第2の型式はⅡc式に再び踊場～平出三A系統の影響が加わった土器で、従来から知られている長野県猪沢6号住居址^(文131)の資料のほか最近同県船霊社11号住居址^(文142)、同県大石遺跡^(文134)の資料が加わった。神谷原にも多い(1群G

類)。猪沢6号住居址の土器は猪沢式の一部とは認められていなかったので、ここでも猪沢式とは分離し「大石式」と呼ぶことにしたい。

神谷原式には五領ケ台Ⅱ式と同様に、口縁部文様帯の広いものと狭いものがある。神谷原遺跡の資料でみると後者のほうが多いようである。隆起線と数条の押し引き文、押し引き文の囲む三角形の空間に加えらるる三角形刻文が調和して整った文様を形成している。神谷原式と後述する竹ノ下式のちがいは、先行する西関東の五領ケ台Ⅱc式と東関東の五領ケ台Ⅱc式のちがいと同様、はっきりしたものではないし、西関東では大石式の進出がめだっている。それでもあえて神谷原式と竹ノ下式を区分しようとするのは、両者の間に次のような重要なちがいが認められるからである。

竹ノ下式の場合、口縁部文様帯の幅が狭いものでは、口縁部文様帯と胴部文様帯（懸垂文を有する）の間に幅の広い無文帯ないしは文様の簡素な部分をおくことが多い（24図1, 6, 8, 9?, 10, 12?）のに対し、神谷原式では口縁部文様帯の幅がせまいものでは、その下に幅のせまい無文帯か楕円形区画文をおくだけで、胴部文様帯がせり上り、文様も発達するものが多い（たとえば神谷原報告262図14）。竹ノ下式におけるこの文様の簡素な部分は、阿玉台式に特徴的な頸部無文帯の起源をなすものである。神谷原式におけるせり上り幅広になった胴部文様帯とそこに展開する隆起線、数条の押し引き文、三角形刻文は千葉県鳴神山^(x83)の土器につながるものではないかと疑っている。竹ノ下式のうち押し引き文が1本になり縄文を失ったものは阿玉台Ⅰa式への近似を強めており、このようなものは神谷原遺跡には稀である。要するに竹ノ下式は五領ケ台式を母体とし、神谷原式と分離して阿玉台式へ変ってゆく過程の型式なのである。神谷原式と竹ノ下式の区別が難しいため、23図はこの時期の土器のうち茨城県と千葉県出土のものを機械的に示したが、以上の分類からすれば、23図15の加茂例などは神谷原式とすべきものということになる。

竹ノ下式には口縁部文様帯が省略された、縄文の粗製土器（24図13～15）がともなうが、「下小野式」から続くものであろう。

大石式は16図10～13のような器形をとるものが多く、縄文のない土器が増える。口唇直下に複合鋸歯文または沈線または1～2列の押し引き文が加えられ、その下にY字形刻文、押し引きや沈線による逆U字文が加えられる。胴部には中部高地のⅡc式に多く用いられた文様（15図1～4, 6）から変化したものを沈線で加える（17図6, 7, 19）もの、やはりⅡc式の胴部文様を押し引き文に変えたもの（17図1, 2）があるほか、太い隆起線を縦横に屈曲させて大まかに加えたものも多く（16図10, 12）、口縁部文様帯が省略され、このような隆起線だけで飾られた土器も少なくない。口縁部文様帯の下に1段の楕円形区画文を有するものがあり、同様のものは神谷原式、平出三Aにもあるが、これはⅡc式（15図2, 6）から続くもので、猪沢式の楕円形区画文の起源として重要なものである。猪沢式には本来、口縁部に楕円形区画文はなく、それがあのように見えるのは口縁部文様帯が省略され、胴部の楕円形区画文が口縁に位置することになった土器であるが、後にこれが混同され、阿玉台式の楕円形区画文の影響もあって口縁部文様帯としての楕円形区画文も用いられるようになるのである。

話が前後するが、この大石式の口縁部文様帯は確かに五領ケ台Ⅱc式の口縁部文様が横に圧縮されて変形したものであるが、その基本的構成にみる踊場式との類似は偶然とは思えない。踊場式の系統はⅡc式期にも上伊那地方を中心に維持され、これが平出三Aへ変るが、大石式は波状口縁が少ないだけでなく、口縁部の4ヶ所に平出三Aと共通する縦の隆起線を有するものが多く(16図10、13など)、その関連を示している。

大石式は船霊社11号住居址^(文142)、神谷原113号住居址^(文100)でⅡc式とともに出ているので、Ⅱc式と時間的に区分できるか疑問も生ずるが猪沢6号住居址^(文131)ではⅡc式をともになっていないようであるし、頭殿沢^(文135)ではⅡc式の豊富な資料があるのに大石式はみられない。なお、Ⅱc式とした船霊社11号住居址出土の13図7はⅡc式一般には見られない蛇行隆起線を口縁部に有しているが、この隆起線は大石式や猪沢式に類例を見るものであるから、この土器の位置づけについてはなお検討を要する。

大石式はきわめてスムーズに猪沢式の初頭に移行^{註18)}する。このため大石式か猪沢式かの判別に迷う資料もある^{註19)}。五領ケ台Ⅱc式から猪沢式への変化はすでに中西充氏が神谷原遺跡の資料によって詳しく論じているが^(文10)、ここでは同氏のふれていない点を中心に記してみた。

2 東関東の編年

東関東の前期末～中期初頭は遺跡数が減少する時期であったようで、西関東の十三菩提式や五領ケ台Ⅰ式に対比される時期の遺跡がほとんど発見されず、一時的に無人の地になったのではないかとさえ思われるほどであった。しかし、最近の急激な発掘件数の増加によって、この地域からも零細な資料ではあるが、十三菩提式や五領ケ台Ⅰ式に対比できる資料が出はじめ、編年の空白が埋められつつある。特に最近報告された茨城県虚空蔵貝塚^(文54)はかつての浮島式分布圏の中心に位置し、五領ケ台Ⅰa式の良好な資料を出し、東北地方と西関東の間にあった空白を埋めた点で重要である。東関東のこの時期については層位的出土例に乏しいだけでなく、一時期の単純な様相を示す資料も乏しい。以下の概観は主として土器の型式変化と西関東の変遷に対照したうえでの整理にすぎないことをおことわりしておかなければならない。

各時期の土器の特徴について述べる前に、この地域の土器の胎土の特徴について記しておく。この時期の西関東の土器の胎土は、石英閃緑岩系の岩石に由来すると考えられる角閃石、雲母、石英、長石の大きな粒を含み^{註20)}、赤褐色の焼成のものが多いのに対し、東関東の土器の胎土はきめが細かく、円磨した砂粒を含み、雲母を多く含むものは稀で、含む場合にも粒が細かく白っぽいものが多く、焼成は後期の土器を思わせるような灰～黒褐色の良好な焼成のものが多いといった傾向が認められるが、このような胎土の特徴は報告書で知ることは困難で、筆者も年代的・地域的に十分な量の資料について実際に検討したわけではないので、ここで略述するにとどめる。

十三菩提式並行期

東関東の前期末の編年の空白に対し、和田哲氏は茨城県興津貝塚^(文55)、向山貝塚^(文59)で出土しているような全面縄文で羽状縄文を多用し、縄文が口唇上におよぶことが多く、縄の押捺文がよく用いられる未命名の土器をもって「十三菩提式に併行する一型式であると結論づけておきたい。」とし、その空白に充当することを提案された^(文19)。しかし、最近東関東で出はじめた資料を見ると、和田氏の予想したのとは異なり、大木6式的な土器と十三菩提式的な土器、「下小野式」的な土器が共存するというのが、この時期の東関東の土器の実態であるらしい。茨城県伏見遺跡^(文53)では十三菩提式が少量出土し、五領ケ台式は出土しなかった。比較的まとまってある「下小野式」は十三菩提式にともなったとみるべきであろう。茨城県沖餅遺跡^(文58)は十三菩提式と五領ケ台Ⅰa式などを出土しているが、ここには「未命名型式」はなく、「下小野式」が大量にある。神奈川県横須賀市室ノ木遺跡^(文116)は十三菩提式のもっともまとまった資料を出した遺跡である。十三菩提式第2、第3段階とみられるものが多く、五領ケ台式は存在しないが、この遺跡で伴出したのは「下小野式」であって、「未命名型式」ではない^(註21)。千葉市宝導寺台遺跡^(文77)も同様な伴出例のひとつに数えることができる。和田氏が十三菩提式並行とした土器は千葉県旧東練兵場貝塚^(文84)において興津式の文様と羽状縄文を併用したものがみられるから、その年代の一端が興津式とかさなる（興津式にともなうのは諸磯c古式でc新式がともなった例は今のところないようである。）ことが知られる。そして、それが盛行するのが興津式より後になるとしても、それは上記の出土例から十三菩提式の主要部分より前と考えざるをえない。和田氏も指摘するように、「下小野式」は「未命名型式」から変化したものであろう。しかし、十三菩提式の大部分にともなうのは「下小野式」のほうであるとみられる。なお、ここで十三菩提式にともなう「下小野式」と五領ケ台式各段階にともなう「下小野式」のちがいについて明らかにする必要があるが、たとえば室ノ木遺跡の「下小野式」ひとつをとってみても相当な変化があり、的確に各時期の特徴をつかみにくい。ここでは五領ケ台Ⅰa式前後に羽状縄文の使用頻度が高まることだけを指摘しておきたい。なお、安藤文一氏はこの「未命名型式」を「栗島台式」とし、その細分を論じている^(文1)。

東関東における大木6式、十三菩提式近似の土器は18図に示したように、最近かなりの数の遺跡から検出されているが、いずれも断片的な資料である。房総半島の加茂^(文89)と鉦切^(文90)で比較的まとまった資料があるが、房総半島南部は西関東との関連が強く、これらの遺跡で東関東を代表させるわけにはいかない。東関東の該期の土器も西関東の十三菩提式の変遷や大木6式の変遷と対比して、古いほう、新しいほうという見当のつくものもあるが、多くはそのような判定の困難な小片である。木下^(文60)、台^(註22)、染井^(註23)など大木6式に近いものが多いことが注意される。

これらの土器の性格であるが、「下小野式」を東関東土着の土器、十三菩提式、大木6式的なものを移入土器とみるべきか、それらがセットになっている姿を東関東の地域的特色とみるべきか判断に迷うが、五領ケ台Ⅱ式において東関東独自の五領ケ台式に粗製土器としての「下小野式」がセットになっていることが参考となろう。胎土分析の方向からのとり組みが必要である。

五領ヶ台Ⅰa式

資料が非常に乏しかったが最近虚空蔵貝塚^(文54)の資料が報告された。西関東と東北地方の土器の近似性から予想された通り、西関東の五領ヶ台Ⅰa式ときわめて近いものである。資料が少ないせいもあるが、西関東のものとの相違点を指摘し難い。この時期には浮島式と諸磯式といったような形で東関東と西関東のちがいは存在しないことは重要である。他に茨城県埴^(文52)、沖餅^(文58)、千葉県日吉倉^(文72)、一本桜^(文76)、藤沢^(文78)など相次いで報告されている。いずれも小片であるが、分布上の意味は大きい。

五領ヶ台Ⅰb式

非常に資料が乏しいが、虚空蔵貝塚に西関東のⅠb式に近似する土器が存在することから、東関東においてもこのような土器が広がっている可能性がある。

五領ヶ台Ⅱa式

次のⅡb式に似ているが、それに先行するとみられる土器が多少知られている。20図1, 6の口縁部文様帯とV字形の懸垂文は西関東のⅡa式に近い。6は三角形刻文と半円形の刺突文を併用している。20図3, 7は胴部の懸垂文が底部の線まで達していないため胴部の縦割りの構成が成立していないが、同様のものは西関東のⅡa式にも存在する。このような土器にはⅡb式で発達する複合鋸歯文がみられないことも共通している。これらの土器はⅠb式より下り、Ⅱb式より先行するとみられること、西関東のⅡa式に口唇の刻みや刺突文が類似することから、大体西関東のⅡa式並行とみられるが、更に今後の検討が必要である。千葉県新田野貝塚^(文88)の完形土器は橋状把手が存在し、複合鋸歯文を有さない点でⅡa式に近いが、胴部にはⅡb式に属する21図2と同じ区画文を有する点で問題のある土器である。同様な例は同県加茂^(文89)にも存在する。

この時期には西関東とのちがいがはっきりしてくるが、沈線に沿う刺突文や口唇の刻みに類似性がみられ、口縁部文様帯の簡略化という共通の傾向もみられる。

この時期の資料だけがまとまって出土した例はないが、東関東のⅡa式が存在することが期待される年代と地理的位置を占める横浜市宮の原貝塚^(文112)に実際このような土器が多くあること、千葉県雷貝塚^(文66, 67)にこの種の土器がないらしいこと、宮城県長根貝塚^(文37)にはⅠa, Ⅰb式に続いてこの種の土器までが存在するが、Ⅱb, Ⅱc式がないことなどが時期区分の根拠となろう。

五領ヶ台Ⅱb式

千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚において西村正衛氏が東関東の地域色をもった五領ヶ台式としたもの^(文66, 67)に大体相当する。器形上は先行する時期とあまり変わらないが、口縁部と胴部の間が球形にふくらむ形はやや減少するようである。しかし、西関東よりは多く存在する。口縁部文様帯が簡単になったものが多いが、波状口縁下にⅠ式以来の玉抱き三叉文を有するものがある(20図8,

21図10)。21図11の波頂下の縦の隆起線は橋状把手からの変化であろう。口縁部に区画文を形成している。口縁部文様帯が全く省略されて円筒形の胴部だけになったものがある。(20図9, 21図1, 4)。複合鋸歯文が発達し、それに沿って沈線と点列がめぐる。この帯状文様で器面を縦横に区画する。区画内は無文のまま残されるほか、渦巻文や三角形刻文、鋸歯文などで充填されるものも多い。橋状把手が複合鋸歯文と同一個体にみられる例は存在せず、おそらく消滅したものと思われるが、それから変化したx字形や棒状の貼付文(21図3, 5, 9)は存在する。口唇部直下に短沈線をならべてふちどりとするものが多くみられる。

この時期には西関東の五領ヶ台式とのちがいがますますはっきりしてくる。西関東のⅡb式の多くが踊場系の口縁部文様帯を借用しているのに対し、東関東ではそのようなものは稀である。西関東に発達する胴部上半文様帯は東関東では発達せず、一条の複合鋸歯文が加えられるくらいである。西関東に多い内面に押し引き文を加えられた浅鉢は存在しない。稀にみられる例は移入品であろう。しかし、西関東と東関東に共通する特徴として、複合鋸歯文の多用、胴部文様の縦の分割、口縁部文様帯を省略する土器が多いなどの共通性が指摘できる。長野県大石遺跡(文134)1号, 29号, 30号住居では、西関東、中部高地のⅡb式に少量の東関東のⅡb式がともなっていると判断できる。

この東関東のⅡb式の資料として、茨城県吹上貝塚(文48)、千葉県雷貝塚(文66, 67)、下小野貝塚(文65)、八辺貝塚(文68)、加茂(文89)、飯山満東(文82)などがあり、福島県上の台(文47)、音坊(文41)にも分布する。東関東の五領ヶ台式とはいっても横浜市北部の宮の原貝塚(文112)や東方第7遺跡(文113)はこの土器を主体としており、神奈川県平塚市五領ヶ台貝塚(文118, 119)にも多く、東京都秋川市前田耕地(文93)、遠く静岡県長泉町柏窪(文155)に完形土器がある(20図8)。断片的な資料まで拾っていくとかなりの遺跡数になる。なお、東関東と西関東の土器の間に中間的なものが存在することは先述した。五領ヶ台貝塚の21図2、千葉県船橋市後貝塚または五領ヶ台貝塚出土とされる^{註24)}21図11などもここに図示したが、縦の区画に複合鋸歯文が用いられていないこと、沈線に沿って点列が加えられていないことなどは西関東的といつてよいであろう。

五領ヶ台Ⅱc式と竹ノ下式

東関東におけるⅡb式からⅡc式への変化はきわめて漸移的であって明確な境界は引き難いが、Ⅱc式期にはふたたび口縁部文様帯の発達がみられる。口縁部に沈線、隆起線で弧状、三角形、楕円形の区画が加えられ、その区画内に渦巻、三角形、鋸歯文などが加えられる。渦巻と三角形刻文を組合せた玉抱き三叉文がめだっている。胴部に同様の文様を加えたもの(22図4)もある。胴部を複合鋸歯文帯によって縦横に区画するものはなくなるらしい。西関東との地域差が弱まるが、西関東から踊場式的色彩が駆逐された結果であろうか。しかし地域差は全くなくなるわけではなく、東関東には波状口縁や口唇直下に短沈線をならべてふちどりしたものが多くというちがいが認められる。西関東ではⅡc式期にも胴部上半の文様帯が数本の沈線になって残っているものが多いが、このようなものは東関東には存在しないようである。

東関東にはⅡc式とすべきか五領ケ台式直後とすべきか迷う土器が少なくない。22図1, 6は区画文やY字形懸垂文の形からみると西関東のⅡc式に対比されそうであるが、説明によると押し引き文が用いられているということで、もし押し引き文の発達をもって五領ケ台式以後と認定するならば、この土器は五領ケ台式以後のものということになる。しかし、ここで考えてみなければならないのは押し引き文の由来である。押し引き文は西関東ではⅡa式の浅鉢ですでに用いられており、また、同地域のⅡb式の深鉢のうち東関東からの影響を感じさせる土器(9図7, 12図3, 4)にも用いられるが、これらはその位置からみて五領ケ台式直後に発達する押し引き文とは関係がうすいようで、むしろ本命は東関東のⅡb式の沈線に沿う点列であろう。これには押し引き文のような形で加えられたものもあり(20図8, 21図10)、区画文に沿って加えられることは、五領ケ台式直後に発達する押し引き文と共通する。このようなⅡb式の点列と沈線が合体して、数本平行する押し引き文が成立したとすると、点列と押し引き文の間に時間的断絶はないはずで、西関東のⅡc式に並行する時期には東関東に押し引き文が存在したことになる。現在のところこの推定も確実とはいえないが、Ⅱc式より時期が下るとみられる23図8, 9, 24図7などが沈線で文様を加えられているところからみても、沈線→押し引き文と一斉に変わったとは考え難いし、その変換点を五領ケ台式と直後型式の境界とすることも疑問である。このような分類上の問題が残されているため、Ⅱc式と五領ケ台式直後を一つの項目として扱ったが、これはけっして両方が同時に存在したという意味ではない。23図10~22のように押し引き文の発達した土器は神谷原式に近似し、明らかに五領ケ台式より新しいものである。押し引き文が1本のもの、縄文を加えられないものはさらに阿玉台Ⅰa式への近似性を強めている。

話の順序が逆になるが、周知のようにこの地域の編年の基本は西村正衛氏によって組立てられた。西村氏は白井雷貝塚の資料によって、五領ケ台式→雷7類(中間的なもの)→雷8類(阿玉台式)とされたが^(文67)、1972年の阿玉台式土器の編年研究^(文11)では、雷8類を阿玉台式直前の型式と阿玉台Ⅰa式に分離された。従って、西村編年では五領ケ台式→雷7類→雷8類の古い部分→雷8類(阿玉台Ⅰa式)ということになるが、この変更が、阿玉台Ⅰa式概念についての多少の混乱を招いているようにも思われる。五領ケ台式以後、阿玉台Ⅰa式以前に属する資料としては、千葉県粟島台^(文64)、加茂^(文89)、福島県壇ノ腰^(文45)、八景腰巻^(文42)、音坊に少しずつあり、最近発表された茨城県竹ノ下^(文51)が比較的まとまっているが、こうした細かい編年の整理のためにはまだ資料不足と言わざるをえない。従って厳密にいうと色々と問題があるが、五領ケ台Ⅱc式以後、阿玉台Ⅰa式以前に位置する土器群が存在することは確かなので、ここではこれを「竹ノ下式」とし、雷8類の古い部分(1972年の西村編年で阿玉台式直前とされた部分)はこの型式に含まれるものとした。雷7類はⅡc式あるいは押し引き文の出現の問題がかかわってくる段階の資料と思われるが、示された資料が少なく、明確なことは言えない。「竹ノ下式」と「神谷原式」の区別は難しいが、神谷原式の項で簡単にふれた。

横の関係であるが、五領ケ台Ⅱc式の直後ということで、竹ノ下式、神谷原式、大石式がほぼ並行するとみることに問題はないであろう。ただ、大石式より後の土器をほとんど含まない神谷原S

B113号住居址^(文100)の資料中に阿玉台Ⅰa式に近い文様要素をもつ土器(報告書8, 10, 65)が在ることは問題で、大石式と阿玉台Ⅰa式が一部並行することを示しているといつてよい。いずれにしても厳密な並行関係を考えるには、まずこの時期の諸型式の型式内容と各型式の境界線を明確にしてからでないと、何を議論しているのかわからなくなるであろう。

3 東北地方中～南部の編年

東北地方中～南部の編年を考えるうえで、宮城県遠田郡長根貝塚^(文37)における第1群→第2群→第3群の編年は最も重要である。第1群と第2群は地点を異にして出土し、第2群と第3群は層位的上下関係のもとに出土した。第1群は前期の大木6式、第2群は大木6式の新しい部分といつてよいであろう。岩手県水沢市中島遺跡では草間俊一氏によって長根6群に先行する大木6式の古い部分が抽出されている^(註25)から、大木6式は前葉(中島の一部)、中葉(長根1群)、後葉(長根2群)に細分されることになる。これに続く長根3群は、研究者によって大木7a式または糠塚式と呼ばれているものである。東北地方中、南部の中期初頭の編年は、山内清男氏による大木7a式の内容が公表されなかったため型式名に関する混乱が起っているが、土器自体の様相は近年かなり明瞭になってきている。山内氏による大木7a式の内容が明らかになることが期待できない今日、研究者の約束ごととして型式名を整理することはやむをえないであろう。筆者としては、大木7a式が本来の五領ケ台式である五領ケ台Ⅱ式に並行するものとして位置づけられていたいきさつを重視し、五領ケ台Ⅱ式に並行する部分を大木7a式、五領ケ台Ⅰ式に並行する部分を糠塚式と呼ぶのがよいと思っている^(註26)。最近では糠塚式の型式内容のほうが明確になってきており、かえって大木7a式のほうが不明瞭なままとり残されている。長根3群は五領ケ台Ⅰa, Ⅰb, Ⅱa式をとまなっており、概略五領ケ台Ⅰ式並行、すなわち糠塚式ということになるが、更に細分が検討される必要がある。

東北地方中～南部の前期末～中期初頭の型式は、関東と非常に近似する土器を一定量ともなっており、編年対比の格好の手がかりになっている。

大木6式(十三菩提式並行期)

大木6式の古い部分にはどのような関東系の土器をとまなうのか不明である。次の長根1群(大木6式中葉)には25図1, 2, 3のような外反する口縁部、球形にふくむ胴部、円筒形の台状部からなる変った形(筆者は球胴形と呼んでいる)の土器が存在するがこれは結節浮線文、ゾーメン状浮線文、結節沈線文など十三菩提式に共通する文様表現で飾られたものが多い。縄文を地文とした比較的間隔のある渦巻、比較的大きなジグザグなどは十三菩提式のうちでは第2段階^(文3)に最も近似している。このような土器は大木6式の型式内容の一部をなすものであるが、東関東にも近似の土器が分布する可能性が強い。長根貝塚のほか宮城県大木罎貝塚^(文38)、岩手県清水貝塚^(文28, 29)、山形県吹浦遺跡^(文35)などに類例がある。太平洋側の長根貝塚と日本海側の吹浦はこの球胴形の土器だ

け比較するとよく共通しているが、それ以外の土器の組成は相当に異なっている。

長根2群(大木6式後葉)には関東と共通性のある土器がみられないが、これは資料があまり多くないために偶然欠落したものであろう。この欠落している部分に相当する土器として、岩手県清水(文29)(25図11)、同県滝ノ沢(文24)(報告書図版9右下)の資料をあげることができる。同県鹿島館(文23)(報告書写真51—3, 4)もこの時期であろうか。清水例は長根2群に共通する文様を胴部上半に有している。岩手県中島遺跡(文25)の25図9, 10は口唇部にソーメン状の浮線文を何本も貼付けられている。このようなものは関東では十三菩提式の第4段階に多く見られる。口縁部文様は長根2群に見られるものである。この時期の球胴形の土器は資料が不十分であるが、胴部の文様帯が縮小し、文様の中心が口縁部にうつること、縦、横の羽状縄文、結節回転文が多く用いられるようになること、渦巻形の貼付文の多用などが特徴としてあげられよう。この時期に属するとみられる土器の小片は、宮城県正人壇(文39)、福島県長久保(文44)、刈摩山(文46)にもみられるが、後の2者は五領ヶ台I a式並行期へ続く遺跡である。長根2群とこれらの資料は大体十三菩提式の第3～第4段階に並行するものであろう。関東の十三菩提式第4段階に特徴的な梯子形や同心円形のソーメン状浮線文を有する土器は秋田県宝竜台上(文34)に2片だけ存在するが、東北地方にこのような土器がどの程度分布するのかは不明である。なお、円筒式の分布圏と境を接する秋田県、岩手県には大木系と円筒系の中間的な土器が少なくないが、1例として水沢市中島(文25)の土器(26図2)をあげておく。口縁部文様は縄と絡条体の圧痕で構成され、胴部に木目状撚糸文が加えられている。

五領ヶ台I式並行期(糠塚式)

長根3群は前述のように五領ヶ台I a, I b, II a式とほとんど同じものをともなっているから、これらの時期に並行するものといえる。報告者によって長根3群として一括された土器にも、第1トレンチ6～7層出土のもの8～9層出土のものあいだに少しちがいがあることが丹羽茂氏によって指摘されているが(文12)、8～9層には五領ヶ台I a, I b式近似の土器を多くともない、6～7層は五領ヶ台II a式をともなっているので、関東の編年からも丹羽氏の見解を支持することができる。8～9層を糠塚式と呼ぶならば、6～7層には別の型式名を与える必要がある。6～7層には縄文と結節回転文だけで飾られた粗製傾向の土器が多く存在し、東関東の「下小野式」と性格の近い土器とみられる。

五領ヶ台I a式そのものといってよい土器は岩手県大館町(文21)、滝ノ沢(文24)(報告書の写真不明瞭)、大陽台(文30)、秋田県大鳥井山(文32)、宝竜台上(文34)、宮城県糠塚貝塚(文36)、長根貝塚(文37)、福島県長久保(文44)、刈摩山(文46)、清水(文40)など多数の遺跡に存在する。I a式そのものとはいえないが近似するものは、上記の遺跡の他に岩手県畑井野(文20)、天神ヶ丘(文22)、中島(文25, 26)、清水貝塚(文29)などに存在する。畑井野(26図8)、清水貝塚(26図9)例は口縁部文様帯の幅が非常に狭いが、地域的な特色を示すのかもしれない。

五領ヶ台I b式そのものといってもよい土器は秋田県イカリ(文31)(27図5)、福島県上の台(文47)

五領ヶ台式土器の編年

にあるくらいであるが、宮城県糠塚貝塚^(文36) (27図1, 4, 6, 7), 長根貝塚^(文37) (27図2)にはかなり近似するものがある。岩手県大館町^(文21) (27図9, 10), 崎山弁天^(文27), 大陽台^(文30)にみられる口縁部文様帯に縦の細沈線を全面に加えたあとで水平線と三角形刻文を加える土器は関東のI b式と同じ施文順序をとっており、関係があるかもしれないが確かではない。

これら糠塚式とした土器群にともなう五領ヶ台I式近似の土器は、器形、文様において関東の土器と緊密な関係にあるが、同時に大木6式の球胴形の土器の伝統を引くものであって、その点では東北地方の土器組成の一部をなしている。つまり、東北地方の系統上に位置する性格と関東に共通する性格を合せもっているのである。

五領ヶ台II式並行期(大木7 a式?)

五領ヶ台II a式は上記のように東関東のものが宮城県長根貝塚^(文37)に存在する。27図12は第Iトレンチ8層出土, 13は6層出土である。五領ヶ台II b式は東関東のものが福島県上の台^(文47)にあり, 同県音坊^(文41)にもみられる。五領ヶ台II c式はやはり東関東のものが福島県壇の腰^(文45) (27図17, 18)にあり, 音坊^(文41)にもみられる。この両遺跡は竹ノ下式の段階へ継続している。福島市八景腰巻^(文42)にも竹ノ下式がみられる。壇の腰には完形土器もある。このように, 五領ヶ台II式, 竹ノ下式の時期の福島県の遺跡は東関東的な土器が主体をなしており, ほとんど同じ土器の分布圏に属したとみられる。

これに対して宮城, 岩手, 山形, 秋田には大木7 a式と呼ぶべき独自の型式が分布したらしい。宮城県の資料は乏しく, わずかに大木田貝塚で山内氏が大木7 a式とした資料^(文38)が知られている程度であるが, 秋田県欠上り^(文33), 岩手県蛸之浦貝塚(?)^{註27)}, 畑井野^(文20) (28図), 天神ヶ丘^(文22) (28図)の資料があり, 最近報告された盛岡市大館町^(文21) (28図, 29図)の資料によってこの時期の様子がかなりはっきりしてきた。とはいっても, この時期の土器は関東との類似性が弱まるため, 単純な対比はむずかしく, 関東の五領ヶ台II式の細分との対比の問題, 大木7 a式の型式内容の問題などは検討を進めていかなければならない。ここでは大体五領ヶ台II b, II c式, 竹ノ下式頃に対比されると思われる土器を図示するにとどめる。関東と同様に複合鋸歯文の使用がめだっており, これを半截竹管による爪形文におきかえたものも多い。28図1は両者が併用されている。28図5の沈線に沿う刺突文はおそらく東関東のII b式と関連するものであろう。29図1, 3の口縁部の三角形の区画文は五領ヶ台II c式で発達する区画文と関係があろう。29図3の波状口縁頂部の装飾は, 五領ヶ台II c式や神谷原式の低い波状口縁上にみられるつまみ状の装飾に似たところがある。

大木7 a式に続く7 b式は文様図形に阿玉台式と共通するものが多くあり, 隆起線に沿って加えられる撚糸圧痕文は, 効果において阿玉台式の隆起線に沿う押引文に共通する。

4 東北地方との関連でみた五領ケ台式土器の成立過程

——土器型式の伝播——

以上、関東の中期初頭土器の6段階にわたる変遷とそれに並行する東北地方の土器について概観した。筆者はかつて五領ケ台Ⅰ式の成立に東北地方北部の円筒下層式の影響があったことを指摘したことがある(文2)。この考えは今でも変わっていないが、多少行きすぎもあったので、ここで五領ケ台式の成立過程について再論しておきたい。

五領ケ台式最初頭のⅠa式は十三菩提式第4段階のソウメン状浮線文を沈線文におきかえることによって成立したものであり、その前後で文様構成に大きな変化はないから、他地域からの影響を考慮する必要もない。筆者がかつて円筒下層式の影響を考えた五領ケ台Ⅰ式の基本的構成、つまり口縁部文様帯と装飾的な胴部の縦の縄文部の対比の成立は、実は十三菩提式の第3段階までさかのぼることはすでに論じた(文3)ことがある。十三菩提式の第3段階で、第2段階の土器の胴部の縦方向の浮線文が縦方向の装飾的な縄文におきかえられた結果、口縁部文様帯と装飾的な胴部縄文部の対比という構成が生れたものである。この変化が、突然土器の大多数を変化させるような形で起ったのか、第2段階の土器の中にポツリポツリと装飾的な縄文を有する土器が出現してきたのかは、十三菩提式の第3段階という設定が不安定な現在、はっきりしない。しかし、少なくとも第2段階にはこのような土器はほとんどなく、第4段階には大部分の土器がこのような構成に変わったことは確かである。

では、この構成は本当に円筒下層式の影響のもとに成立したのであろうか。それには当然の順序として、円筒下層d式と十三菩提式の間中に分布した大木6式に注目しなければならない。先述のように大木6式は、全体としては十三菩提式と相当に異なる型式内容を有しているが、球胴形の土器だけはなぜか十三菩提式に近似の文様をもつものが多く、その変遷も関東の土器と歩調を合せている。大木6式中葉、十三菩提式第2段階ごろに対比されるとみられる山形県吹浦遺跡(文35)の球胴形の土器は、まだ羽状縄文や結節回転文の加えられたものは少ないが、同じ遺跡の円筒形の土器では、それらの縄文や木目状撚糸文がさかんに用いられている。円筒形の土器にだけ円筒下層式の影響が現れているが、まだそれが球胴形の土器におよんでいない状態とみることができよう。そして大木6式の後葉になると清水貝塚(文29)その他の例にみるように、球胴形の土器にも羽状縄文や結節回転文が多用されるようになるが、同じ変化はそれに並行する十三菩提式第3段階の土器にも現れている。この大木6式と十三菩提式に現れた変化は両型式に共通する器形である球胴形土器の同じ部位に現れているから、明らかにひとつながりの現象である。このように十三菩提式後葉における円筒下層d式の影響は大木6式の球胴形の土器を介してもたらされたものであるが、その影響の大きさは、十三菩提式第2段階の胴部の縦の浮線文を縦の装飾的な縄文におきかえたという程度のものにすぎない。大木6式では縦方向とともに横方向の縄文もあるのに十三菩提式では縦が多いのは、従来から存在した縦方向の文様意識に合うものがとり入れられたためであろう。このことか

五領ケ台式土器の編年

らもわかるように、この変化は十三菩提式が円筒下層式的要素をとり入れたのであって、けっして円筒下層式土器の分布圏の拡大といった性質のものではない。しかしながら、円筒下層式に起源をもつ縦の羽状縄文が太平洋側を中心に広がったとき、日本海側ではやはり円筒下層式に起源をもつ木目状撚糸文が福井県まで広がって、北陸地方に朝日下層式を生み出してその末流は中部高地、関東地方にも入っていることを考えると、この変化は単なる文様の一要素の伝播の問題としてかたづけられることはできないように思われる。

このように円筒下層式の影響を関東にもたらした伝達者として大木6式の球胴形の土器が注目されるのであるが、この球胴形の土器は次の糠塚式では五領ケ台Ⅰa式とほとんど区別し難いものになる。そしてその口縁部文様は、現在のところ東北地方で成立したとする証拠が乏しい^{註28)}のに対し、関東では十三菩提式第4段階からの変化で成立することが知られている。この点を強調するならば、糠塚式の球胴形土器は関東の系統に属するものということになるであろう。しかし土器型式の組成という観点からすると、大木6式で球胴形の土器が重要な構成員であった位置を、糠塚式においては五領ケ台Ⅰ式に酷似する球胴形の土器が占めているのである。そして同じ糠塚式の球胴形の土器でも岩手県のものには口縁部文様帯の幅が狭いものが多いという地域色が存在する事実も、この種の土器を全く関東系のものとみてはいけなことを示している。

以上を要約すると、大木6式と十三菩提式、また糠塚式と五領ケ台Ⅰ式は型式内容全体では相当に異なる型式であるが、最も精製の土器である球胴形の土器に限って共通性を維持しようとする性質がみられる。大木6式がその分布圏の北部で円筒下層d式と接触して胴部に羽状縄文や結節回転文を受け入れ、それが球胴形の土器にも用いられるようになったとき、同じ文様はすぐに関東に伝わって、関東の土器にもその影響が現れた。そして次に、五領ケ台Ⅰa式が関東で成立したとき、その口縁部文様はほとんど同時に岩手県、秋田県にまで伝わり、その地の球胴形の土器に採用された。このような前期末～中期初頭の東北と関東の土器の変化の中に、遠隔地域間での土器の影響関係という現象のひとつの具体例をみるのできるのである。

5 五領ケ台式に見る土器型式の基本的な形の維持

——土器型式の伝承——

関東の中期初頭の土器にも6段階程度の時代的变化と各段階を通じて2つ以上の地域的変異があり、その多くが十分に1型式といえるだけの安定した内容を有していることを細かく論じてきた。地域的型式の分布範囲を明示することは現在の段階では不可能であるが、それが固定的なものではないということは言えそうである。このような型式群の分布の変化や影響力の伸長、衰退の現象が五領ケ台式の変遷を単調ならざるものになっている。とくに東関東に本拠をもつ五領ケ台式と長野県に本拠をもつ踊場式双方の影響下にあった西関東ではそれが著しい。

五領ケ台Ⅰa式期には東関東から広がるⅠa式が横浜あたりまで主体的な型式として広がっており、さらに西に少し違うⅠa式が広がっている可能性がある。踊場式は西関東にも五領ケ台式に匹

敵する量で分布する。I b式期では西関東から中部高地までほぼ一様な五領ケ台式が広がる。東関東は資料不足ではっきりしない。踊場式はやはり西関東でも豊富である。II a式期もあまり変らないが、東関東の土器の独自性が強まる。II b式期は五領ケ台系と踊場系の折衷型式が西関東から中部高地まで広がるのに対し、東関東では五領ケ台系本来の基本的な形が維持されるとともに分布を西へ広げる。II c式ではこの広がりの影響からか、五領ケ台系本来の形が西関東から中部高地にまで広がり、踊場系の要素はほとんど見られなくなる。ところが次の五領ケ台式直後の段階には、再び踊場系の口縁部文様帯の基本的な形を受け入れた大石式が中部高地に広がり、西関東へも強力に進出する。東関東には竹ノ下式が、中間に神谷原式が広がるらしいが、資料不足ではっきりしない。次の時期、大石式から変化した貉沢式は、西関東にも安定して分布している。東関東では竹ノ下式から阿玉台式が生れ、一連の変化をたどる。中間に存在する可能性のある鳴神山の系統^(文8)は実態不明であるが、有名な鳴神山の土器^(文83)は神谷原式と関連をもち、同時に新道式につながる文様要素をいくつか有する点で注意すべき存在である。さらにおくれて勝坂式の末期に楡形文土器（踊場式→平出三Aの後裔）の影響が中部、関東の勝坂式におよぶことを谷井彪氏が指摘している^(文9)。

このように西関東の土器は東関東と中部高地の影響を交互に受けているのである。

西関東の五領ケ台式を通観すると、I式とII c式が編年上離れているにもかかわらず基本的な形で類似する。これはこの形が東関東で維持された後に再び広がったためである。同様に踊場式と五領ケ台II b式、大石式が基本的な形で類似する。これはこの形が長野県（上伊那地方中心？）で維持されたことと関係がある。このような土器型式の基本的な形の保持のされかたに、土器型式の伝承のひとつの具体例をみるのできるのである。

少し視野を広げると、五領ケ台II式と加曾利E I～II式がともに口縁部区画文と胴部懸垂文という基本的構成を有し、時期が離れているにもかかわらず似ていることに気がつく。これも同様な、そしてより大きな規模でおこった伝承例のひとつに数えられるかもしれない。五領ケ台II式とそれに並行する大木7 a式にみられる上記の基本的構成は、けっして単純なありかたではないが、阿玉台式、東北地方南部の大木7 b式、8 a式、諏訪式と呼ばれる阿玉台式と大木7 b式の間接的な土器の中に変化しつつも維持されている。そして大木8 a式が加曾利E式の成立に大きな役割を果したことは、先学のすでに指摘するところである^{(文13)(文9)}。

付 記

小論を草するにあたり、日頃から御指導いただいている吉田格先生をはじめ多くの方々のお世話になった。特に八幡一郎先生には五領ケ台貝塚の資料、清水潤三、鈴木公雄両氏には八辺貝塚と染井遺跡の資料、尾形禮正氏には段間遺跡の資料、中西充氏には櫛田遺跡群の資料、上野新吾氏には朝霞城山遺跡の資料を拝見するのに便宜をはかっていただき、有益な御教示をいただいた。池谷信行氏には各地の未発表資料について御教示いただいた。小論中の染井遺跡の資料は清水潤三氏の、

五領ケ台式土器の編年

台遺跡の資料は上総国分寺遺跡調査団の御好意によって、未発表資料にもかかわらず収録を許されたものである。以上の方々に厚く感謝申しあげる次第である。

小論が発表されるまでには多少の紆余曲折があった。当初、ある出版計画にあたって五領ケ台式土器の主な資料をできるだけ収録し、その変遷を解説するつもりで1981年にまとめたが、1983年に計画が具体化されることになり、その時点で新たに発表されていた大石遺跡の重要な資料を図に加え、神谷原等の新資料については図には加えられなかったが文章にのみ加えて、一部分書きなおした。しかし、それもまた諸般の事情により今日に至るも出版のめどがたたないため、研究室紀要への掲載をお願いしたような次第である。この間新資料は加速度的に増加し、当初意図した重要資料の網羅的集成からはほど遠いものになってしまった。また、最近の諸研究の成果が十分に生かされていないのもこのようないきさつによるものであることを御了承いただきたい。

1981～1984年に発表された主な関係論文、発掘報告書に以下のものがある。

長野県大石遺跡報告（文134）

東京都神谷原（梶田Ⅱ）報告（文99）

藤本弥城 1980 上ノ内貝塚下の水田中の遺跡『那珂川下流の石器時代研究』Ⅱ

白石浩之ほか、1981：『細田遺跡』 神奈川県埋蔵文化財調査報告23

松井和浩、1981：本遺跡の五領ケ台期について。『前田耕地』Ⅲ 秋川市教育委員会

能登健ほか、1981：関東・中部・北陸地方。『縄文土器大成』2（中期）講談社

土肥孝、1981：阿玉台Ⅰa式以前の土器——五領ケ台式と阿玉台式の間。土曜考古4

名和達朗・阿部明彦、1981：『熊の前遺跡』 山形県埋蔵文化調査報告書第34集

海老沢稔、1982：茨城県内における中期前半の土器様相（1）。婆良岐考古4

谷井彪、1982：いわゆる阿玉台Ⅰa式とその周辺の土器群について。土曜考古6

村木功、1982：縄文中期初頭・前葉土器のもつ諸問題。『多聞寺前遺跡』Ⅰ 同調査会

佐藤明生ほか、1982：『宇津木台遺跡群』Ⅰ 八王子市宇津木台地区遺跡調査会

本沢慎輔ほか、1982：『塩ヶ森Ⅰ遺跡』 岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第31集

菅原俊行・田口都・安田忠市、1982：『秋田市下堤D遺跡発掘調査報告書』 秋田市教育委員会

神澤昌二郎ほか、1982：『松本市内田雨堀遺跡——第2次緊急発掘調査報告書——』 松本市文化財調査報告 No. 23

海老沢稔、1982：茨城県内における縄文中期前半の土器様相（2）——諏訪式土器について—— 婆良岐考古6号

稲野裕介ほか、1983：『滝ノ沢遺跡』 北上市文化財調査報告第33集

高橋忠彦・菅原俊行、1983：湯の沢B遺跡。『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 秋田市教育委員会

和田哲・山村貴輝ほか、1983：『八王子市元八王子池の下遺跡発掘調査報告書』 同調査団

戸田哲也・小林義典ほか、1984：『神奈川県伊勢原市大入遺跡発掘調査報告書』 同遺跡発掘調査

団

阿部明彦・佐々木洋治・福島日出海，1984：『水木田遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第75集
西村正衛，1984：『利根川下流域の石器時代文化』早稲田大学出版部

註

- 1) 型式名について「宮の原式」とすべきか、五領ケ台式の古い部分とみて、五領ケ台式の細分という方向で処理すべきか迷ったが、この種の土器を五領ケ台式として報告している例があることを重視し、後者の立場をとった。その後東京大学総合資料館人類学先史学部門において五領ケ台式設定の基準となった八幡一郎、三森定男両氏発掘の資料を実見する機会を得たが、それは今回Ⅱb式として分類したものを主体とし、約20片のⅡa式、約10片のⅠb式、1～2片のⅠa式を含むものであった。当初の五領ケ台式が主にⅡ式をさしていたことは明らかであるが、Ⅰ式も少数ではあるが当初の資料に含まれていることから五領ケ台式に含めてよいであろう。なお、上記資料は八幡氏の許可を得て整理を行ない、完了しているので、適当な機会に発表するつもりである。
- 2) 筆者がこれまで踊場式という呼びかたをひかえて集合平行線文の系統と呼んできた理由は、踊場系と五領ケ台式が諏訪湖周辺から西関東まで全く混在して出土すること、踊場系と五領ケ台式の折衷土器が少なからず存在し、特に本来の五領ケ台式であるⅡb式の大部分がそのような折衷土器からなるためである。最近の中央自動車道建設予定地内での調査などで明らかになったように、伊那地方には踊場系の土器が主体的に存在し、東関東では独自の五領ケ台式が踊場式の影響を受けずに存在すること、中期初頭の土器を理解するためには2つの系統の相関関係という視点が不可欠であり、それぞれに適当な名称を用意したほうがよいと考え、今回、踊場系、五領ケ台式の2つの系統名を用いることにした。
- 3) たとえば埼玉県秩父郡吉田町わらび沢岩陰の完形土器(文63)
- 4) たとえば長野県伊那市月見松遺跡10図1(文147)
- 5) 霧ヶ丘遺跡の報告で誤って縄文晩期とした条痕文、撚糸文土器の大部分が実は十三菩提式にもなるものとみられる。これは神奈川県室ノ木遺跡の報告(文116)によって気がつき、機会あるごとに口頭で訂正してきた。神奈川県東正院遺跡の報告(文117)で早期とされた条痕文土器も明らかに同時期のものである。同遺跡の撚糸文土器は霧ヶ丘のものと同じ感じがちがうが、これも十三菩提式の可能性があるものと考えている。
- 6) 宮の原貝塚の報告で五領ケ台式土器に円筒形の土器が多いことを円筒下層式の影響のひとつに数えたが(文2)これは疑問である。
- 7) 再点検によってⅠa式の小片を検出した。
- 8) 「下小野式」は東関東の地域色をもった五領ケ台式とともに分布する。粗製土器を基準にして型式を設定することは適当でないというのは宮の原貝塚の報告以来の筆者の考えかたである。
- 9) 横浜市宮の原貝塚、八王子市明神社北遺跡のほか、以下の遺跡でまとまった資料が出ている。神奈川県東方第7(文113)、平台(文120)、山之台(文121)、尾崎(文125)、長野県籠畑(文133)、梨久保(文138, 139)、静岡県柏窪(文155, 156)
- 10) 註1)
- 11) 他に東京都桐田(文99)、神奈川県東方7(文113)、山之台(文121)、尾崎(文125)、釈迦堂(文122～124)、長野県九兵衛尾根(文131)、静岡県柏窪(文155, 156)
- 12) 五領ケ台式は八幡一郎、三森定男両氏の発掘資料をもとに山内清男によって設定された型式とされる(文17)。注1参照
- 13) 五領ケ台式期における文様帯の交換、文様帯の省略、器形と文様帯の関係についてはかつて述べたことがある(文4)。参考のためその時用いた概念図のみ転載する(1, 2図)

五領ケ台式土器の編年

- 14) 『東京国立博物館考古図録』(文80)は千葉県船橋市後貝塚とする。『縄文土器大成』2(講談社 1981年)は伝五領ケ台貝塚出土とする。
- 15) 他にⅡb式のまとまった資料を出した遺跡としては、東京都們田第Ⅳ(文99)、前田耕地(文93)、山梨県寺平(文128)、上平出(文130)、長野県曾利(文132)、堂地狐窪(文146)、月見松(文147)、静岡県段間(文151)、柏窪(文155, 156)がある。
- 16) 月見松(文147)報告10図6の土器は平出三Aの成立を考えるうえで重要な土器である。全体的な感じはⅡb式に近い。しかし口縁部文様帯の三角形区画と半円形はおそらくⅡc式の影響を示すもので、大体この時期に属するものと思われる。同図7, 5(小論の10図1, 2)もⅡb式として扱ったが、胴部文様にはⅡb式の他の土器にみられない平出三Aへの近似を示しており、上記例と同時期かもしれない。
- 17) 他にⅡc式のまとまった資料としては、東京都們田第Ⅱ, 第Ⅳ(文98~100)、神奈川県山之台(文121)、長野県曾利(文132)がある。
- 18) 猪沢式は連続性が強いいため明確に細分することはできないが、古い様相、中頃の様相、新しい様相を指摘することができる。古い部分では大石式から受けつぐY字形刻文やこれを押し引き文におきかえたもの、逆U字形の押し引き文の使用がさかんで(この文様は末期まで残る)、口縁部を縦の隆起線で区切るものがあるが、口縁部文様帯としての楕円形区画文をみない。胴部の楕円形区画文は0~2段で多数重疊することがなく、区画文内に沿う押し引き文は加えられないものが多い。神谷原160号住居の一括資料(口縁部に楕円形区画文をもつ土器は大石遺跡にはない他の系統の土器である。)がある。胴下半部には曲折する隆起線が広い面積を占めるものが多い。中段階では楕円形区画文の重疊の傾向が強まるが、太い押し引き文と細い押し引き文を併用する傾向はみられない。東京都藤の台3, 4号住居(文103)ではこの時期の資料だけを出土している。新しい部分では口縁部文様帯としての四角形、楕円形区画文を有するものがふえ、楕円形区画文の重疊の単調さを破るためか、段の途中に三角形や四角形の区画を入れたものが増え、角押文も太いものと細いものを平行させることが多く、新道式で多く用いられる三角押し引き文も現れる。
- 19) 船霊社11号住居、猪沢6号住居、神谷原S B113住居の大石式にはまぎらわしいものは少ない。しかし大石20号住居址の一括資料には大石式としたいものと猪沢式初頭とみたいものがあり、この一括資料の途中に境界線を引かざるをえないであろう。
- 20) 東京都とけばら遺跡では、同じ西関東の土器でも精製の傾向の土器にこのような混和物が用いられ、粗製の傾向の土器にはあまり用いられていないことが知られている。(今村啓爾 1974: 縄文前期末の土器胎土中の岩石、鉱物。(文105))
- 21) 室ノ木にはおそらく大木6式に共通する球胴形になるとみられる土器片で、口縁部文様帯が撚糸の圧痕文で構成されたものがあるが、これは「未命名型式」とは区別されるべきものである。
- 22) 千葉県市原市台遺跡B地点出土、未発表資料であるが、上総国分寺台遺跡調査団米田耕之助氏の御好意により実測図をいただき、小論に収録させていただいた。
- 23) 香取郡多古町染井 慶応大学所蔵の未発表資料であるが、清水潤三教授の御好意で、小論に拓本を収録させていただいた。
- 24) 註14)
- 25) 文献25において興野義一氏の教示に従ったとして大木6式をA式とB式に分けているが、理解しにくい点がある。しかし文献26において大木6式のはじめのものとして図示したものは確かにそう納得できるものである。
- 26) 糠塚貝塚の資料から大木6式をさし引いた部分は大体五領ケ台Ⅰ式に並行するとみられる。筆者にとって山内氏の大木7a式の内容を知る手がかりは、岩手県史第1巻(文38)に山内清男氏提供として示された不鮮明な写真しかないが、これは糠塚貝塚の土器とはちがって五領ケ台Ⅱ式に並行するとみられる土器や「下小野式」に近似する土器である。

林謙作氏は糠塚式→大木7a式の編年を示しておられるが(『日本の考古学』Ⅱ 1965 河出書房)、型式内容のちがいについての説明は示されていない。その後大木7a式の存在に疑問を示し、糠塚式の内

容が正確に規定されれば、これを7 a式としてもよいとも発言されている(文29)。また小笠原好彦氏は、糠塚貝塚の土器のうちから五領ケ台式のものを抜き出して大木7 a式とし、それを除いた部分を糠塚式としたうえで、糠塚式→大木式の編年を提唱している(文7)が、これは一時期の土器を2分して前後関係においたものなので賛成できないが、結果的に型式名の順序は私の考えと一致することになる。

最近丹羽茂氏は大木6式以後大木7 b式以前をすべて大木7 a式としたうえでそれを3段階に分ける考えを示している(文12)。研究者の合意が得られればそれでもよいわけだが、小論では宮の原貝塚の報告以来の、五領ケ台I式に並行する部分を糠塚式とし、同II式に並行する部分を大木7 a式とする立場を維持した。

- 27) 『日本原始美術』1 (1964 講談社) 参考図版40では岩手県清水貝塚とする。『縄文土器大成』2 (1981 講談社) 参考図版25は岩手県蛸之浦貝塚出土とする。
- 28) 十三菩提式第4段階と同じ文様を有する土器は秋田県湯沢市宝竜台上(文34)で同一個体2片が知られているだけである。しかし関東でも零細な資料が知られているだけであるから、東北地方でも今後検出される可能性がないとはいえない。

参考文献(本文、付図に引用したもののみ)

編年一般に関するもの

- 1) 安藤文一, 1977: 粟島台式土器の設定——東関東における縄文前期終末の様相——. 房総文化14号
- 2) 今村啓爾, 1972: 前期末~中期初頭の編年について. 五領ケ台式土器に見られる円筒式土器の影響について. 『宮の原貝塚』 武蔵野美術大学考古学研究会
- 3) 今村啓爾, 1974: 登計原遺跡の縄文前期末の土器と十三菩提式土器細分の試み. 『とけっぱら遺跡』 同調査会
- 4) 今村啓爾, 1978: 中期初頭縄文式土器の型式構造. 第32回日本人類学会日本民族学会連合大会抄録(人類学雑誌87巻2号に転載)
- 5) 今村啓爾, 1982: 諸磯式土器. 『縄文文化の研究』3 雄山閣出版株式会社
- 6) 鶉飼幸雄, 1977: 平出三類A土器の編年の位置づけとその社会的背景. 信濃29—4
- 7) 小笠原好彦, 1968: 東北地方南部における前期末から中期初頭の縄文式土器. 『仙台湾周辺の考古学的研究』 宮城県の地理と歴史第3集 宮城教育大学歴史研究会
- 8) 佐藤達夫, 1974: 土器型式の実態——五領ケ台式と勝坂式の間——『日本考古学の現状と課題』 吉川弘文館
- 9) 谷井彪, 1977: 勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察. 信濃29—4, 6
- 10) 中西充, 1982: 縄文時代中期の出土土器について. 『神谷原』II 八王子市梶田遺跡調査会
- 11) 西村正衛, 1972: 阿玉台式土器編年の研究の概要. 早大文学部研究科紀要第18輯
- 12) 丹羽茂, 1981: 大木式土器. 『縄文文化の研究』4 雄山閣出版株式会社
- 13) 野口義麿, 1958: 千葉県粟島台出土の土器について——南関東の中期縄文土器における東北的要素の抽出—— 石器時代5号
- 14) 藤森栄一, 1965: 中期初頭の諸型式. 『井戸尻』 中央公論美術出版社
- 15) 山口明, 1978: 縄文中期初頭土器群の分類と編年——関東・中部地方を中心にして—— 駿台史学43号
- 16) 山口明, 1980: 縄文時代中期初頭土器群における型式の実態. 静岡県考古学会シンポジウム4(縄文土器の交流とその背景——特にその中期初頭の土器群をとおして——)
- 17) 山内清男, 1936: 日本考古学の秩序. ミネルヴァ1巻4号
- 18) 山内清男, 1937: 縄文土器型式の細別と大別. 先史考古学1巻1号
- 19) 和田哲, 1973: 前期末葉土器の問題. 『古和田台遺跡』 船橋市教育委員会

五領ヶ台式土器の編年

岩手県

盛岡市上米内畑井野

- 20) 草間俊一・吉田義昭, 1959: 『畑井野遺跡』

盛岡市大館町

- 21) 渡辺定男(土器)・武田将男(土器)ほか, 1978: 『大館町遺跡』 盛岡市文化財調査報告第20集

稗貫郡大迫町天神ヶ丘

- 22) 相原康二(土器)ほか, 1974: 『天神ヶ丘遺跡』 大迫町教育委員会

北上市鬼柳町鹿島館

- 23) 北上市教育委員会, 1975: 『鹿島館遺跡調査報告書』Ⅱ 北上市文化財調査報告第15集

北上市相去町滝ノ沢

- 24) 斉藤尚巳・中山清隆, 1979: 『滝ノ沢遺跡調査概報』 北上市文化財調査報告第26集

水沢市真城西町中島

- 25) 草間俊一ほか, 1965: 中島遺跡, 『水沢の原始・古代』 水沢市教育委員会

- 26) 草間俊一, 1974: 中島遺跡, 『水沢市史』1 原始・古代 水沢市

上閉伊郡大槌町吉里崎山弁天

- 27) 草間俊一・玉川一郎(Ⅲ群土器)ほか, 1974: 『崎山弁天遺跡』 大槌町教育委員会

大船渡市赤崎町清水貝塚

- 28) 西村正衛・菊池義次・金子浩昌, 1958: 岩手県大船渡市清水貝塚. 古代29・30合併号

- 29) 林謙作, 1976: 『大船渡市清水貝塚発掘調査概報』 岩手県文化財愛護協会

陸前高田市広田町大陽台

- 30) 及川洵・遠藤勝博ほか, 1979: 『大陽台貝塚』 陸前高田市教育委員会

秋田県

北秋田郡イカリ

- 31) 大和久震平・奈良修介, 1960: 『秋田県史』考古編 秋田県

横手市大鳥井山

- 32) 鍋倉勝夫・杉瀧馨・西谷隆ほか, 1978: 『大鳥井山』Ⅰ 横手市教育委員会

雄勝郡稲庭川連町欠上り

- 33) 滝口宏・西村正衛, 1956: 秋田県雄勝郡欠上遺跡発掘報告. 古代18号

雄勝郡稲庭川連町宝竜台上

- 34) 山下孫継編著, 1961 『湯沢市雄勝郡の埋蔵文化財』 湯沢市教育委員会

山形県

飽海郡吹浦村吹浦

- 35) 柏倉亮吉・江坂輝弥ほか, 1955: 『吹浦遺跡』 荘内古文化研究会

宮城県

登米郡新田村糠塚貝塚

- 36) 加藤孝, 1956: 宮城県登米郡新田村糠塚貝塚について. 『登米郡新田村史』
文献 7)

遠田郡涌谷町長根貝塚

- 37) 伊東信雄・藤沼邦彦(第Ⅰトレンチ, 第Ⅱストレンチ)ほか, 1969: 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報
——長根貝塚——』 宮城県文化財調査報告書第19集

宮城郡七ヶ浜町要害大木罎貝塚

- 38) 小岩未治, 1961: 中期縄文式文化と住居址. 『岩手県史』第1巻 上古篇

白石市福岡深谷正人壇

- 39) 片倉信光・中橋彰吾・後藤勝彦ほか, 1976: 『白石市史』別巻 考古資料篇

福島県

双葉郡浪江清水

40) 梅宮茂ほか, 1964: 『福島県史』第6巻 考古資料 福島県

信夫郡信夫音坊

41) 目黒吉明, 1964: 音坊遺跡. 『福島県史』第6巻 考古資料 福島県

福島市飯坂町腰巻

42) 加藤孝・阿部正光(土器)ほか, 1975: 八景腰巻遺跡. 『東北自動車道遺跡調査報告』 福島県文化財調査報告書第47集

二本松市塩沢上原

43) 目黒吉明・森貢喜(土器)ほか, 1975: 塩沢上原A遺跡. 『東北自動車道遺跡調査報告』 福島県文化財調査報告書第47集

安達郡大玉村長久保

44) 中村五郎(土器)ほか, 1969: 『福島県史』第1巻 通史編1

郡山市大槻町壇ノ腰

45) 永山倉造・吉田幸一ほか, 1975: 壇ノ腰遺跡. 『東北自動車道遺跡調査報告』 福島県文化財調査報告書第47集

耶麻郡塩川村刈摩山

46) 星将一, 1978: 塩川町刈摩山遺跡の縄文土器. 福島考古19号

耶麻郡塩川町中屋上ノ台

47) 生江芳徳・日下部善己, 1978: 『上の台遺跡発掘調査概報』 福島県文化財調査報告書第68集

茨城県

東茨城郡大洗町磯浜吹上貝塚

48) 上川名昭ほか, 1972: 『大洗吹上遺跡』 同遺跡調査団

49) 宮田毅編, 1977: 『茨城県吹上遺跡』 大洗町文化財調査報告書第6集

50) 伊東重敏ほか, 1971: 『水戸市埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書』 水戸市文化財調査報告第1集

東茨城郡大洗町磯浜吹上竹ノ下貝塚(上と同一遺跡別地点)

51) 藤本彌城, 1977: 『那珂川下流の石器時代研究』 I

鹿島郡鉾田町塙

52) 橋本勉, 1980: 塙遺跡『鹿島線関係遺跡発掘調査報告書』 茨城県教育財団文化財調査報告V

鹿島郡鹿島町伏見

53) 小野真一ほか, 1979: 『常陸伏見』 同遺跡調査会

稲敷郡美浦村虚空蔵貝塚

54) 大川清・大島秀俊ほか, 1978: 『茨城県美浦村虚空蔵貝塚』 国土館大学考古学研究室報告乙種第5冊

稲敷郡美浦村興津貝塚

55) 西村正衛, 1968: 茨城県稲敷郡興津貝塚(第1次調査), 学術研究17号

56) 西村正衛, 1980: 茨城県稲敷郡興津貝塚, 学術研究29号

57) 西村正衛, 1980: 茨城県稲敷郡興津貝塚Fトレンチ出土土器. 『古代探叢』 滝口宏教授古稀記念論文集

竜ヶ崎市若柴町沖餅

58) 渡辺俊夫, 1980: 沖餅遺跡. 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』 3 茨城県教育財団文化財調査報告Ⅲ

北相馬郡取手町向山貝塚

59) 西村正衛, 1967: 茨城県北相馬郡取手町向山貝塚. 早稲田大学教育学部学術研究16号

五領ケ台式土器の編年

栃木県

那須郡那須町伊王野木下

60) 中村紀男, 1964: 北関東における中期初頭の縄文土器. 考古学手帖24

那須郡那須町伊王野何耕地

文献60) に同じ

河内郡上河内村山向

61) 海老原郁雄・木村等ほか, 1977: 『山向遺跡』 上河内村文化財調査報告書第4集

埼玉県

浦和市大谷場

62) 鈴木斌, 工事中出土の五領ケ台式土器. 『大谷場貝塚』南浦和地区埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
秩父郡吉田町わらび沢岩陰

63) 今村啓爾, 1980: わらび沢岩陰遺跡. 『新編埼玉県史』 資料編1

千葉県

銚子市南小川町粟島台

64) 野口義麿, 1952: A・B地点出土土器. 上代文化22輯(粟島台遺跡特輯)

香取郡小見川町下小野貝塚

65) 江森正義・岡田茂弘・篠遠喜彦, 1950: 千葉県香取郡下小野貝塚発掘調査報告. 考古学雑誌36巻3号

香取郡小見川町白井雷貝塚

66) 西村正衛, 1951: 千葉県香取郡神里村白井雷貝塚発掘調査概報, 古代3号

67) 西村正衛, 1954: 千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚(第2・3次調査). 学術研究 一人文・社会・自然 3号

八日市場市八辺 八辺貝塚

68) 清水潤三, 1958: 千葉県栗山川溪谷における貝塚の地域的研究. 史学31巻1~4号

香取郡多古町染井

慶応大学資料(未発表)

成田市北羽鳥

69) 小川和博, 1977: 成田市における縄文時代中期の一資料. 奈和15号

成田市子ノ神

70) 小川和博ほか, 1980: 川栗台古墳群発掘調査報告二. 成田市の文化財11集

成田市三里塚 No. 13 遺跡

71) 中山吉秀, 1971: No. 13 遺跡. 『三里塚』千葉県北総公社

印旛郡富里村日吉倉

72) 中山吉秀, 1975: 松ノ木台遺跡出土の縄文式土器. 『遺跡日吉倉』, 芝山はにわ博物館研究報告Ⅱ

印旛郡八街町置里

73) 日暮学, 1978: 八街町の主要遺跡. 『榎戸第1遺跡』 榎戸遺跡調査団

印旛郡印西町高根北

74) 中山吉秀ほか, 1974: 高根北遺跡. 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ 千葉県企業庁

印旛郡白井町復山谷

75) 清藤一順ほか, 1978: 復山谷遺跡. 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅵ 千葉県文化財センター

印旛郡白井町一本桜

76) 中山吉秀, 1973・1976: 一本桜遺跡. 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ・Ⅴ 千葉県文化財センター

千葉市都町宝導寺台貝塚

今村啓爾

- 77) 庄司克, 1970: 宝導寺台貝塚発掘調査概報. 貝塚博物館紀要3号
千葉市高田町藤沢
- 78) 瀬戸久夫・高橋博文, 1979: 藤沢遺跡. 『千葉市奈木台・藤沢・中芝・清水作』 千葉県文化財センター
市原市台遺跡B地点
上総国分寺台遺跡調査団資料(未発表)
八千代市萱田町川崎山
- 79) 平岡和夫・大賀健, 1979: 『萱田町川崎山遺跡』 山武考古学研究所
船橋市旭町後貝塚
- 80) 東京国立博物館, 1953: 『東京国立博物館考古図録』 朝日新聞社
船橋市藤原町法蓮寺山
- 81) 栗本佳弘ほか, 1975: 『小金線』 日本鉄道建設公団
船橋市飯山満東
- 82) 清藤一順(土器)ほか, 1975: 『飯山満東遺跡』 日本住宅公団東京支所
市川市大野町鳴神山
- 83) 高橋良治, 1959: 千葉県鳴神山貝塚の土器. 考古学手帖10
市川市国分旧東練兵場貝塚
- 84) 西村正衛, 1961: 千葉県市川市国分旧東練兵場貝塚. 学術研究10号
流山市中野久木
- 85) 古宮隆信編著, 1974: 『流山市中野久木遺跡調査報告書』 同調査団
木更津市菅生清水谷
- 86) 中山吉秀ほか, 1975: 『清水谷遺跡』 清水谷古墳発掘調査団
君津市矢那苗見作
- 87) 石田広美, 1980: 『君津広域水道用水供給事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
千葉県夷隅大原町新田野貝塚
- 88) 武井則道(土器)ほか, 1975: 『新田野貝塚』 立教大学考古学研究会
安房郡豊田村加茂
- 89) 江坂輝弥(土器)ほか, 1952: 『加茂遺跡』 三田史学会考古学民族学叢書第1冊
館山市船越鉾切神社洞窟
- 90) 金子浩昌・和田哲・玉口時雄ほか, 1958: 『館山鉾切洞窟』 千葉県教育委員会
- 東京都**
- 世田谷区狐塚
- 91) 早乙女雅博, 1980: 狐塚古墳の公園整備に伴う調査. 『根津山遺跡・狐塚古墳他』 世田谷区遺跡調査報告1
東村山市御伊勢前
- 92) 高橋健樹ほか, 1981: 『御伊勢前』 武蔵村山市文化財資料集2
秋川市二宮前田耕地
- 93) 松井和浩(第Ⅲ群土器), 南洋一郎(1号埋甕)ほか, 1979: 『前田耕地』Ⅱ 秋川市教育委員会
八王子市元八王子月夜峰
- 94) 久保昇, 1972: 八王子市月夜峰・松子前両遺跡採集の五領ケ台式土器について. 多摩考古12号
八王子市石川町西野
- 95) 横山悦枝, 1974: 中期初頭の土器. 『北八王子西野遺跡』 東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会
八王子市中野町明神社北
- 96) 梶国男・佐々木蔵之助, 1976: 八王子市明神社北遺跡第3次調査概報. 考古学ジャーナル122号

五領ケ台式土器の編年

八王子市犬目町

97) 吉田格, 1956: 各地域の縄文式土器—関東—『日本考古学講座』3 河出書房

八王子市梶田町梶田第Ⅳ遺跡

98) 新藤康夫(土器)ほか, 1975: 『梶田遺跡群』 八王子市梶田遺跡調査会

99) 中西充, 1979: 出土土器の編年の位置. 『梶田遺跡群1978年度調査概報』 八王子市梶田遺跡調査会
八王子市梶田町神谷原(梶田第Ⅱ遺跡)

100) 中西充ほか, 1982: 『神谷原』Ⅱ 八王子市梶田遺跡調査会

八王子市寺田町下寺田

101) 新藤康夫(土器)ほか, 1975: 『下寺田・要石遺跡』 同調査会

南多摩郡稲城町平尾 No. 9 遺跡

102) 鈴木保彦, 1971: 縄文中期前半の土器. 『平尾遺跡調査報告』Ⅰ 同調査会

町田市本町田藤の台

103) 川口正幸ほか, 1980: 『藤の台遺跡』Ⅲ 同調査会

町田市玉川学園七丁目清水台

104) 浅川利一・戸田哲也, 1971: 町田市玉川学園清水台遺跡緊急発掘調査略報. 文化財の保護3号
西多摩郡奥多摩町とけっばら

105) 吉田格・今村啓爾ほか, 1974: 『とけっばら遺跡』 同調査会

神津島本村上の山

106) 今村啓爾ほか, 1980: 『伊豆七島の縄文文化』 武蔵野美術大学考古学研究会

三宅島島下

107) 橋口尚武ほか, 1975: 『三宅島の埋蔵文化財』 伊豆諸島考古学研究会

神奈川県

川崎市野川十三菩提

108) 甲野勇, 1932: 関東に於ける縄文式土器の一新型式に就いて. 史前学雑誌4巻3・4号

109) 樋口清之・麻生優, 1968: 『野川南台団地埋蔵文化財調査報告——十三菩提遺跡——』 野川南台団地埋蔵文化財調査団

110) 樋口清之・麻生優, 1971: 十三菩提遺跡. 神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告2

横浜市港北町下田町中駒

111) 今村啓爾・松村恵司, 1971: 横浜市日吉中駒遺跡の中期縄文式土器. 考古学雑誌57巻1号

横浜市港北区宮の原貝塚

112) 吉田格・今村啓爾ほか, 1972: 『宮の原貝塚』 武蔵野美術大学考古学研究会

横浜市緑区東方第7遺跡

113) 坂上克弘(前・中期の土器)ほか, 1974: 東方第7遺跡. 『港北ニュータウン地域内文化財調査報告』Ⅳ 同調査団

横浜市緑区池辺第4遺跡

114) 宮澤寛・今井康博ほか, 1974: 池辺第4遺跡. 『港北ニュータウン地域内文化財調査報告』Ⅳ 同調査団

横浜市緑区十日市場町霧ヶ丘第2, 第3地点

115) 今村啓爾(土器)ほか, 1973: 『霧ヶ丘』 霧ヶ丘遺跡調査団

横浜市金沢区六浦町室ノ木

116) 赤星直忠・塚田明治, 1973: 『横浜市室ノ木遺跡』 横須賀考古学会

鎌倉市関谷東正院

117) 鈴木保彦, 1972: 『東正院遺跡調査報告』 神奈川県教育委員会

平塚市金目五領ケ台貝塚

- 118) 江坂輝弥, 1949: 相模五領ケ台貝塚調査報告. 考古学集刊第3冊
- 119) 日野一郎・岡本勇・小川裕久ほか, 1970: 『平塚市広川五領ケ台貝塚調査報告』 平塚市文化財調査報告書第9集
中郡二宮町平台
- 120) 上川名昭, 1972: 中期縄文式土器. 『平台遺跡とその出土遺物』 同遺跡調査会
秦野市渋沢山之台
- 121) 山下正博・池谷信之, 1981: 山之台遺跡出土の土器と石器. 小田原考古学研究会会報10号
足柄下郡真鶴町上釈迦堂
- 122) 杉山博久, 1968: 上釈迦堂遺跡の五領ケ台式土器. 考古学ジャーナル26号
- 123) 杉山博久, 1970: 神奈川県西南部地域における五領ケ台式土器. 『平塚市広川五領ケ台貝塚調査報告』 平塚市文化財調査報告書第9集
- 124) 杉山博久, 1971: 神奈川県真鶴町釈迦堂遺跡とその出土遺物. 考古学雑誌56巻4号
足柄上郡山北町尾崎
- 125) 岡本孝之ほか, 1977: 『尾崎遺跡』 神奈川県埋蔵文化財調査報告13
- 山梨県**
都留市田野倉
- 126) 山本正則, 1975: 都留市田野倉出土の縄文式土器. 甲斐考古12の1
大月市富浜町宮谷
- 127) 川崎義雄・重住豊ほか, 1972: 『山梨県大月市宮谷遺跡発掘調査報告』 大月市教育委員会
東山梨郡勝沼町寺平
- 128) 末木健ほか, 1977: 『寺平遺跡発掘調査報告書』 同調査会
東八代郡中道町下向山
- 129) 吉田格, 1963: 山梨県東八代郡下向山遺跡——縄文中期五領ケ台式土器の研究—— 考古学雑誌48巻3号
北巨摩郡明野村机腰
文献 128)
- 北巨摩郡小淵沢町上平出
- 130) 末木健ほか, 1974: 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告——北巨摩郡小淵沢町地内——』
山梨県教育委員会
文献 128)
- 長野県**
諏訪郡富士見町曾利東
- 131) 藤森栄一, 1965: 中期初頭の諸型式. 『井戸尻』 中央公論美術出版
諏訪郡富士見町曾利
- 132) 武藤雄六・宮坂光昭・長崎元広・小林公明ほか, 1978: 『曾利(第3, 4, 5次発掘調査報告書)』
富士見町教育委員会
諏訪郡富士見町高森新道
文献 131)
- 諏訪郡富士見町籠畑
- 133) 武藤雄六, 1968: 長野県富士見町籠畑遺跡の調査. 考古学集刊4-1
諏訪郡富士見町九兵衛尾根
文献 131)
- 諏訪郡富士見町烏帽子貉沢
文献 131)

五領ヶ台式土器の編年

諏訪郡原村菖蒲沢大石

- 134) 伴信夫ほか, 1976: 大石遺跡. 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——茅野市原村その1・富士見町その2——』

茅野市郷狩野頭殿沢

- 135) 岩佐今朝人・伴信夫ほか, 1981: 頭殿沢遺跡. 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——茅野市その4・富士見町その3——』 長野県教育委員会

茅野市金沢判ノ木山西

- 136) 小林秀夫・百瀬長秀ほか, 1971: 茅野市判ノ木山西遺跡. 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘報告書——茅野市原村その3——』

諏訪市上諏訪町踊場

- 137) 藤森栄一, 1934: 信濃上諏訪町踊場の土器. 人類学雑誌49巻10号

岡谷市長地梨久保

- 138) 戸沢充則・宮沢光昭, 1951: 長地村梨久保遺跡調査報告. 諏訪考古学7号

- 139) 宮坂光昭, 1965: 長野県岡谷市梨久保遺跡の再調査. 長野県考古学会誌3号

- 140) 藤森栄一, 1969: 『縄文式土器』 中央公論美術出版

岡谷市長地扇平

- 141) 会田進(土器)ほか, 1974: 『扇平遺跡』 郷土の文化財7 岡谷市教育委員会

岡谷市湊花岡船霊社

- 142) 青沼博之・島田哲男ほか, 1980: 船霊社遺跡『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——岡谷市その4——』 長野県教育委員会

岡谷市川岸新倉後田原

- 143) 戸沢充則編, 1970: 『後田原遺跡』 岡谷市文化財調査報告3

岡谷市川岸原沢

- 144) 藤森栄一, 1956: 各地域の縄文式土器——中部——『日本考古学講座』3 河出書房

小県郡長門町片羽

- 145) 岩佐今朝人(中期の土器)ほか, 1976: 『片羽遺跡』 長門町教育委員会

上伊那郡箕輪町中箕輪堂地狐窪

- 146) 酒井幸則ほか, 1979: 堂地遺跡. 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——上伊那郡箕輪町——』

伊那市伊那月見松

- 147) 藤沢宗平・林茂樹・下平秀夫・手前博之ほか, 1968: 『月見松遺跡緊急発掘調査報告書』 伊那市教育委員会

- 148) 遮那藤麻呂ほか, 1974: 月見松遺跡. 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——伊那市その2——』

伊那市西春近山寺垣外

- 149) 小池政美ほか, 1973: 山寺垣外遺跡. 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——伊那市西春近——』

駒ヶ根市赤穂荒神沢

- 150) 気賀沢進・小原晃一, 1979: 『荒神沢遺跡』 駒ヶ根市教育委員会発掘調査報告第9集

静岡県

賀茂郡河津町段間

- 151) 外岡龍二, 1980: 賀茂郡河津町段間遺跡, 『縄文土器の交流とその背景』 静岡県考古学会シンポジウム4

田方郡大仁町三福向原

今 村 啓 爾

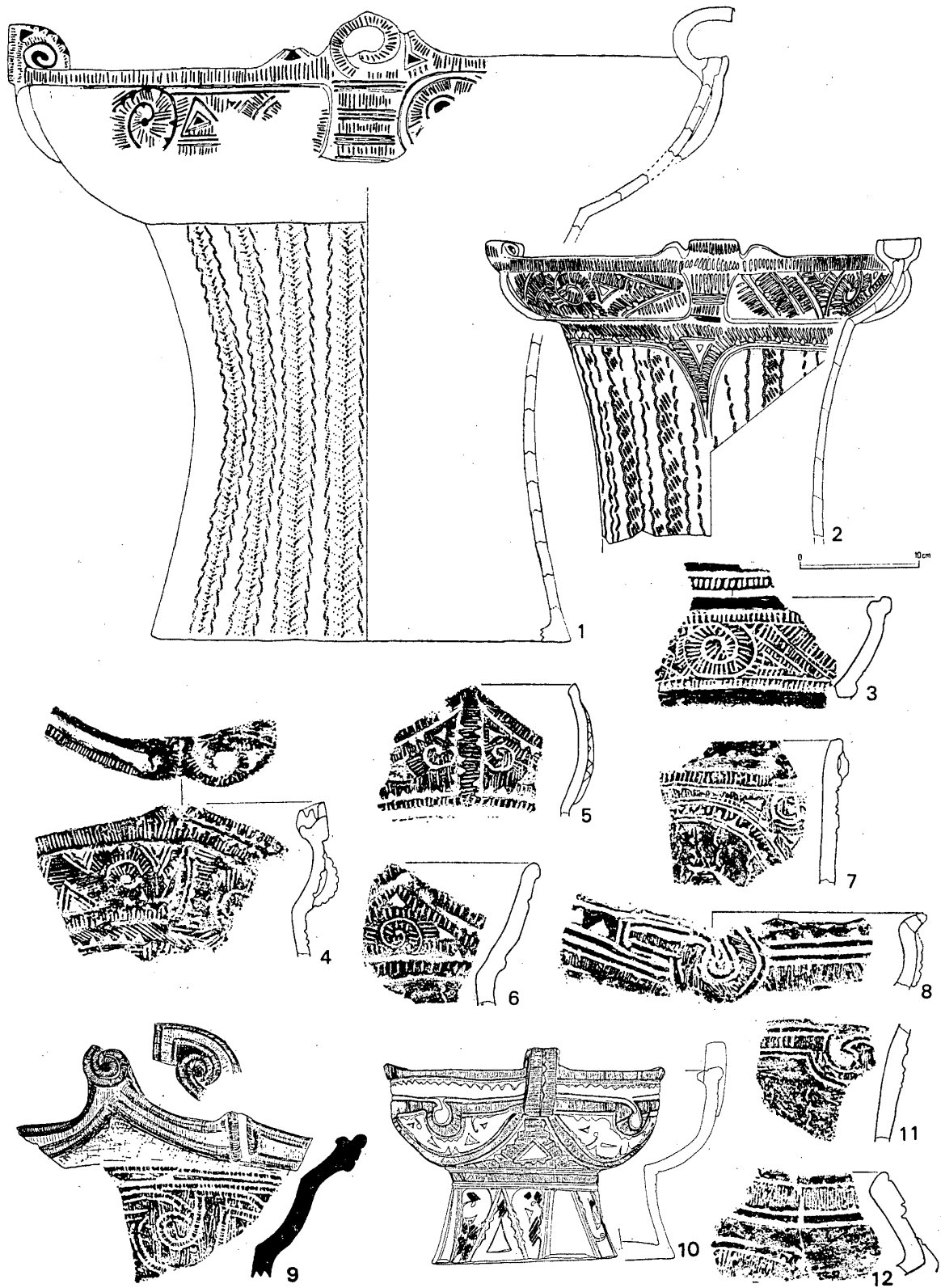
- 152) 小野真一ほか, 1971: 『三福向原』 沼津考古学研究所研究報告第5冊
沼津市長井崎
- 153) 関野哲夫ほか, 1980: 『長井崎遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書第18集
駿東郡長泉町柏窪
- 154) 江藤千万樹, 1938: 静岡県駿東郡長泉町柏窪の石器時代遺跡. 考古学 8 卷 5 号
- 155) 中野国雄・平川昭夫, 1980: 『柏窪遺跡発掘調査概報』 長泉町教育委員会
- 156) 池谷信之, 1980: 駿東郡長泉町柏窪遺跡. 『縄文土器の交流とその背景』 静岡県考古学会シンポジ
ウム 4

五領ケ台式土器の編年



第3図 十三菩提式後葉 (1~4: 第3段階, 5~13: 第4段階, 14: 第4段階?)

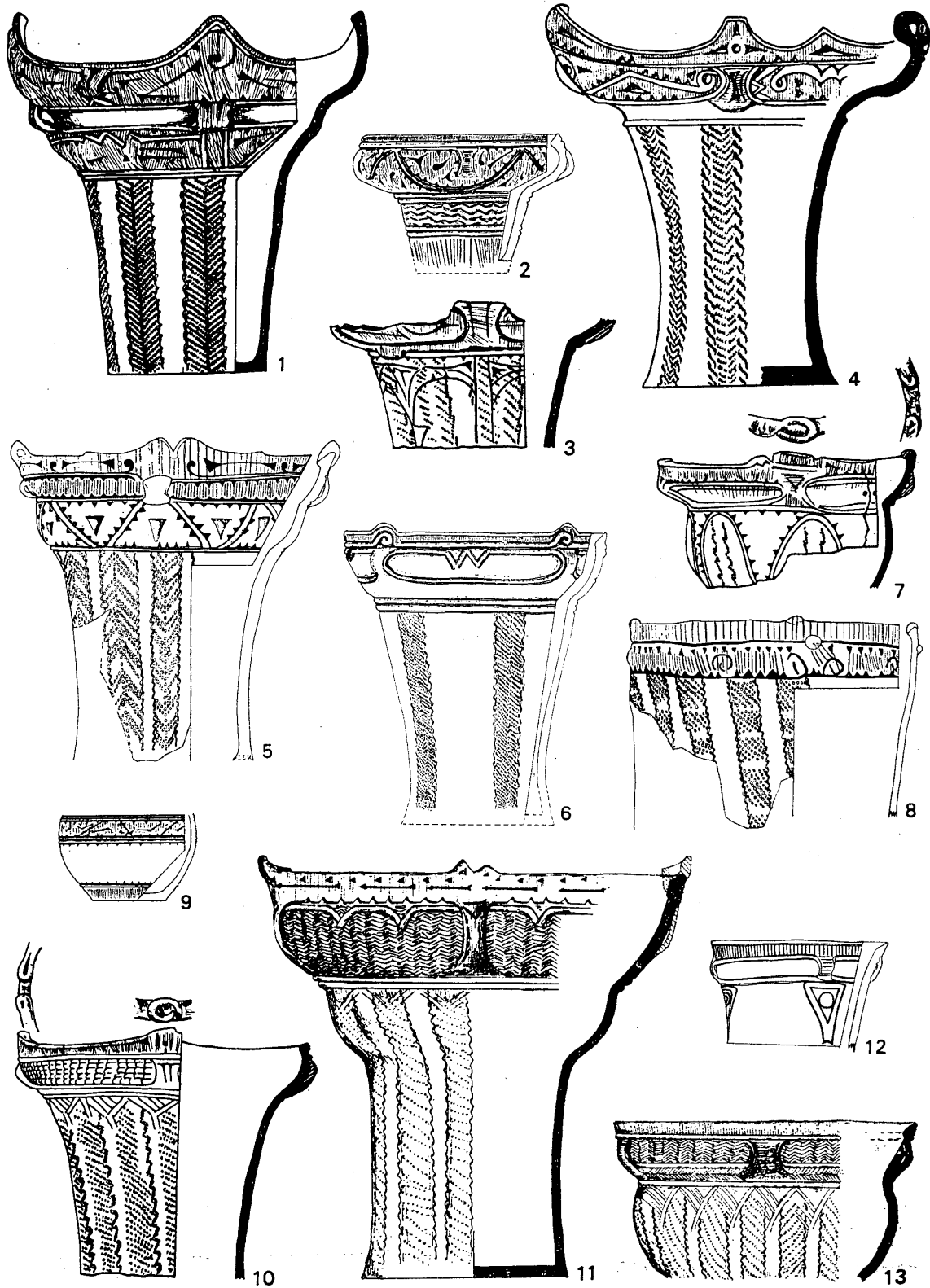
1: 神奈川宮の原, 2, 4: 神奈川室の木, 3: 千葉加茂, 5, 7: 神奈川中駒, 6, 8~9, 11, 12, 14: 神奈川霧ヶ丘, 10: 神奈川池辺第4, 13: 神奈川東方第7 (実測図1/6, 拓本1/4, 以下同じ)



第4図 五領ケ台I a式 (1~7: I a式, 8~12: I a式?)

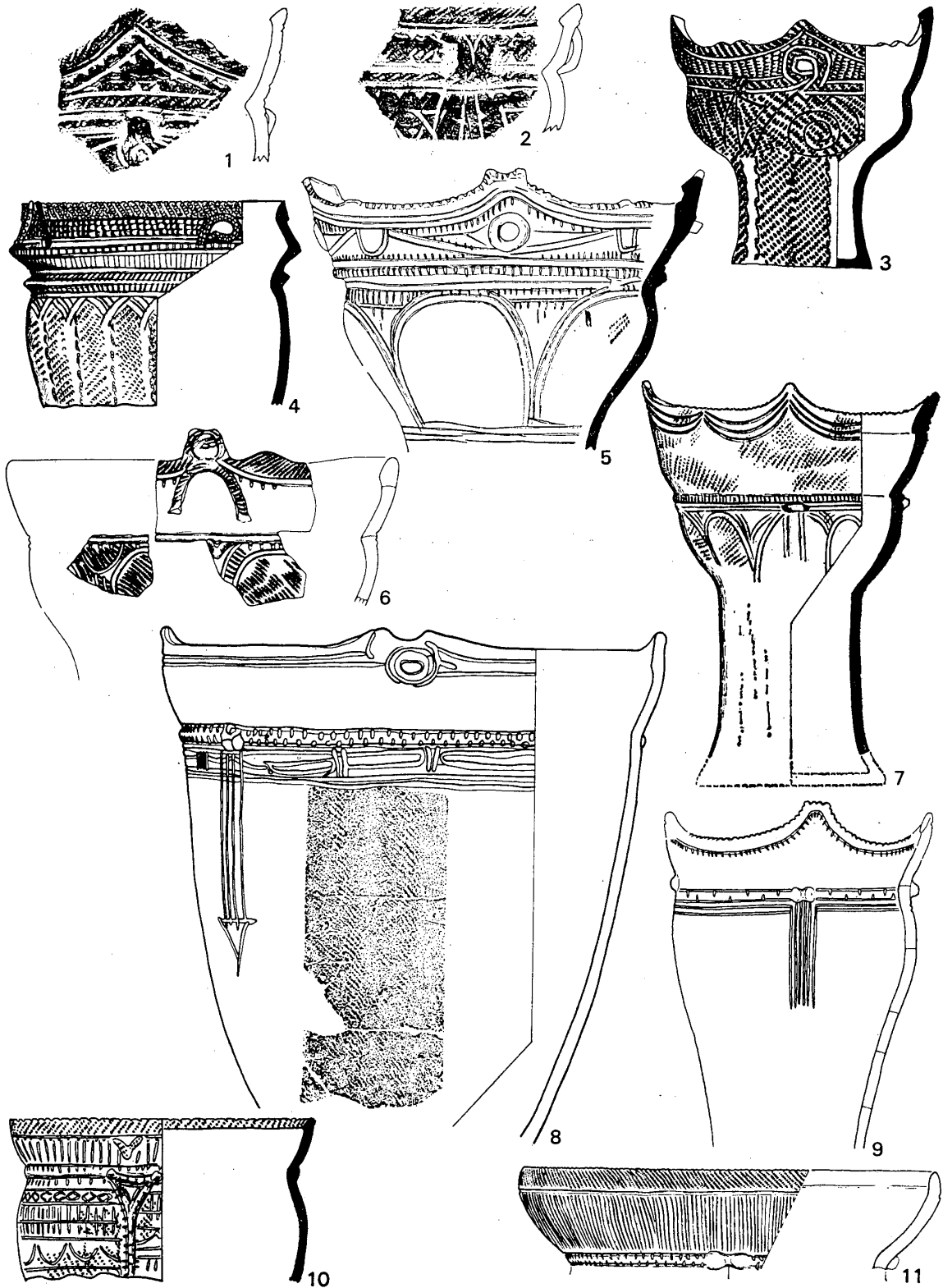
1, 9: 神奈川中駒, 2, 4~8, 11~12: 神奈川池辺第4, 3: 神奈川東方第7, 10: 静岡長井崎

五領ケ台式土器の編年



第5図 五領ケ台 I b 式

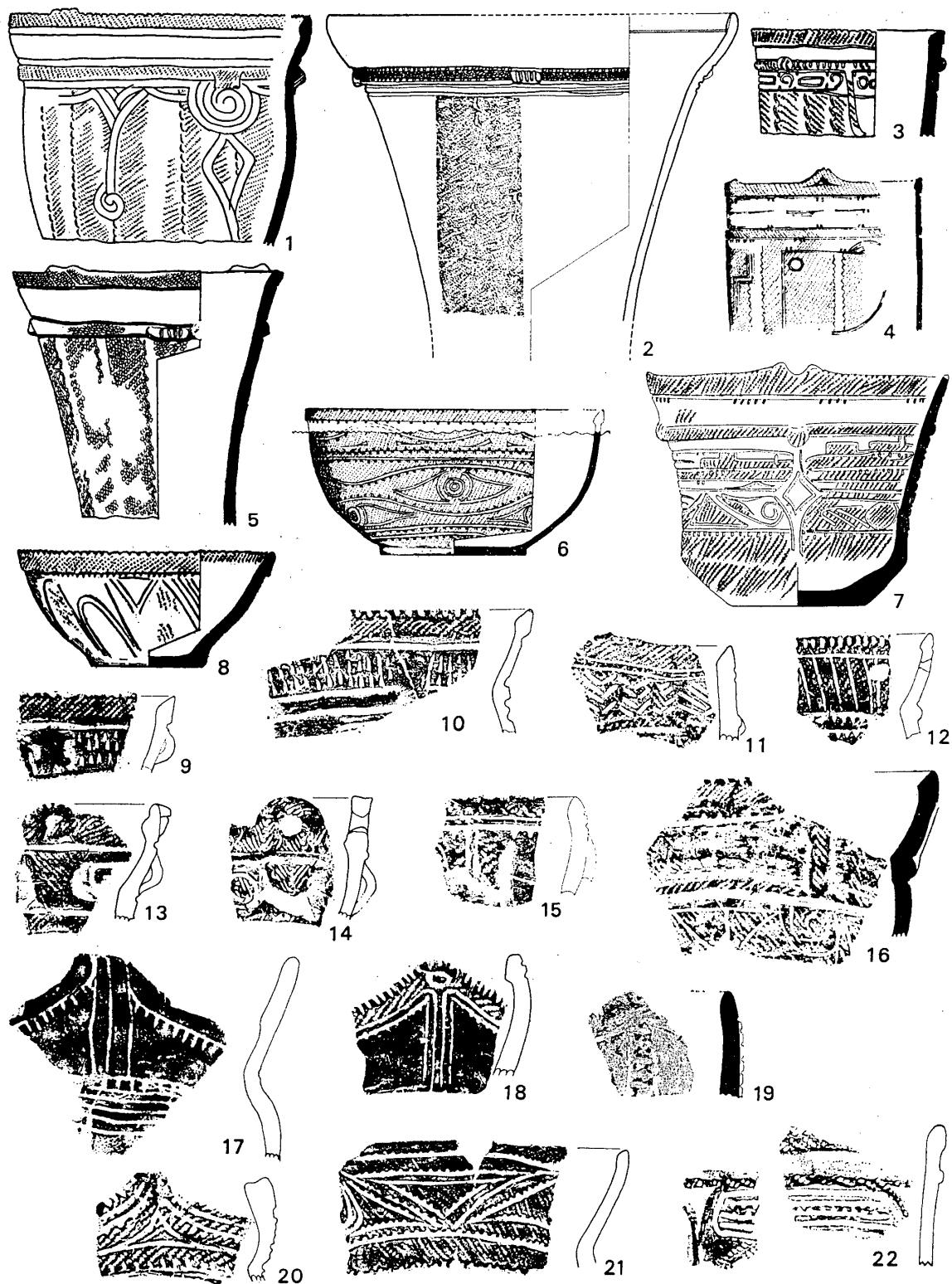
1, 3, 7, 10: 神奈川宮の原, 2, 5, 6, 8, 9, 12: 東京明神社北, 4: 長野籠畑, 11, 13: 長野梨久保



第6図 五領ケ台 I b 式 (1~3), 五領ケ台 II a 式 (4~11)

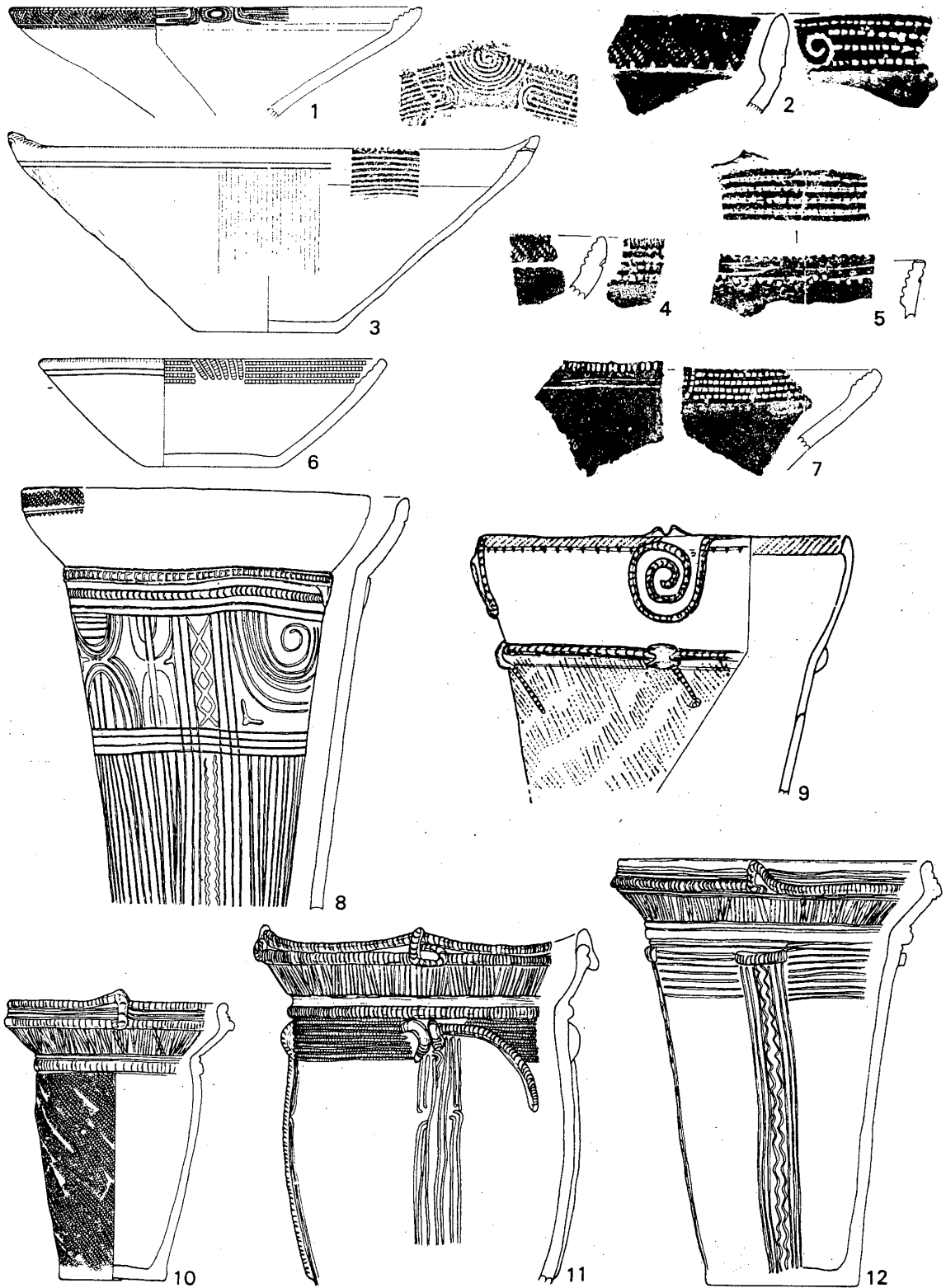
1, 2 : 東京明神社北, 3, 4, 10 : 神奈川宮の原, 5 : 長野後田原, 6, 11 : 桐田第IV, 7 : 長野九兵衛尾根, 8 : 長野扇平, 9 : 神奈川山之台

五領ケ台式土器の編年



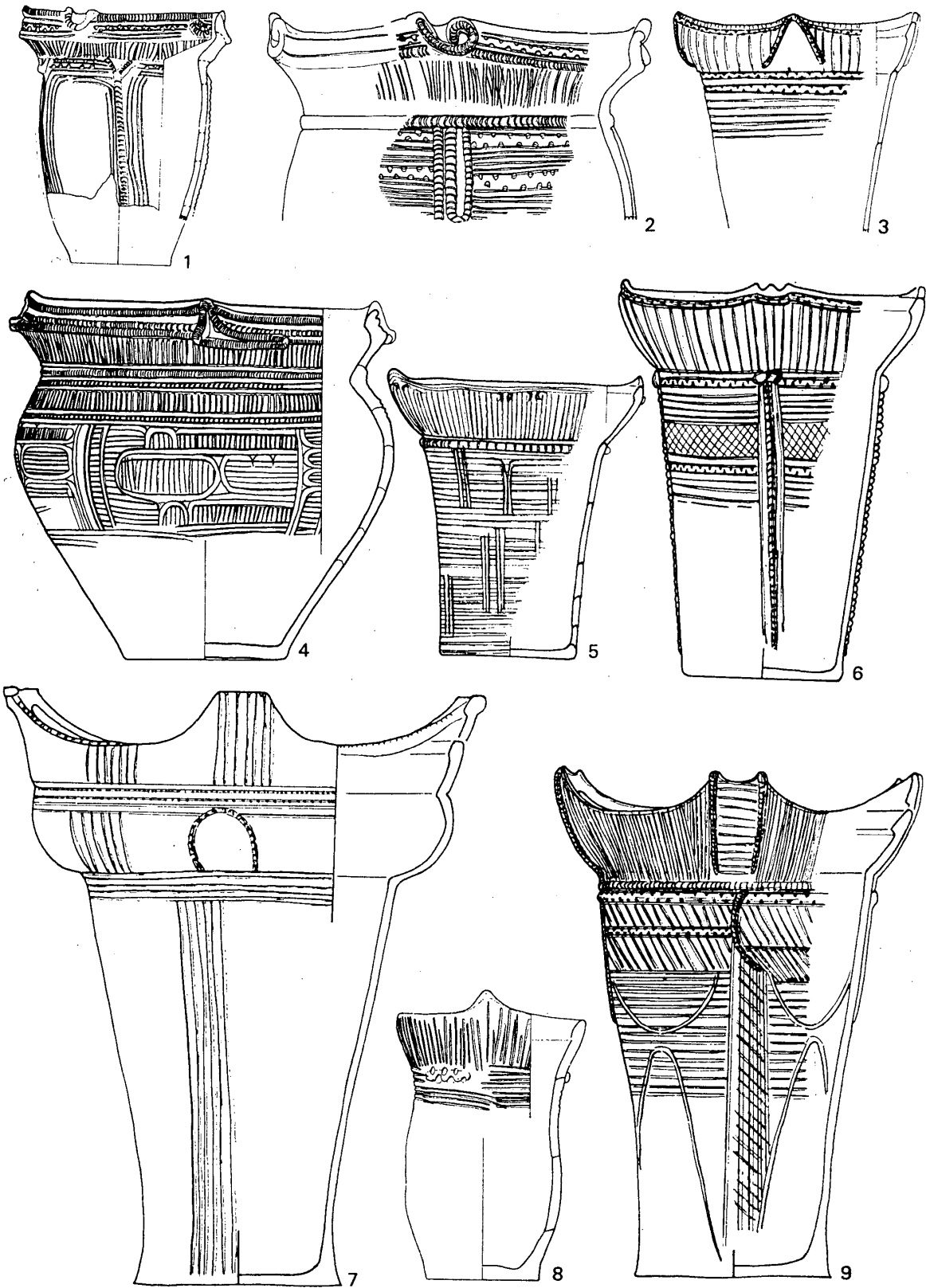
第7図 五領ケ台Ⅱa式

1, 3, 5: 神奈川宮の原, 2: 長野扇平, 4, 6: 長野梨久保, 7: 長野後田原, 8: 長野九兵衛尾根, 9, 10, 12: 神奈川東方第7, 11: 神奈川尾崎, 13, 14, 21: 神奈川山之台, 15, 16, 19: 神奈川上釈迦堂, 17: 長野荒神沢, 18, 20: 静岡柏窪, 22: 神奈川霧ヶ丘



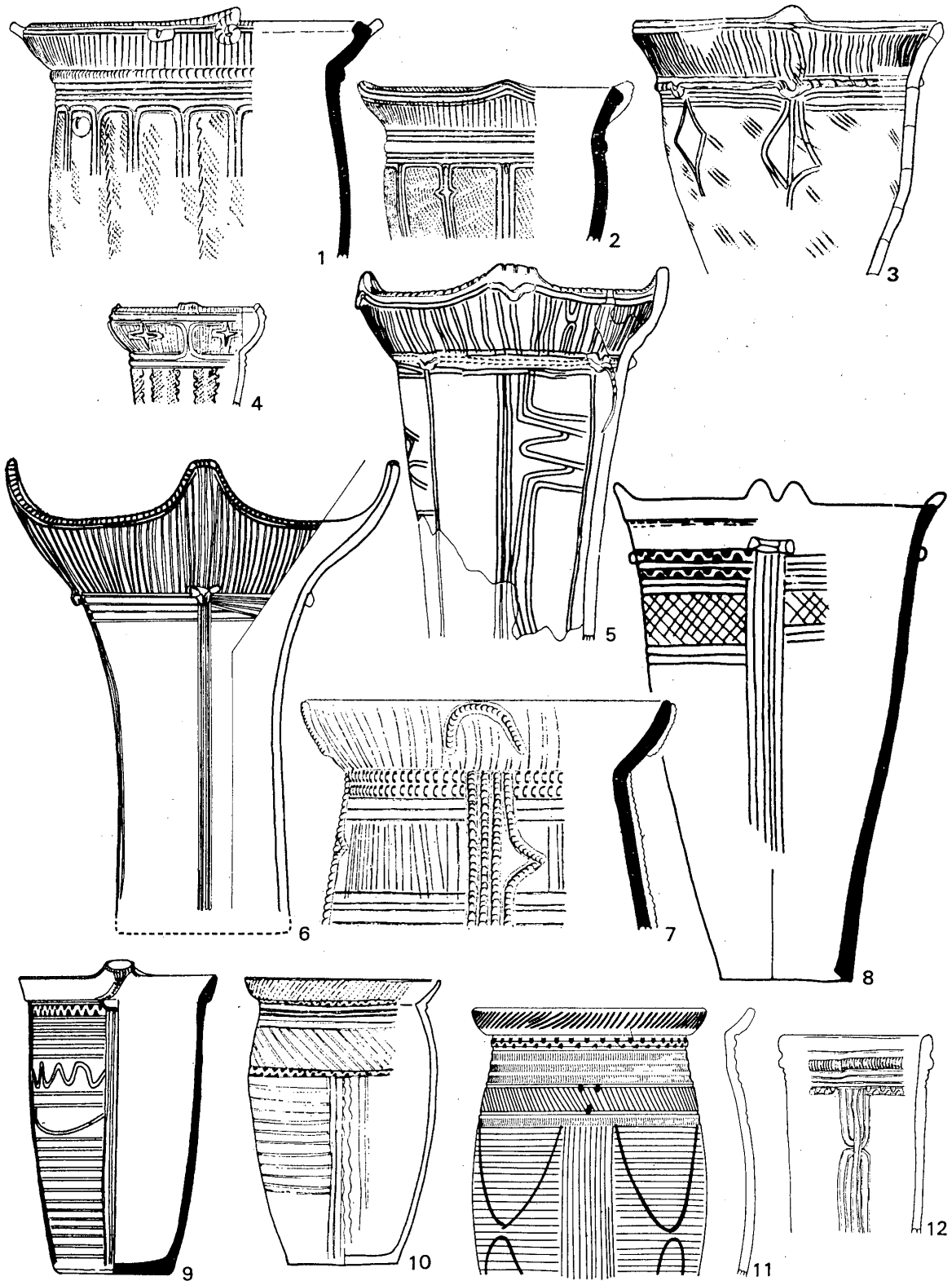
第8図 五領ケ台Ⅱa式(1~7), Ⅱa式またはⅡb式(8, 9), Ⅱb式(10~12)
 1, 10~12: 山梨上平出, 2: 長野山寺垣外, 3: 長野月見松, 4: 神奈川山之台, 5: 神奈川上釈迦堂, 6: 静岡柏窪, 7: 東京西野, 8: 神奈川山之台, 9: 長野曾利

五領ケ台式土器の編年



第9図 五領ケ台Ⅱb式

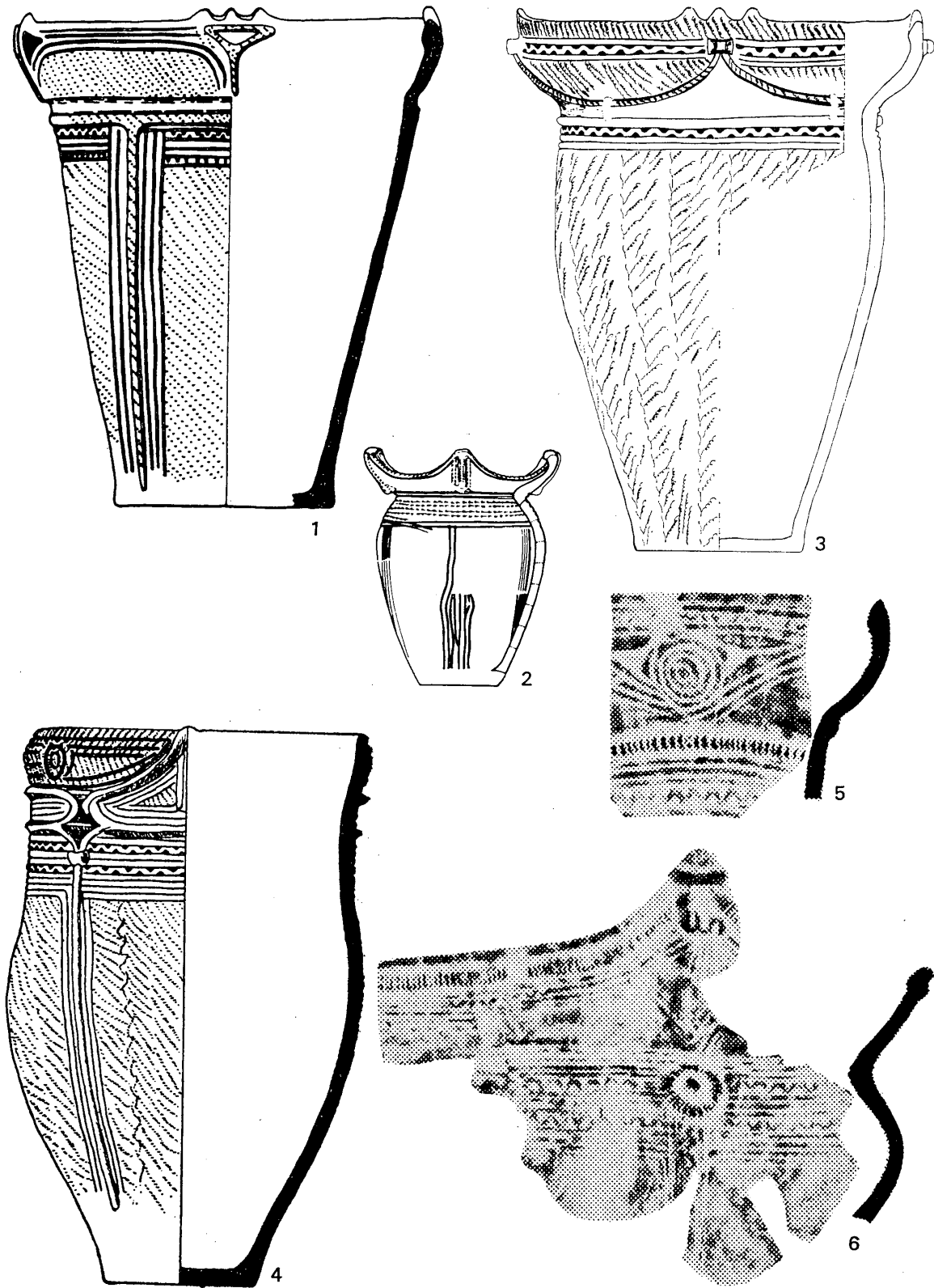
1, 8 : 東京西野, 2 : 山梨上平出, 3, 5~7, 9 : 長野曾利, 4 : 長野扇平



第10図 五領ヶ台Ⅱb式 (1, 2はⅡc式まで下る可能性がある。)

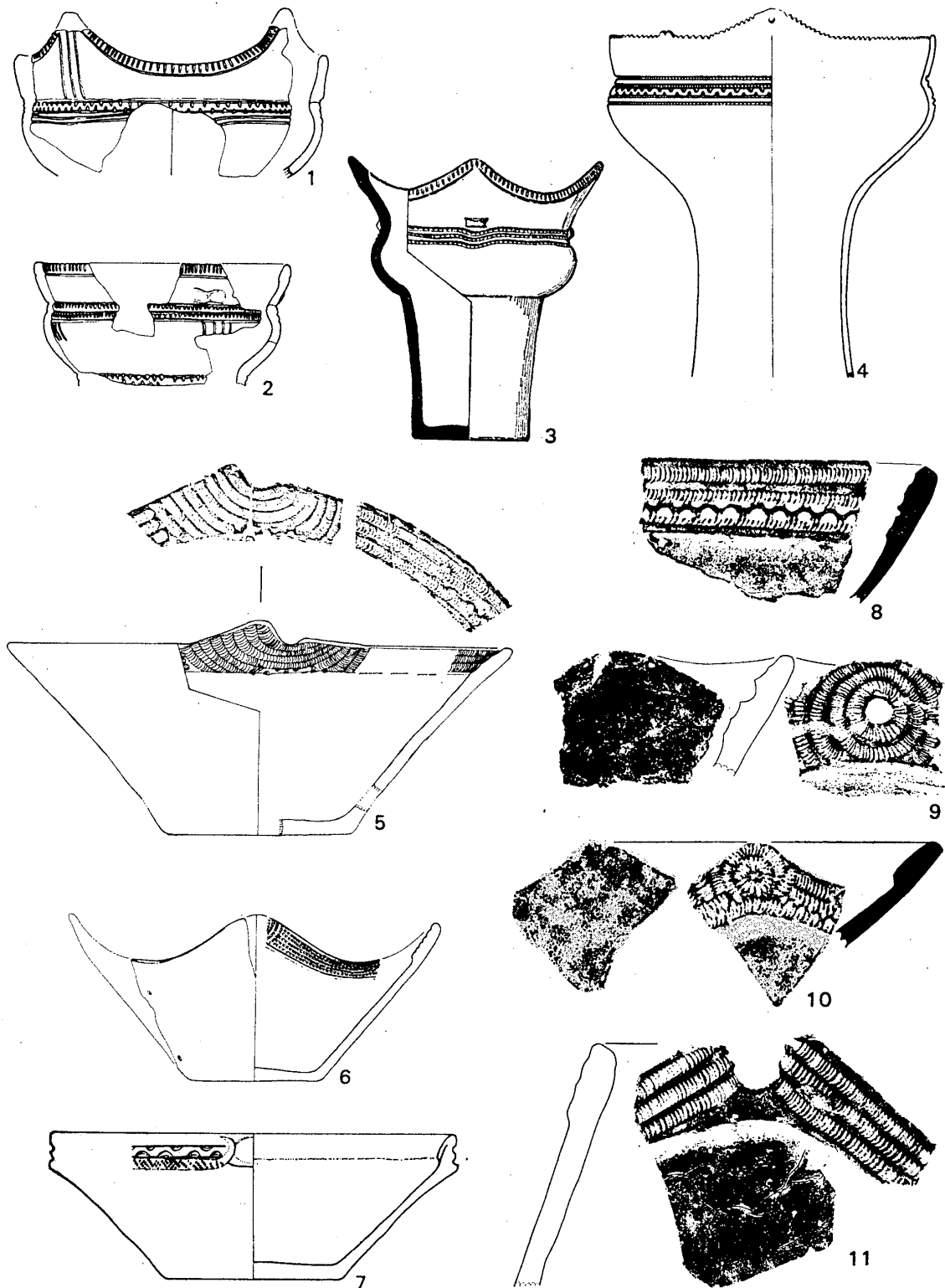
1, 2, 7: 長野月見松, 3, 5: 東京桐田第Ⅳ, 4, 10: 長野曾利, 6: 長野扇平, 8: 山梨下向山
 9: 神奈川五領ヶ台, 11: 静岡柏窪, 12: 山梨上平出

五領ケ台式土器の編年



第11図 五領ケ台Ⅱb式

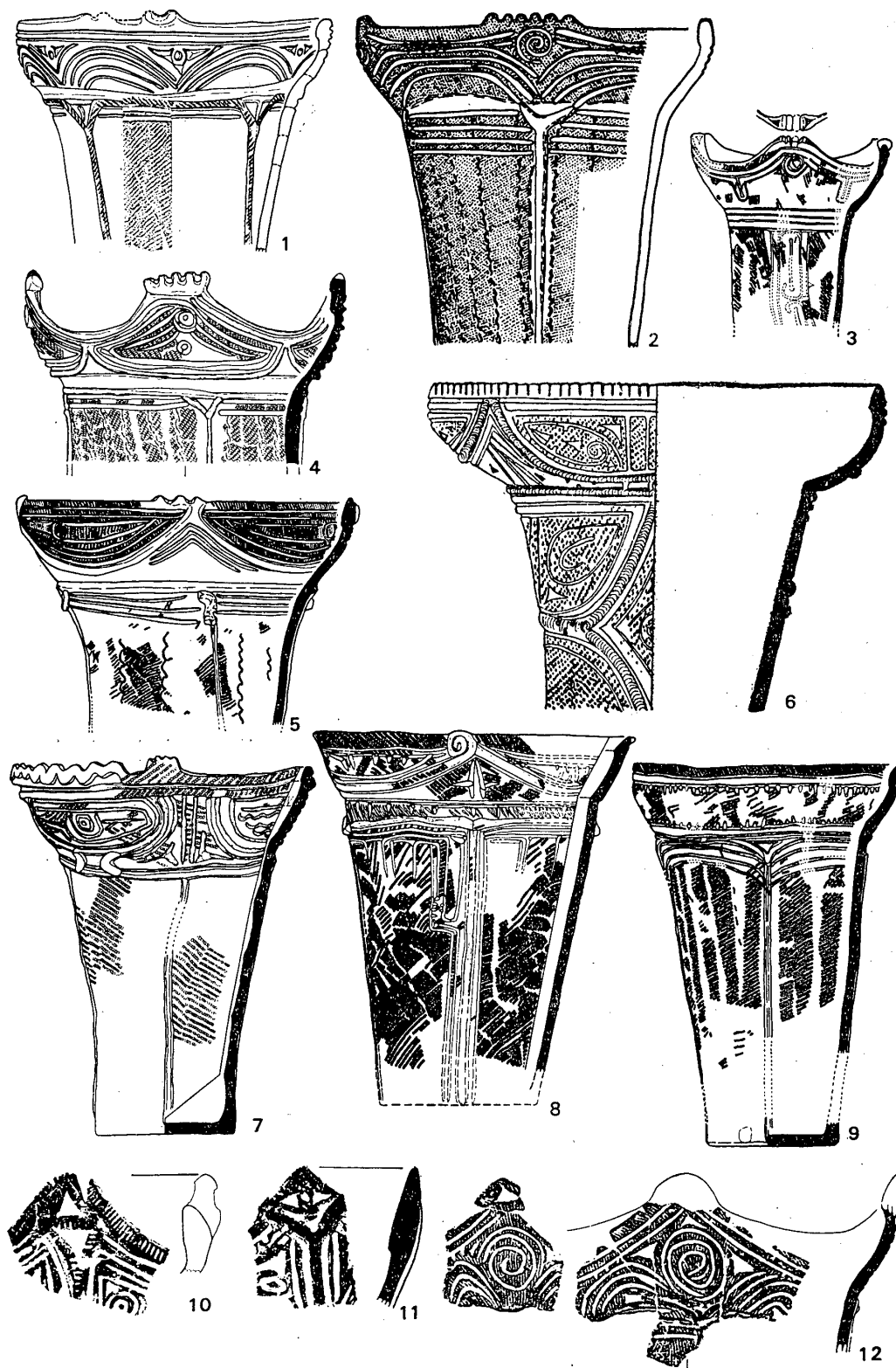
1, 5, 6 : 山梨下向山, 2 : 東京梶田第Ⅳ, 3 : 長野狐窪, 4 : 長野原沢



第12図 五領ヶ台 II b 式

1, 2, 6, 9 : 柵田第Ⅳ, 3 : 長野曾利東, 4 : 山梨宮谷, 5, 11 : 長野狐窪, 7 : 東京西野, 8 : 長野曾利, 10 : 長野月見松

五領ケ台式土器の編年



第13図 五領ケ台式Ⅱc式

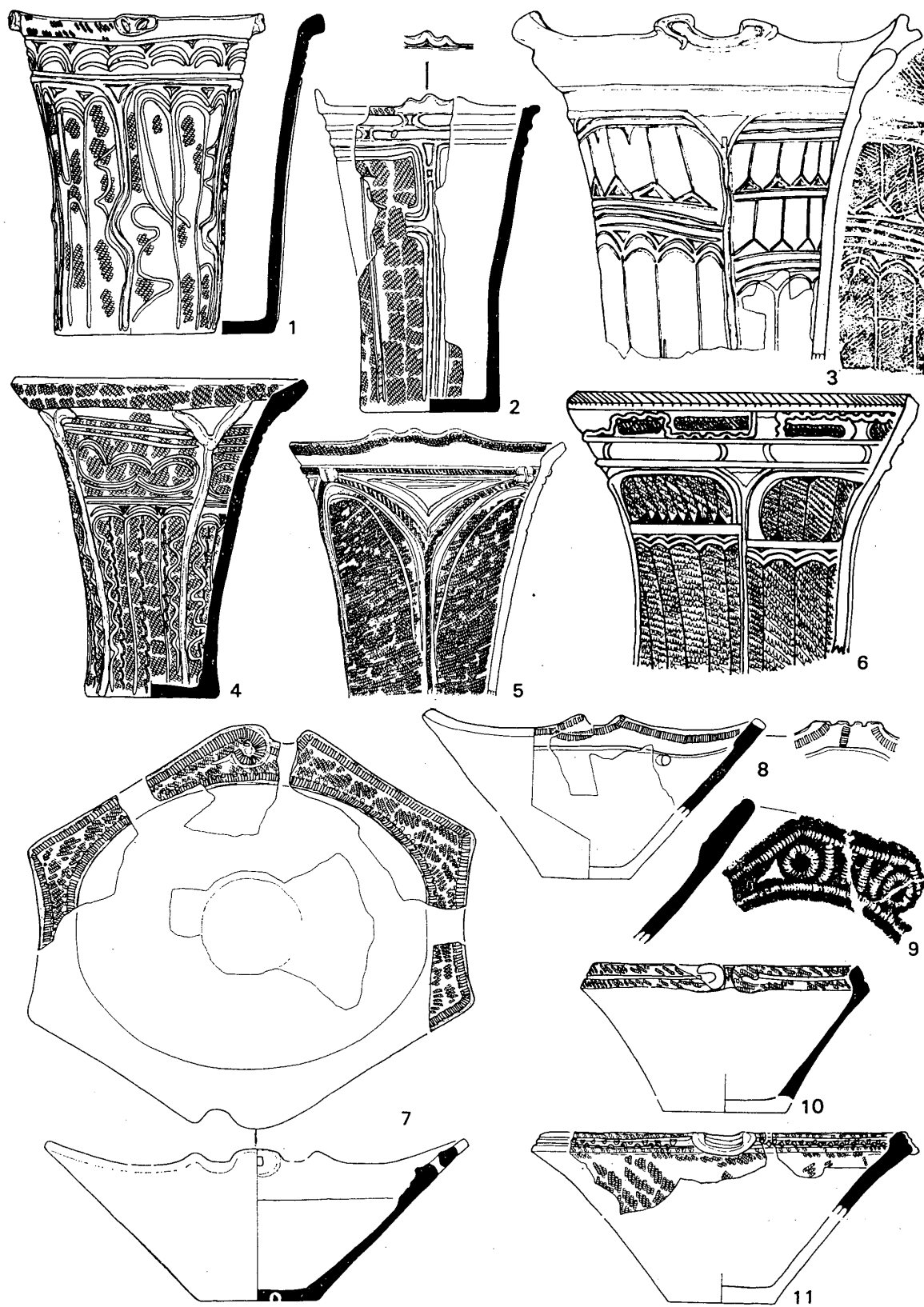
1：東京栢田第Ⅱ， 2：長野曾利， 3， 5， 7～9：長野船靈社， 4， 12：長野頭殿沢， 6：東京犬目， 10：長野狐窪， 11：東京月夜峰（実測図1/6， 拓本1/4， ただし13図12は1/6）



第14図 五領ケ台Ⅱc式

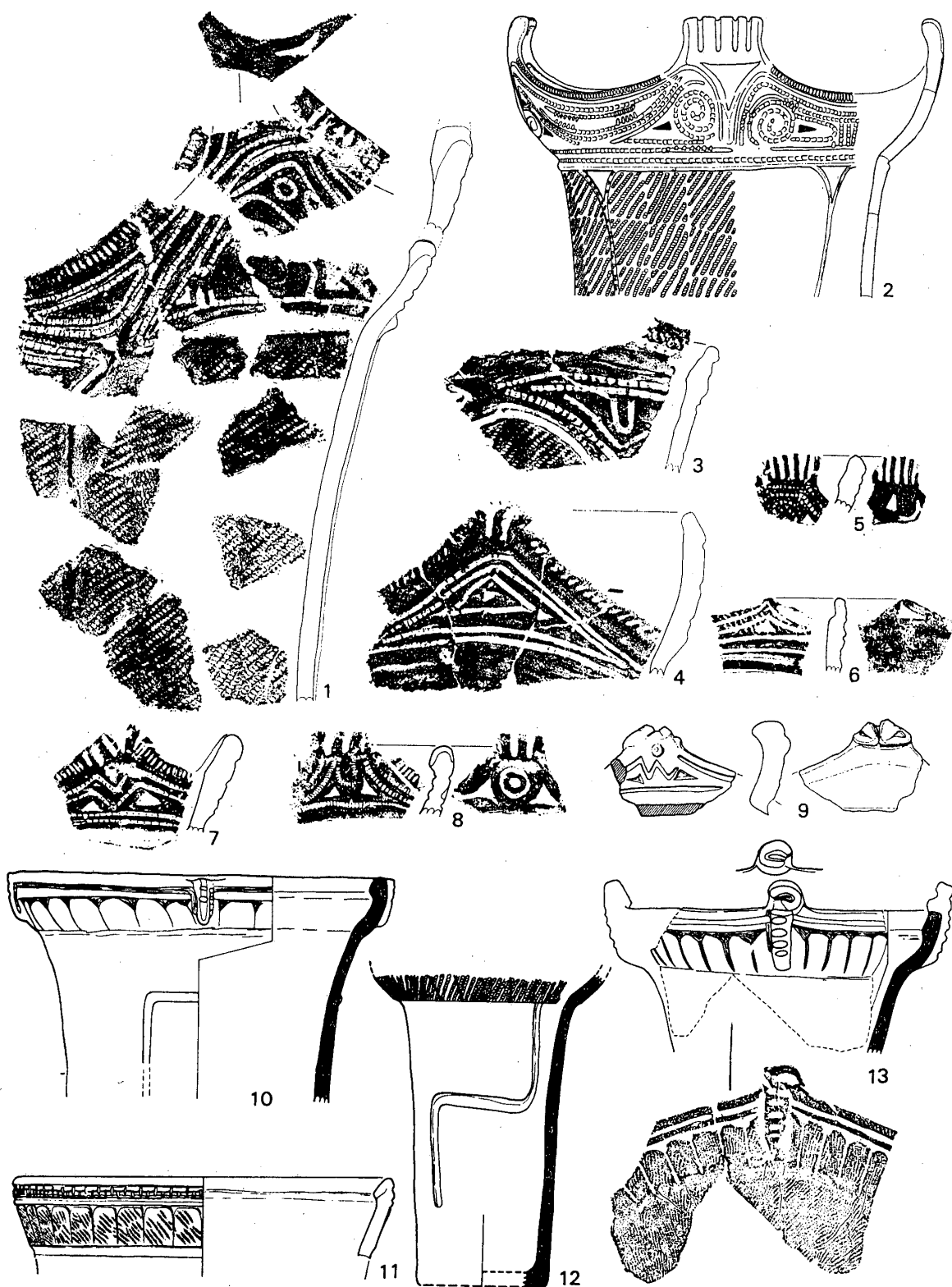
1, 4, 5 : 長野船靈社, 2, 3, 6 : 長野頭殿社, 7 : 東京前田耕地

五領ケ台式土器の編年



第15図 五領ケ台Ⅱc式

1, 2, 4, 7~11: 長野頭殿沢, 3: 東京栢田第Ⅳ, 5: 山梨机腰, 6: 長野片羽



第16図 神谷原式 (1~9), 大石式 (10~13)

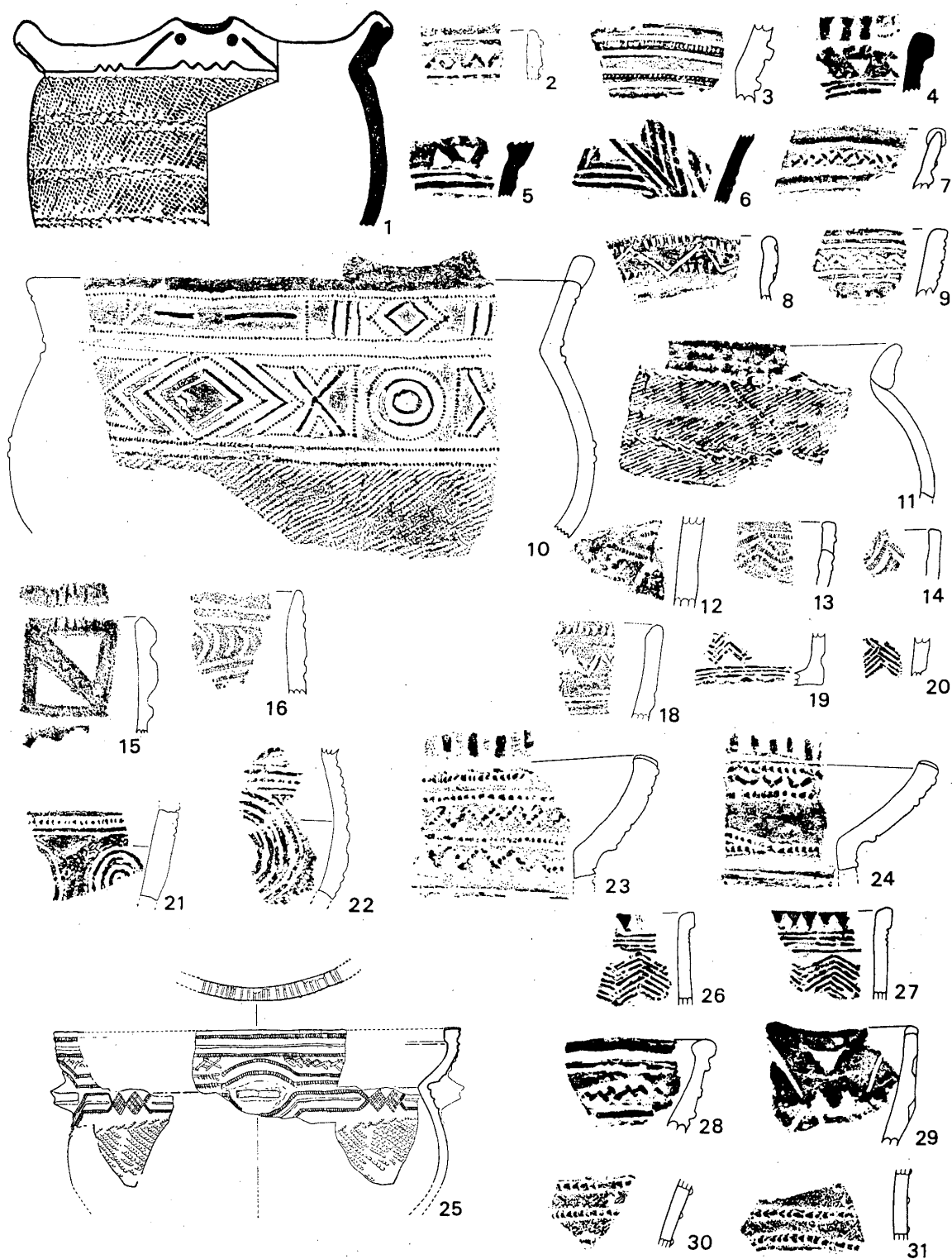
1 : 東京御伊勢前, 2 : 神奈川山之台, 3, 4 : 東京平尾, 5~9, 11 : 東京櫛田第Ⅳ, 10, 12, 13 : 長野大石

五領ケ台式土器の編年



第17図 大石式

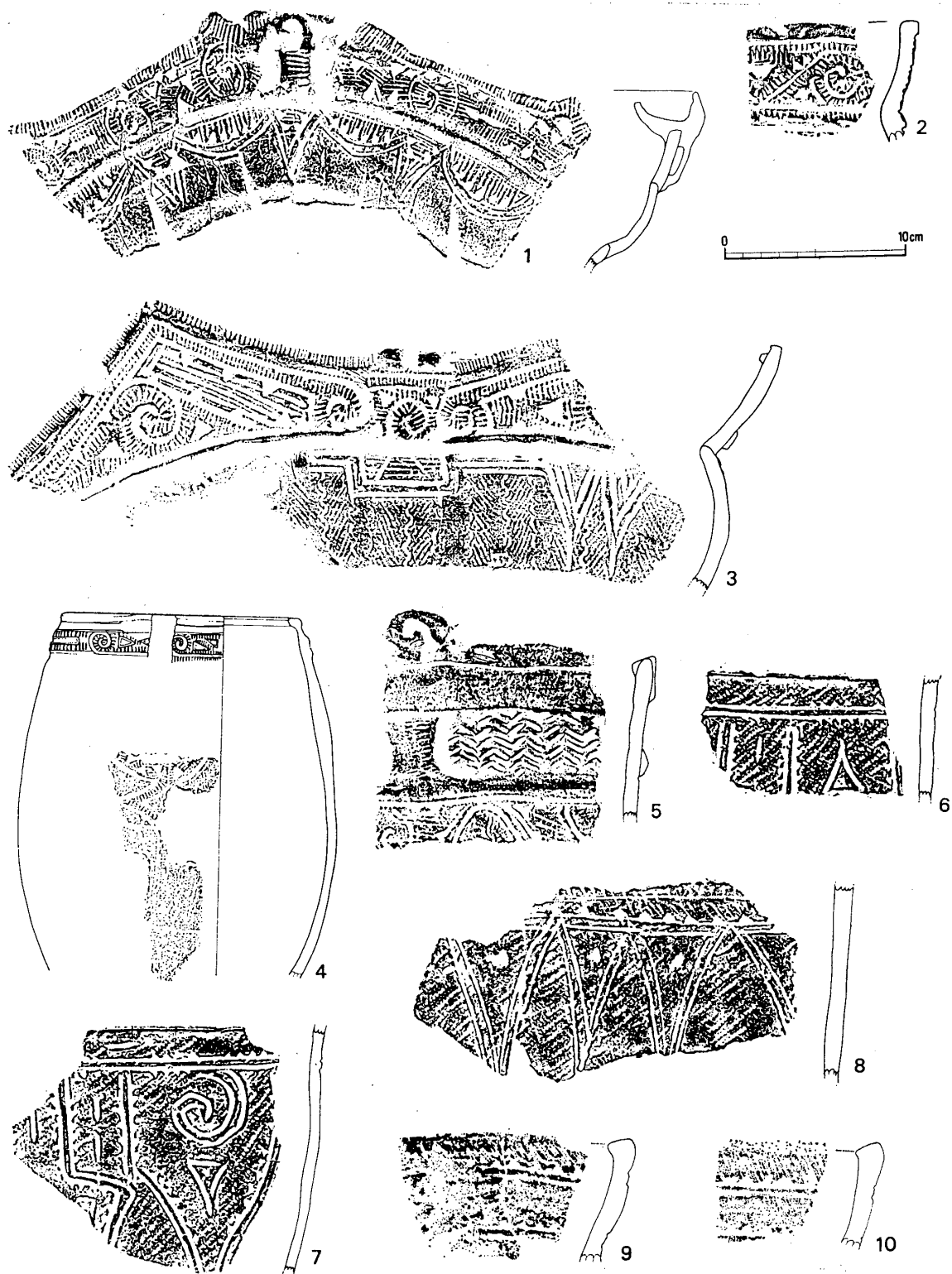
1, 2, 7, 8, 14, 15, 17, 18: 長野大石, 3, 5, 16: 長野船靈社, 4, 6, 9~13: 長野猪沢, 19: 東京島下



第18図 東関東の十三菩提式

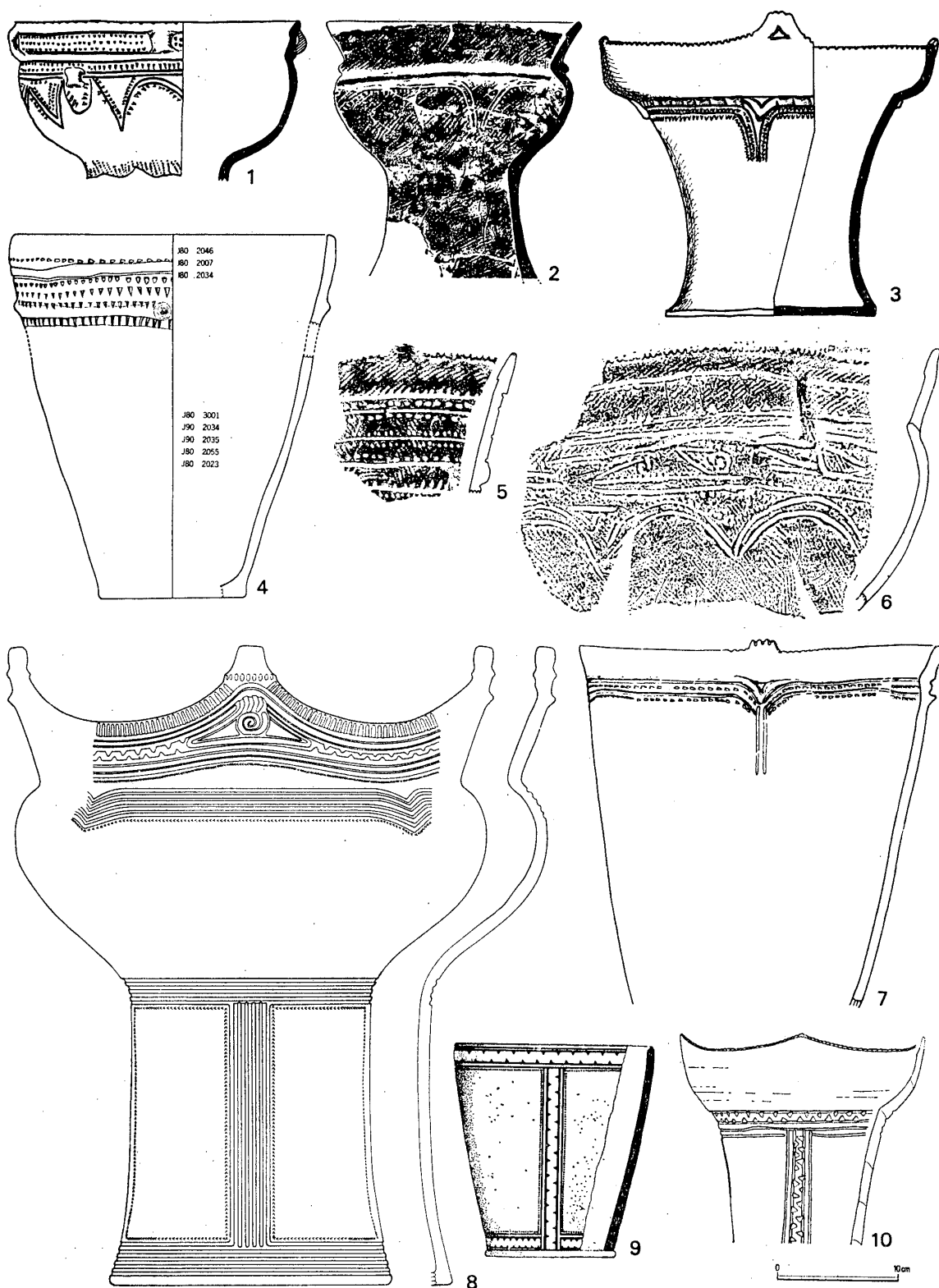
1 : 栃木木下, 2 : 栃木山向, 3 : 茨城吹上, 4~6 : 茨城伏見, 7~9 : 茨城沖餅, 10 : 千葉染井,
 11 : 千葉子ノ神, 12, 18 : 千葉一本桜, 13, 14 : 千葉三里塚 No. 13, 15, 16 : 千葉日吉倉, 19, 20 :
 千葉復山谷, 21~24 : 千葉法蓮寺山, 25 : 千葉台B, 26, 27 : 千葉川崎山, 28, 29 : 千葉宝導寺台, 30,
 31 : 千葉苗見作

五領ケ台式土器の編年



第19図 東関東の五領ケ台Ⅰa式(1~4), Ⅰb式(5~10)

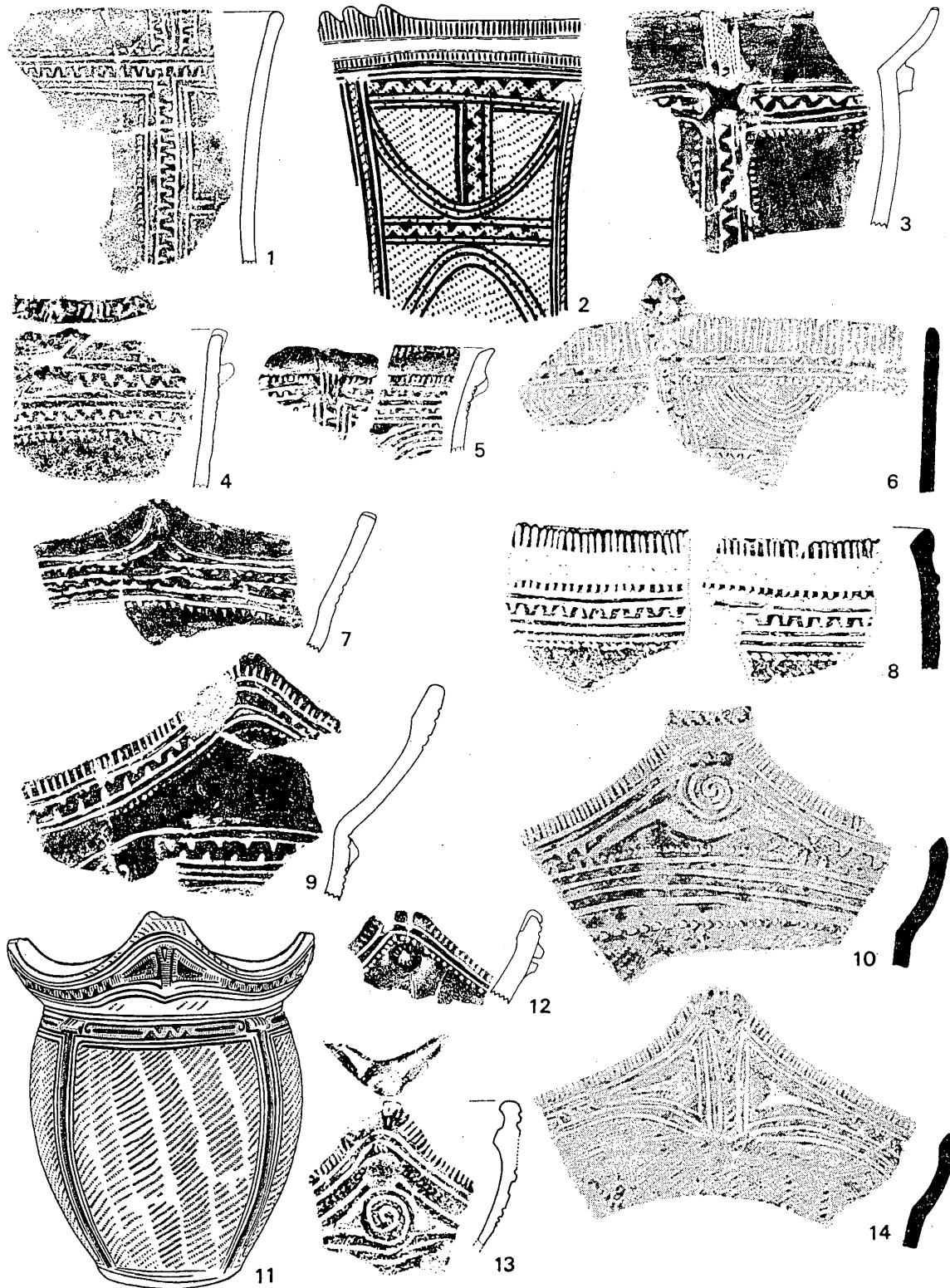
1, 3, 5~8: 茨城虚空蔵, 2: 茨城沖餅, 4: 千葉藤沢, 9, 10: 千葉高根北



第20図 東関東の五領ヶ台Ⅱ a式? (1~7), Ⅱ b式 (8~10)

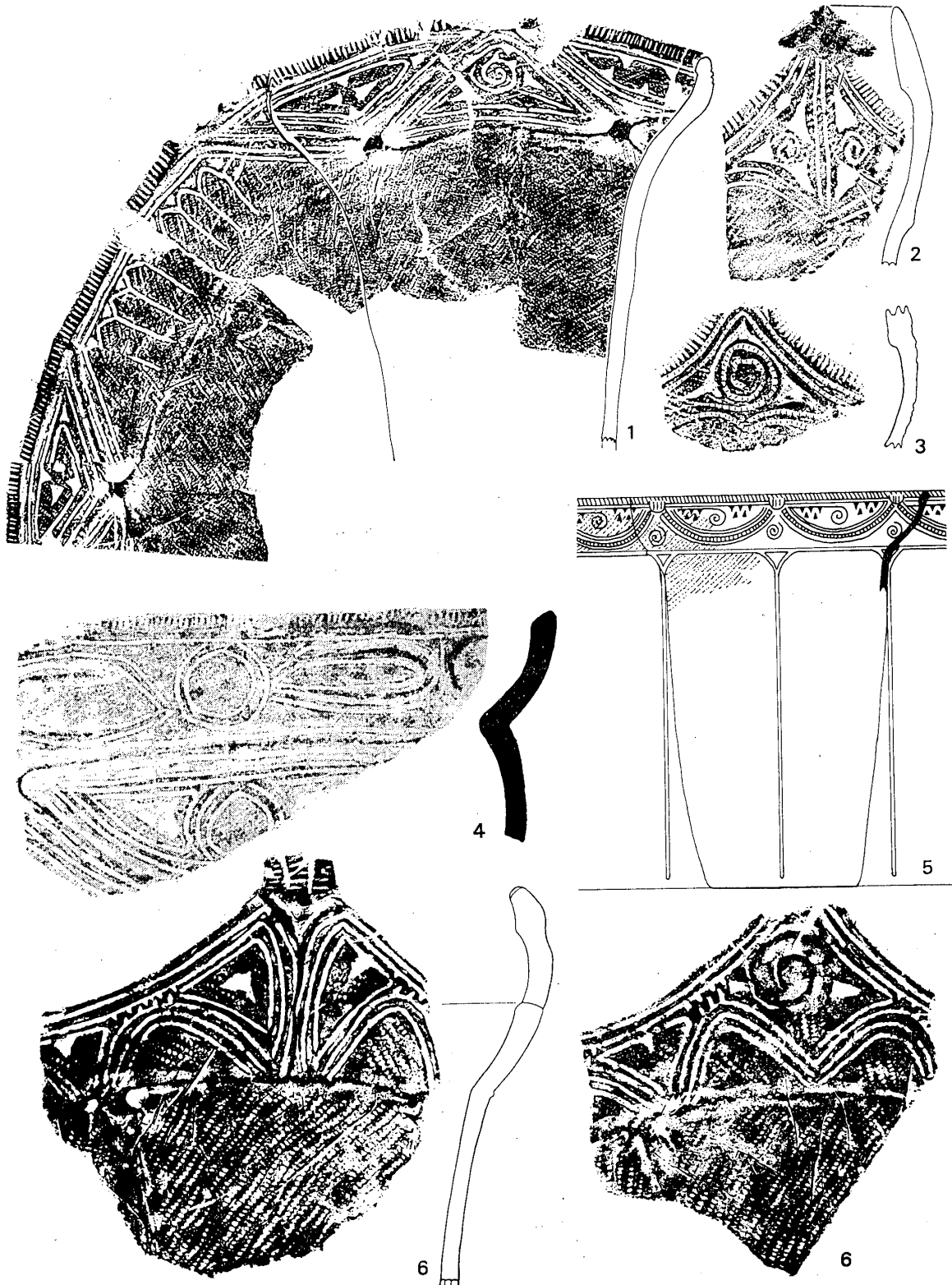
1, 3, 5 : 神奈川宮の原, 2 : 千葉八辺, 4 : 千葉高根北, 6 : 茨城虚空蔵, 7 : 東京柵田第Ⅳ, 8 : 静岡柏窪, 9 : 千葉雷, 10 : 神奈川池辺第4 (実測図1/6, 拓本1/4, ただし2は1/6)

五領ケ台式土器の編年



第21図 東関東の五領ケ台Ⅱb式 (13, 14はⅡb式またはⅡc式)

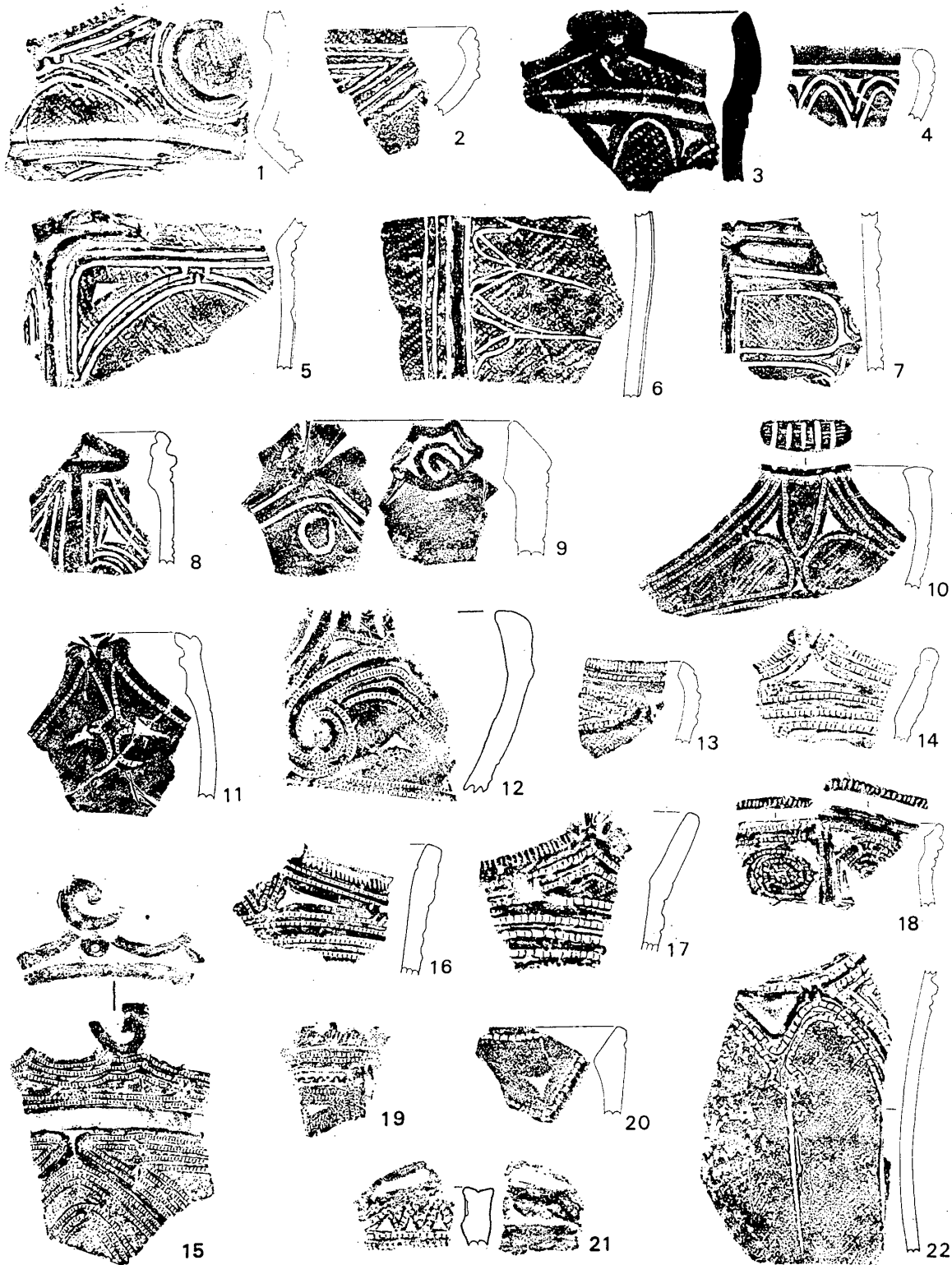
1：茨城吹上，2：神奈川五領ケ台，3，7，9，12：神奈川宮の原，4：千葉飯山満東，5：神奈川山之台，6，10，14：千葉雷，8：埼玉大谷場，11：千葉後貝塚？，13：東京狐塚



第22図 東関東の五領ヶ台Ⅱc式（Ⅱc式と竹ノ下式の境界は明確でない）

1：茨城虚空蔵，2：茨城竹ノ下，3：千葉置里，4：千葉雷，5：茨城吹上（竹ノ下），6千葉北羽鳥

五領ケ台式土器の編年



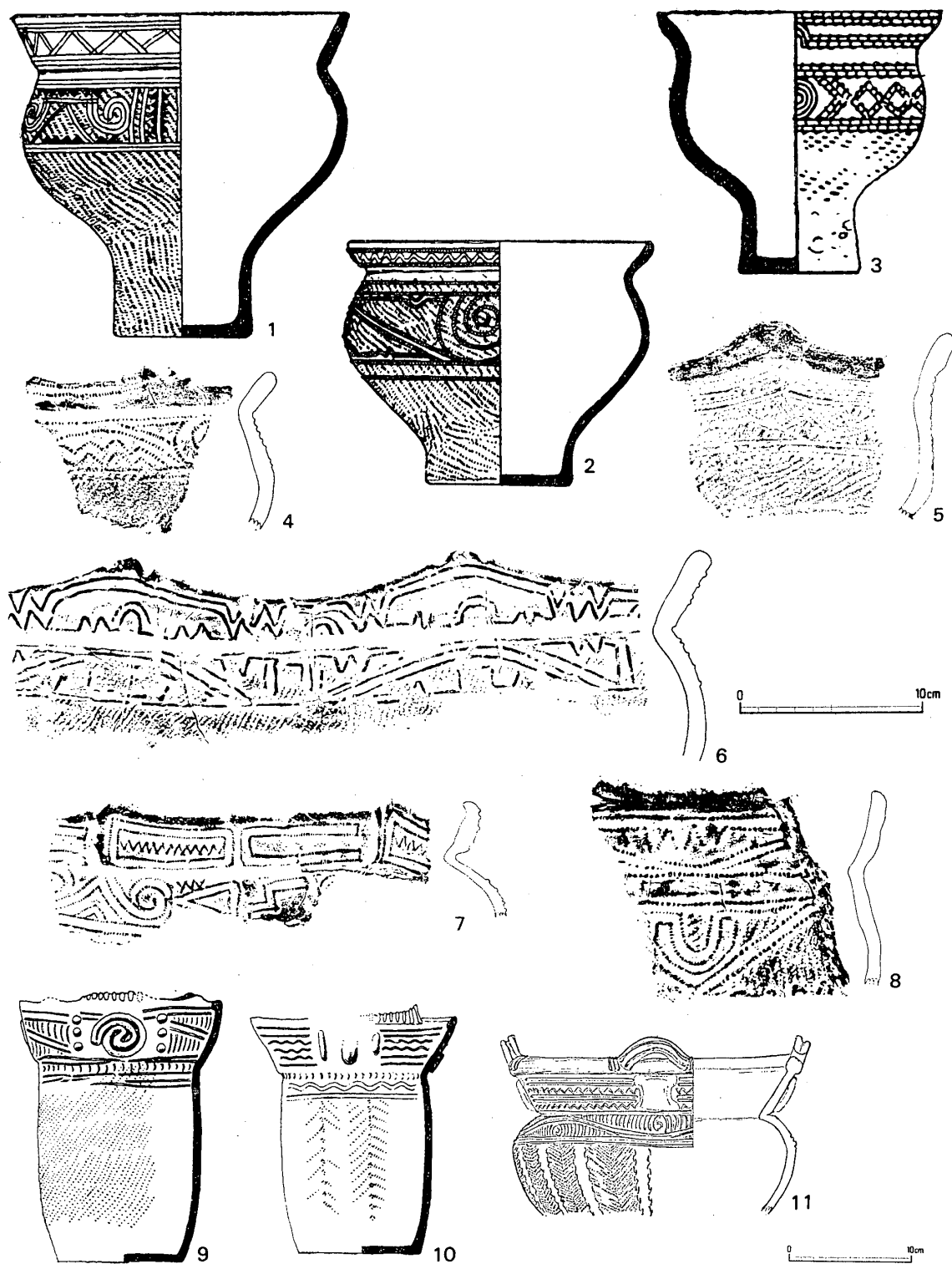
第23図 II c 式または竹ノ下式または神谷原式 (1~7), 竹ノ下式または神谷原式 (8~22)
 1, 2, 4~11, 13, 18, 20, 22: 茨城竹ノ下, 3: 栃木何耕地, 12: 千葉置里, 14, 21: 千葉復山谷,
 15, 19: 千葉加茂, 16: 千葉中野久木, 17: 千葉清水谷



第24図 竹ノ下式

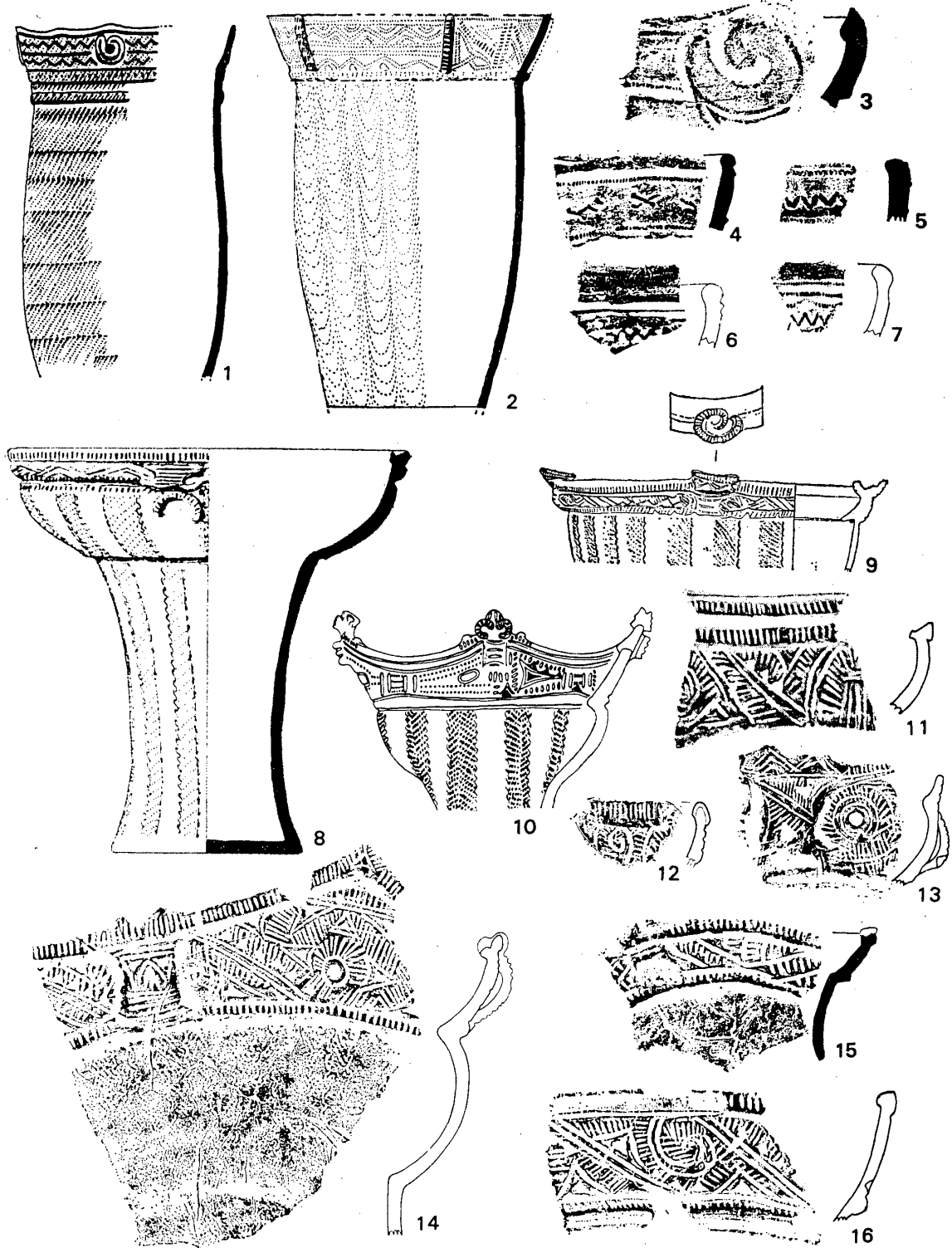
1, 5, 6, 9: 千葉雷, 2~4, 7, 8, 10~15: 茨城竹ノ下

五領ケ台式土器の編年



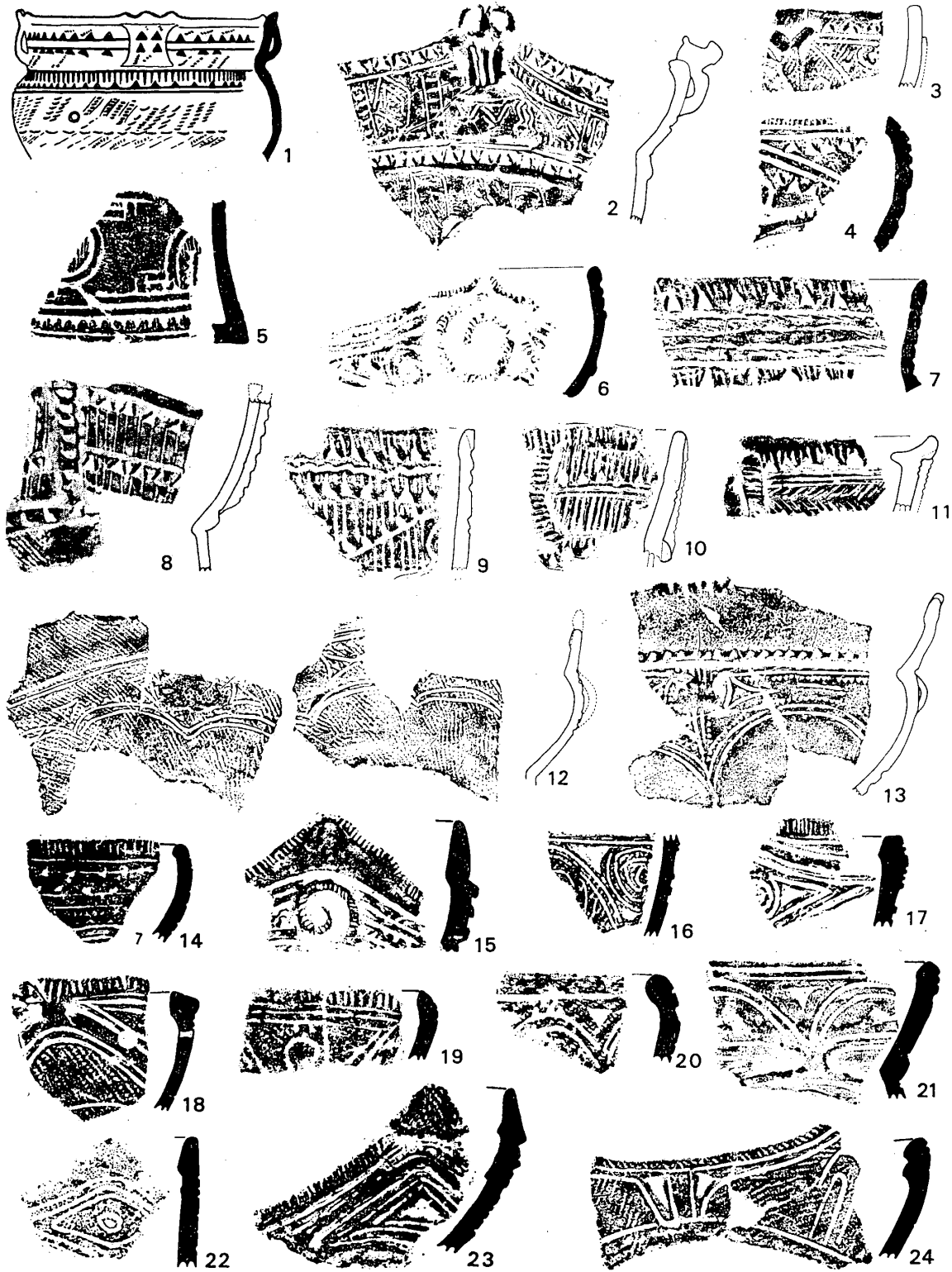
第25図 大木6式中葉（1～8），大木6式後葉（9～11）（大木6式の組成の一部をなす関東と近似性の強い土器を選んで示した。）

1～3：山形吹浦，4～7：宮城長根，8：岩手天神ヶ丘，9，10：岩手中島，11：岩手清水
（11は縮尺不明）



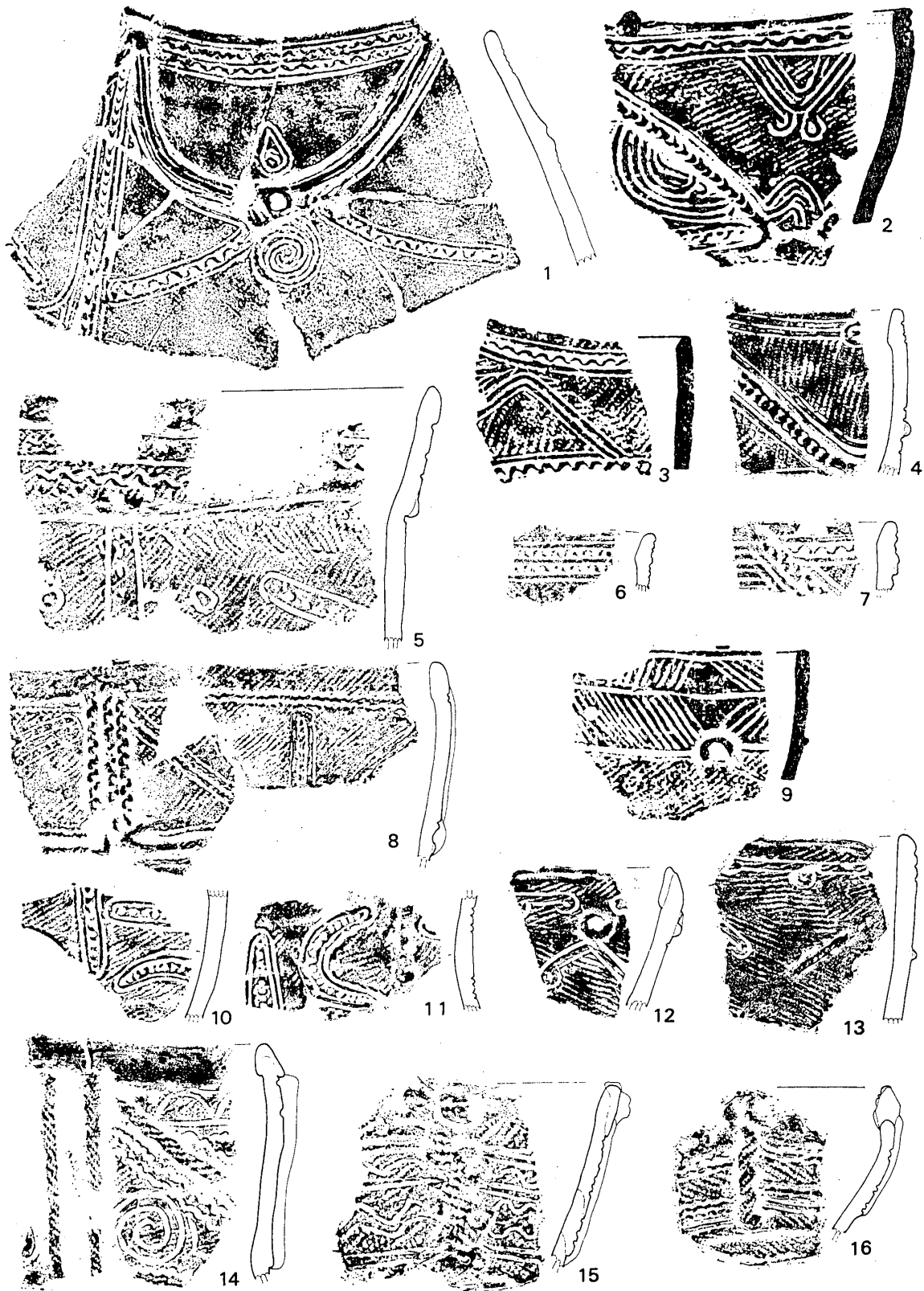
第26図 大木6式後葉(1~7), 五領ケ台I a式並行(糠塚式)(8~16) (1, 2は円筒下層d式の影響を受けた大木6式, 他は大木6式と糠塚式の組成の一部をなす関東と近似性の強い土器を選んで図示した。) 1, 2: 岩手中島, 3, 4, 15: 福島長久保, 5: 福岡上原A, 6, 7: 福島刈摩山, 8: 岩手畑井野, 9: 岩手清水, 10: 岩手天神ヶ丘, 11: 岩手大陽台, 12: 岩手大館町, 13, 14, 16: 宮城長根

五領ケ台式土器の編年



第27図 五領ケ台式Ⅰb並行? (糠塚式) (1~11), 五領ケ台Ⅱa式並行 (未命名) (12, 13), 五領ケ台Ⅱb式 (14, 15), Ⅱc式 (16~20), 竹ノ下式または神谷原式 (21~24)

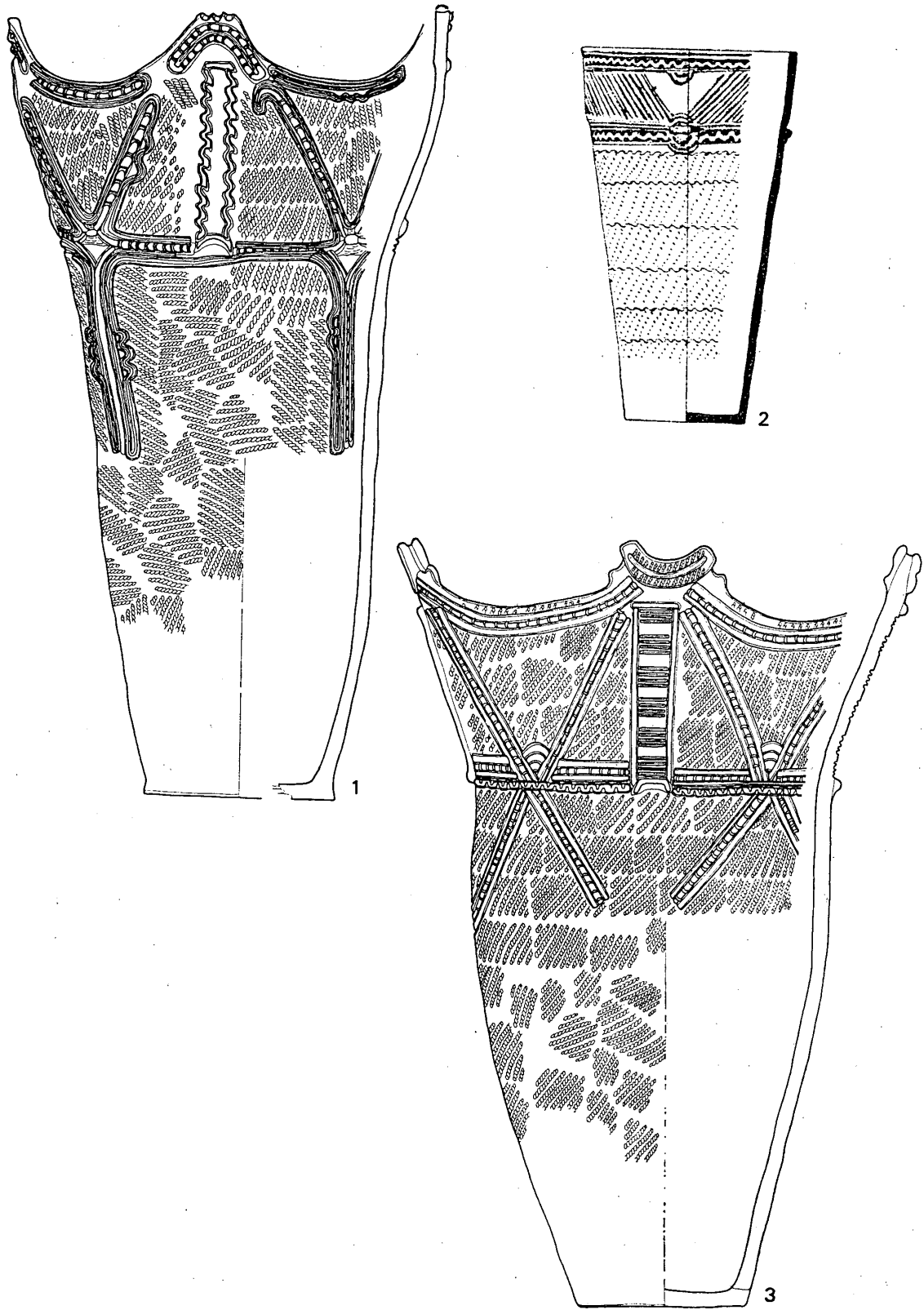
1, 4, 6, 7: 宮城糠塚, 2, 3, 12, 13: 宮城長根, 5: 秋田イカリ, 8: 岩手大陽台, 9~11: 岩手大館町, 14~24: 福島壇ノ腰



第28図 五領ケ台Ⅱb式, Ⅱc式, 竹ノ下式並行(大木7a式?)

1: 岩手天神ヶ丘, 2, 3, 9: 岩手畑井野, 4, 5~8, 10~16: 岩手大館町

五領ケ台式土器の編年



第29図 五領ケ台Ⅱb式, Ⅱc式, 竹ノ下式並行 (大木7a式?)

1, 3 : 岩手大館町, 2 : 岩手畑井野

Chronological Study of the Goryōgadai Types of Jōmon Pottery

Keiji IMAMURA

The Goryōgadai type of pottery was first discerned on material from a shell mound of this name in Kanagawa Prefecture by S. Yamanouchi in 1936. He placed the type at the beginning of the Middle Jōmon period of the Kantō district.

In 1968, the author excavated a new type of pottery from the Miyanohara shell mound, Yokohama City and proposed to call it Goryōgadai I, renaming the former Goryōgadai type Goryōgadai II, since the pottery from Miyanohara had some resemblance to the Goryōgadai material as well as older features.

In the present paper, he further divides Goryōgadai I into Ia and Ib, Goryōgadai II into IIa, IIb and IIc, followed by a further phase composed of three local types (Table 1). He deals with western Kantō and eastern Kantō in separate chapters because of distinct local colours. In the third chapter, he outlines the chronology of the Tōhoku district which has close relations with the Kantō district in this phase. Most of the pages of this paper are spent on the description of the attributes of pottery; vessel forms, decorative patterns, layout of patterns on the surface, explanation of their respective changes, and the distribution of each type.

As we do not have enough stratigraphical data to establish such a detailed chronology, this study has to depend mainly on typology. Particular attention was paid to the following points to avoid subjective interpretations into which typological studies are liable to fall. (1) Consecutive changes of subdivided types. (2) Sites which yielded much pottery belonging to only one subdivided type as evidence for temporal separation. (3) Sites which yielded some subdivided and consecutive types together as collaborative evidence for close temporal positions. (4) Coincidence of distributions of some types as evidence against the possibility of contemporaneousness of local types. Although these considerations are not original for this study, but basic for chronological studies, abundant material produced by many salvage excavations in recent years, has enhanced the probability of this method of study.

The new chronology makes it possible to trace exactly the transition of pottery from the Early period to the Middle period. Before subdivision, the Goryōgadai type was only one of about 50 types or phases established in the chronology of the Kantō district. It is

astonishing that even such a small fraction of Jōmon pottery experienced typological changes in so many steps.

We must also turn our attention to local colour. Though the situation is not simple, we can recognize two distinctive traditions in Central Japan; Goryōgadai in eastern Kantō and Odoriba in Nagano Prefecture, Central Highlands. There is another local Goryōgadai tradition in western Kantō which is not completely consecutive on account of strong influences from the Odoriba tradition. In the phases of Goryōgadai Ia and Ib, the Goryōgadai type and the Odoriba type coexisted in an extensive area from western Kantō to the Central Highlands. In the IIb phase, a hybrid type prevailed in this area. In the next IIc phase, however, the Goryōgadai type extended its distribution from eastern Kantō to the Central Highlands. And in the next phase, the Ōishi type which was strongly influenced by the Hiraide 3A type (descendant of the Odoriba type), invaded the Kantō district. Rapid changes in the pottery of western Kantō appear to have been caused by alternative influences from neighbors on both sides.

Criticism levelled against detailed chronological studies of Jōmon pottery points out a disregard of human beings in favour of pottery, or that it is our only aim to complicate the chronological tables. Irrespective of this criticism, it is a historical fact that Jōmon pottery underwent a great many changes. Abandonment of detailed chronological study only means giving up to recognize the realities of Jōmon pottery.

We think that pottery faithfully records the past; the chronological stages, local traditions and possibly traces of immigration or social organization. If we want to glean the activities of the Jōmon people from this record, exact temporal arrangement is indispensable, because we cannot read a book with its pages out of order.